

第4編

集落と人口



山の中腹に発達した中之倉の疎村集落

第一章 総説

第一節 集落の歴史

一 集落の発生

人類は、ある地域に集まって共同の社会生活を営むのが普通である。人類がこのように集团的に居住している状態、いいかえれば、いくつかの住居が集まって、それぞれの生活を展開している場所を集落という。

狩猟生活を送っていた先史人類であっても、食糧の確保、外敵からの防御のため複数以上の群れを形成していた。さらに米づくりが始まり、立地条件によっては焼畑農業が始まり、いわゆる狩猟生活から農耕生活に移行するにつれて、人類は一定の土地に定住を始める。ここに必然的に集落が形成され、古代社会が生まれる。そして、共同体としての社会維持のため、また、外敵から自己の社会を守るため、一定の秩序が必要となりその単位集落を統率するリーダーを必要とするようになって、必然的に集落の統率者が生まれる。

二 集落の立地条件

集落は、先ず前述のような生活の必要性から、一定の立地条件のもとに発生した。古代は耕地の得やすい泉や、川のほとり、日照に恵まれたゆるやかな南面傾斜地が集落立地として選ばれた。そして支配、被支配の関係が階級的格差を生じ、一方、井戸掘りや灌漑、排水技術が進歩し、人口が増加するにつれて、集落の立地状況は多様化し、台地、扇状地、山地、さらに低湿地にも集落が形成されるようになった。一般に山地では南向きで、日照時間の長い斜面や、平地に面した南向きの山麓が、扇状地では、

扇頂と扇端の湧泉列が、台地では宙水のある井戸の掘り易い地区や、人工的な水路に沿った地区が、段丘では段丘崖下の湧泉地が、低湿地では自然堤防などが、集落立地として選ばれた。

三 農村集落と都市集落

このようにしてできた集落社会は、大別して都市と農村にわけられるが、いうまでもなく、都市と農村は集落ができた最初から分類され、そのまま現在に至っているものではない。

人間の集落社会は、原始時代においては一樣に農村的であった。都市が生まれるためには、生産力がある程度発達することを必要とした。人間が耕して、その生産物を全部消費し、自分で着るものをよく調達するような段階にとどまり、完全に自給自足の生活を余儀なくされている場合には、都市は成立し得ない。生産の手段が高度化し、生産力が高まって、生産物に余剰ができて、他の地域に供給できるようになると、そこに政治的支配者が生まれ、商工業者が生まれる。そしてそれらの支配者や、商工業者の人々が居住する集落として、都市的集落が作りあげられる。このようにして、都市は一定の生産力の上昇とともに生ずるが、その都市の発生以来、都市と農村という二つの集落形態は、人間の社会生活の基礎的な単位地域社会として今日に至っている。そしてこの都市的集落と農村的集落とが一国をつくり、広くいえば、人類社会を形成しているのである。

四 都市集落と農村集落のバランス

人間社会におけるこの二つの集落の比重は、人間の歴史の展開とともに変わってきた。都市集落の発生は古代社会までさかのぼることができるがこれを産業構造面から見ると、都市集落が全体の社会に占める比重は、現在よりはるかに軽く、農村集落の比重の方がはるかに重かった。また都市集落自体の性格も、現代都市のような性格よりも、農村の性格に近かった。さらに都市と農村のつながりも一面的であり、比較的孤立的な生活

が都市、農村、それぞれの共同体で行われていた。

ところが近代になると、都市の比重は急に重くなり、一国の人口の中で占める都市人口の割合は、爆発的に増えてきた。都市は、農村人口の流入によって膨張し、商工業は急激に発達して農村は、都市への人的、物的資源の供給源となり、先ず経済的に都市へ従属する形となってきた。

また、都市集落が政治的支配者、商工業者の居住集落であるという形成過程からも、都市と農村との結びつきの多面化と合わせて、政治的にも経済的にも都市集落が中心となり、農村集落はいっそう強く都市に従属するようになった。

このように、同じ人類の居住群である集落ではあるが、その性格は全く異なり、対象的な要素を強くもつようになった。

第二節 農村集落の特質

一、農村集落の特質

集落を都市集落と農村集落に大別すると、下部町は農村集落といえる。そこで一般的に考えられる農村集落の特質について、考察してみる。

現在の農村は、高度に発達した資本主義社会機構の中に組み込まれ、都市と多面的に強く結びついているために、典型的な特質はうすれている。特に下部町においては、農業的立地条件の劣悪さからいってこの傾向は強い。そこで、昭和初期頃までの農村について、一般的な特質について考えてみよう。

(一) 集落の規模

農村集落は、何よりもまず、土地に強く結びついている。農業(林業)の性格上、都市集落の人々に比べてはるかに永住的であり、定着性をもっている。

長い世代にわたって先祖伝来の家に住み、先祖伝来の土地を所有している人が多い。その生産は第一次産業であり、生産に必要な土地は、他の産

業に比してはるかに広大な土地が必要である。したがって人口密度は小さく、集落も比較的小さい。

(二) 対人関係

小さい集落で永住的であることから、農村集落の人々は、長い年月を重ねて、よく知り合った人々とともに社会生活を営んでいる。

また資本主義経済の発達と共に商品経済の中に巻きこまれたとはいえ、経済的な自給自足性はまだ残しており、生産と消費が完全に分離はしていない。このように多分に自足的であるだけに、農村の人々が接触し、交渉する範囲はおのずから限定され、社会関係の大部分は同じ村人との間に結ばれ、その関係は全人格的な、永続的なつながりとなる。

田植えを共同するのも、農具の貸借も、冠婚葬祭の手助けも、講で飲食を共にするのも同じ村人であり、隣人である。

また歴史的にも、封建領主の行政上、村落共同体的性格を多分にもたされ、特に年貢の取りたてや、五人組制度に見られるように、集落構成員は互いに運命共同体的なつながりをもってきた。

しかも、その関係は必ずしも対等の関係ではなく、長い世代を通してつくりあげられた身分的な、上下関係としてあらわれることが多い。

具体的にいえば隣人関係や、親族関係、贈答関係や、労力交換関係などが重複している上に、地主、小作関係や、雇用関係、大家、新家の関係などが表裏していることも多い。

(三) 同族団関係

農村集落における対人関係上、見のがすことのできないものに、同族団関係がある。

同族団とは、いわゆる本家、分家の関係にある家の結合で、本家を中心に各種の社会的機能を営む集団である。

この社会的機能とは

一 同族共祭の氏神や、先祖の祭祀、冠婚葬祭や、建築、屋根ふきなどの協力の場合。

二 家の相続や分家、はては家財の処理から縁組などの場合の協議や、協力。

三 農耕その他経営上の互助。

四 被政治的協力。

等のもがある。

同族団の結合力の強い場合は、これらの機能をあわせて営んでおり、本家はその中心として権威的統制を行っていた。

現在では、しだいにその結合力を弱め機能を失いつつあるが、昭和初期頃までは、重要な社会的意義をもっていた。現在でも、機能は弱まっているとはいえ冠婚葬祭、氏神、先祖の祭祀等伝統的風俗慣習に、いわゆる仁義として、根強い関係を残している。

同族団とは学術用語で、実際の呼称としては

東日本では

「まき」「いっけ」（いっけまき）「じるい」「うちわ」「やうち」など、

西日本では

「かぶ」「かぶうち」「まき」「いっとう」「どうけ」などと呼ばれ、

本家も

「もとや」「ほんや」「おやえ」「おおや」

分家は

「かまど」「わかれ」「しんや」「わかされ」「あらや」「にいえ」

「いえもち」「でいえ」「じわけ」「へや」世帯主を譲って別居すると

「いんきよ」などの呼称で呼ばれる。

これらの呼称はすなわち、本家となる家から分岐した諸家の一団であることが示されている。

この分岐は、直接分家から孫分家へとつぎつぎになされてゆくから、かなり大きく発達する。

これらの分家には血縁者に家をもたせたものと、非血縁者のそれがあり、前者は同族員の主要構成要素で、後者は雇人や外来土着者などが多い。そしてこれらの間では家姓、家紋・氏神・寺院・墓地などを共同にすることが多い。また分家は、普通家産の分与を受ける。その物件の種類は地方の慣例や、分家となるものの身分立場に応じて一様ではない。

しかし、この家産分けは、おおむね家の独立を確保するに足りないから、本家へのさまざまな依存を必要とする。本家は、その経営や家政にかなりの労力その他を要するので分家はそれを提供する。このようにして、同族間の協力互助が行われ、また各種の交ぎ贈答も慣行化される。本家はこのような扶養、協力、交際の中心とならなければならぬ。このような関係は時代をさかのぼるにつれて強く、本家の政治経済力もさらに強く、これに対して、分家の社会的独立度は低かったと考えられる。時代が下って一般に社会生活の近代化が進むにつれて、本家の政治、経済的統制は弱められ、分家の独立度は高くなり、同族団の機能はようやく儀礼的、交ぎの生活面に、伝統的慣行が持続されている状態になる。現在の下部町に見られる同族団（じるい）関係はこの状態と思われる。

このような同族団（じるい）は、長く日本社会の基礎構造に関連し、農村集落の発達過程に大きくかかわり、次の性格構造に深くかかわって、農村集落の大きな特質といわなければならない。

四 社会的性格

小規模集落、閉鎖的対人関係、血族的従属的同族団関係等の特質をもつ農村集落においては、農民は生まれた地域で家業を営みながら、家業のしかたを覚え、村の生活の中にとけこみ、生活習慣を受けついで成長し、村人としての生活を送り、その土となっていく。ここでは伝統的秩序や、旧来からの慣習が強い力をもつのも当然である。

旧来のしきたりに従って生活することが最も安全であり、まちがいがないと考えられ、非合理的な因襲も変更することが難しく、これをあえて合理化しようとする、強い抵抗を受けざるを得ない。すう勢に順応し、伝

統的な構成によりかかる生活が無難であると考えられ、近隣や親族の間に積み重ねられてきた義理が重んじられ、村人の目を恐れて、世間体が重視される。

このようにして、そこに形成される人間は自主性を欠いた性格を身につけ易く、主体的行動性をもった人間は形成されにくい。村人の賞賛や非難に左右されて行動する人間になり易い。そして人間の欲求をおさえ、出処進退を誤らないように分相応の生活を続けていくとき、そこにあきらめが形成される。さらに生活の関心がせまい地域社会に限られるとき、あきらめになれた村人は、外部から加えられる政治権力も、どうすることもできない自然力のように受け取り易い。

このような状態は、資本主義経済の発展が農村社会をまきこんで以来、相互共助の反面、嫉妬しどやさい疑の心を強くしたという矛盾的性格を生んできた。

小農は零細ながらも土地をもち、農具や家屋を含めて生産手段の所有者であり、また自ら家族員とともに額に汗して働かなくてはならない労働者でもある。この二重性格は保守的な面と進歩的な面を同時に持たせるが、身についた所有欲はとかく保守的な面になり易い。そのうえ前述のような同族集団のつながりも無視しがたいことと、その社会的しくみのゆえに自由な行動をとりにくいことは、絶えず進歩的な面を冷却する条件となる。特に「耕していきさえずれば、食っていきける。」という生存の保証された強みが農村集落（社会）の進歩にとっては弱みに転化しやすい。小農村社会における集落構成員の保守的性格は、このように深く、強く根をはっている。

ちなみに保守的性格の残根は、相互共助とすると、さい疑の矛盾的性格とともに現下部町においても、なお残る農村集落の特質といえる。

二、農村集落の特質の変化

(一) 集落の質的構造の変化——(都市化現象)

農村集落は、以上のような小農社会の特質を長くもち続けてきた。それは明治以来、日本の資本主義の発展をささげてきたのであり、この下積みの犠牲をしいられたことが農業生産力の停滞と、農民生活の窮乏をもたらした。

ちなみに約六十三年前の大正五年、山梨県志編さんが採収した、久那土村取調書、衣食住の項に次のような記載がある。

「住宅、草屋根粗造ナルモノ多シ、土蔵ハ瓦葺白壁塗モアリ、労働服ハ筒袖、股引。女子ハ筒袖襷掛ケ半々位ナリ。

日常生活ハ俵餅ニ『朝焼餅に、昼素麦、晩にやまたおぢや、ほうとう、これがおきまり』ト云フハ真ニ穿チエタルモノナリ、(筆者註、素麦とは、大麦をついて表皮をとり、それを、一、二時間かけて煮たうえ、更に残り火の上に数時間かけたままにしておき、むして米飯状にしたもの、食べ易くするために、別にみそをすり、湯でのばしてみそ汁状にしたものをかけて、たべたりした。

焼き餅とは、円熟して、固くなったトウモロコシを石うすでひいて粉末にし、これを湯でこねて厚さ一〜二センチの小判状に固め、いろりの灰の中へ入れて、むし焼きにしたもの。

尚このほかに、ネリモチと称して、甘藷を輪切りにして煮たうえ、これに、そば粉、またはモロコシ粉等を加えて、つぶして、キントン状にしたものを朝食の常食ともした。

祭典、招客ノ場合モ、手作物ノ手料理ハ、河内領一般ノ掬ラシイ、又赤飯、餅、饅頭マンダウ、牡丹餅等デ振舞ヒ、大々、強イテ飽食セシムルヲ快トセラル。

と当時の食生活が赤裸々に記述されている。いかに生産性が乏しく、貧しい生活をしいられていたかをうかがい知ることができる。このような貧しさは、前記のような特質とあいまって、いわゆる封建的性格を残存させてきた。

農家の家族制度は、個人より家を重視し、家長とその後継者である長男

の地位を高め、婦人の地位を低いままにとどめてきた。そして本家、分家の関係において本家の優位を認め、これを中心として結びつく同族団の結合を維持してきた。

用水や共有林野などによって結束させられた村落は、共同体的性格をのぞから持つものであるが、それは地主制のもとで、その権威的支配によって強化された。小作農民は地主に対して、身分的に従属せざるをえなかったからである。

このような封建的性格は、第二次世界大戦後の諸制度の改革を経ることによって著しく薄められた。

民法の改正は家族制度の崩壊、婦人の地位の向上、生活単位の変化をもたらした。

農地改革は、地主制を解体させ、経営規模の大小は残ったけれど、ほとんどすべての小作農民を自作化し、地主との身分的従属関係から解放した。

共同体としての村落の中に埋没していた農民が、戦前に比して、はるかに自由に行動できるようになった。しかし、このことは農村集落を、明るい民主的社会にしたことを意味するものではない。

戦後日本の農業は、確実に生産力をのばしていった。しかし、生産がのびて収量が増大したにしても、経営耕地が一ヘクタールにみたない条件は、日本の農業を決定的に制約する要因として、作用しつづけた。

しかも、戦前、あまりにも低かった農村の生活水準は、都市化の影響を受けて年とともに上昇した。この生活水準は、農業所得だけでは維持することはできなかつた。農家は農外収入を求めて兼業農家への道を歩むようになった。

このことは昭和三十年前後に始まる日本経済の成長過程の中でいっそう明らかになってきた。工業の高度成長の結果は、農工間の所得格差を開いていった。農業生産が伸長しても、日本経済全体の著しい成長がもたらした消費水準の上昇には追いつけなかつた。農村からは、急速に労働力が都

市に移動し、農村にとどまるものも、農業を老人と主婦にまかせて、農業を兼業とする者が数多くみられるようになった。

戦前においても半数の農家は兼業農家であったが、その兼業の大部分は、自営兼業、人夫、日雇いなどであつて、その就業の場所は、主として自己の所属する集落（村内）また隣接集落であつた。専・兼業の別はあつても、地主支配のもとでまともなことができた。

ところが地主制が解体し、地主を中心とした結集がゆるんだ戦後では、専業、兼業、非農家という経済基盤を異にする家々を、ひとつにまとめあげていくことは不可能に近かつた。

また、農業以外の収入が増え、むしろこれが家計の主体となるにつれて、同族団の本家、分家の関係は経済的依存や協力的関係はなくなり、過去における血縁的つながりを示す、同姓集団の性格を残すだけとなつた。

こうして集落の質的内部構造は全くといつていくらい変容してきた。下部町のように面積の八一・五％が山地で、わずかに四・八％。六二七ヘクタールに二、三三八世帯がひしめく立地条件では、農業規模の零細度は著しく、このような特質の変容は非常に激しいものがあり、小集落（単位集落）の立地状況によって変容の程度、状況には大きな較差が見られる。

しかし前段でのべたような封建的特質はなお残存し、各集落に同族団のつながりが「じるい」「いっけまき」（なまつて——いっけんまき——）という呼称でいくつも現存し、冠婚葬祭、交際、贈答関係に伝統的しきたりとして生きている。

(二) 集落の消滅（過疎化現象）

資本主義経済が発展し、農村も商業経済にくみこまれて、消費生活水準が向上し、都市との較差を縮めたことが兼業農家を殖やし、農業以外の収入が、家計の主体になってきたことは前章で述べたが、一方都市における工業の発達は、多量の労働力を吸収して、農村人口は大きく都市に流れていった。

まず、農家の後継者が家を継ぎ、いわゆる兼業農家として集落内にとど

まり、二、三男が若くして都市に移動していった。この傾向は、維新以後近代化をなし遂げた日本の都市と農村との依存関係を、定形化してきた。都市は農村の安い労働力を基盤に、資本主義経済を急速に発展させ、農村はその労働力の供給源として、経済的に益々従属関係を強めていった。農村人口は固定化し、農家もほとんど減少しなかった。

明治維新以来、昭和二十年代まで、日本の農家数は五五〇万戸ぐらいから、自然増的カーブで六二〇万戸（昭和二十二年）と、大きな変動は見られなかった。

しかし、昭和三十年代に至って、日本経済が高度成長をとげる過程で、農家数は大きく変動していった。

農家後継者が村落内にとどまっているところは農家数の変動はなかったのであるが、経済成長が大きくなり、農村の都市化現象が進行するにつれて、二、三男だけではなく、後継者までが離村する傾向を示してきた。

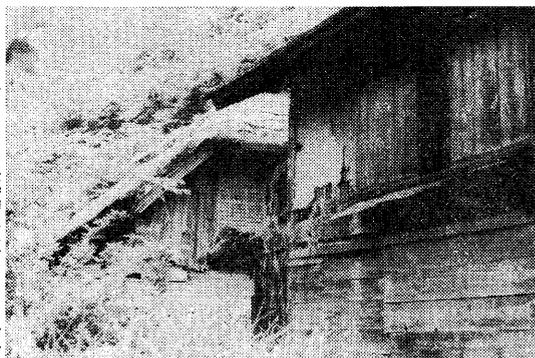
そして、この傾向は都市近郊のいわゆる郊村集落ではなく、山村の疎村集落や荘宅集落に強く現われている。

狭少な耕地、建築用外材の輸入の増加をはじめとして家庭燃料など生活様式の変化にともなう林野生産物の需要減、他方、地方小都市近在では通勤兼業の就業収容力も限界があり、都市化する消費水準を維持することができないばかりか、最低生活の維持さえ困難となってくる。

このようにして、挙家離村の形で、農家数は減少していき、戦後六二〇万戸を数えた農家も、昭和四十五年には、五三四万戸と明治維新前後の数を割るまでになった。

このような離村は、離村した人々が、都市で安定した生活を営むことができ、農村にとどまる農家が経営規模を拡大して、いっそう合理的な農業（林業）経営が営めるようになることとすれば、また歓迎すべきことである。

しかし、前述の山村集落や下部町のように半農半山村集落では、立地的に不可能であり、また都市が離村者の生活を安定してくれる保障は全くない。典型的な農村であっても、特種園芸農業やらく農の立地条件に備えて



消滅した集落に残された廃屋（下折門）

れるという、消極的離村としか考えられない実態があるからである。

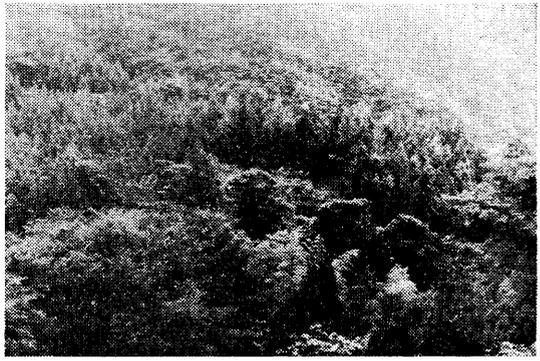
このようにして農山村集落、特に山村における疎村集落、塊村集落に形態分類される集落の中には、すでに集落としての機能をなくし、あるいは集落そのものが消滅してしまったものもある。

下部町はその立地条件が、町の大部分が山地であり、町内に流れる樋田川、三沢川、反木川、常葉川等の河川沿いに開けるわずかな水田と、山深く耕したわずかな耕地という劣悪条件であり、集落もそれら河川及びその支流に沿った列村、路村山地に転在する小塊村、疎村であり、過疎化現象はこれら劣悪な条件のもとで、逃れられないものであった。そのことは後述する人口動態にも明確に表われており、古閑地区の折門、下部地区の桃ヶ窪、川向、大子等、山地疎村集落にはすでに消滅した集落もあり、また残存家屋が孤立化し、集落としての機能を失った久那土地区道の柵尾や下大山の集落などに見られるように過疎化現象は深刻化している。

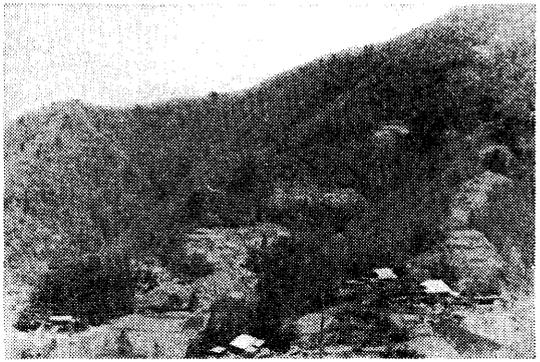
以上、集落について一般的にその形成と、特質を考察してきたが、その

いる所は別として、単一作物農村においては、農家数が減っても、それが、残った農家の経営の安定に作用することはない。そのために離村も個人的に行われ、出かせぎというゆがんだ形をとることが多く、挙家離村が、農業構造の改善にむすびづくような形では行われなかった。

農民離村という言葉が、暗い語感をもってうけとられるのも、それが積極的に新しい生活の場を都市に求めるのではなくて、農山村における自己の村落内の生活が破綻して離村せざるを得なくなつて押し出される所は別として、単一作物農村においては、農家数が減っても、それが、残った農家の経営の安定に作用することはない。そのために離村も個人的に行われ、出かせぎというゆがんだ形をとることが多く、挙家離村が、農業構造の改善にむすびづくような形では行われなかった。



消滅し、すでに家屋もなくなった川向部落跡



単独戸となり集落機能をなくしたもと集落（下大山）

都度、補足的に述べたように下部町の各集落も、この一般的原理性からはなれたものではなく、全く同一の過程を通り、同じような特質を内包しているといつてよい。

第三節 集落の形態

集落の形態は、その集落の地域性を理解するうえで必要なことである。家屋形態やその配列、道路、水路などの結びつき、耕地や漁場、広場や港なども、広い意味での集落形態の中に含まれる。しかし、重要なのは家屋の密集や散在、あるいは、その配列の状態などである。

一 形態的分類

第一章 総 説

家屋の集合状況から分類すると、一般的には次のように分類される。

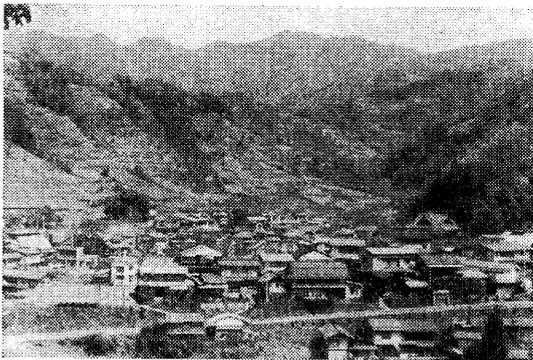
(1) 集村 家屋が多く集まって集落を形成しているもので、更に次のように分類される。

イ 塊村 一定地域に、または不規則な道路に沿って、家屋が不規則にかたまっている状態

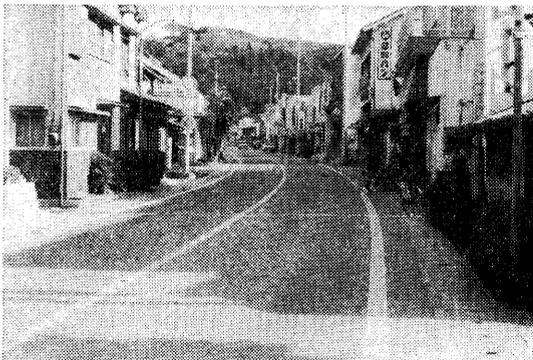
ロ 列村 道路等に沿って細長く線状に家屋がならんでいる状態でこれを更に次のように分類することが便利である。

① 街村 主な幹線道路に沿って街道に依存して発達した集落で、古くは宿場町や門前町等として発達した。現代的に商店街などが分類される。次の路村とは民家の内部機構及び道路への依存度によって、性格が区別される。

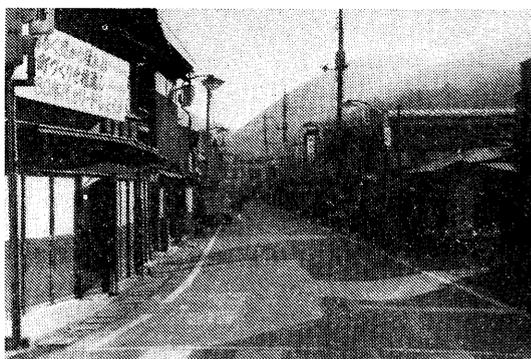
② 路村 道路または用廃水路などによって家屋が配され、その背後には畑地、水田、山林、原野等が、長方形様に地割され、道路



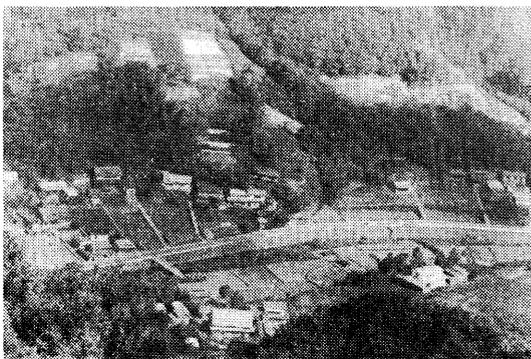
塊村形態を示す集落（古関）



街村形態の集落（三沢）



街村形態の集落（常葉昭和組）



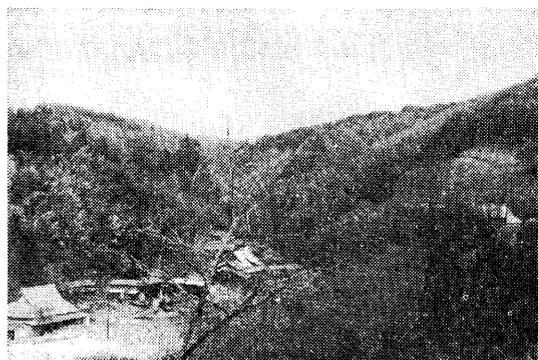
路村形態をとる集落（道部落の一部）

への依存度が生活基盤としてはうすい性格をもつ集落
 (2) 散村 家屋が分散した集落で、更に次のように分類される。

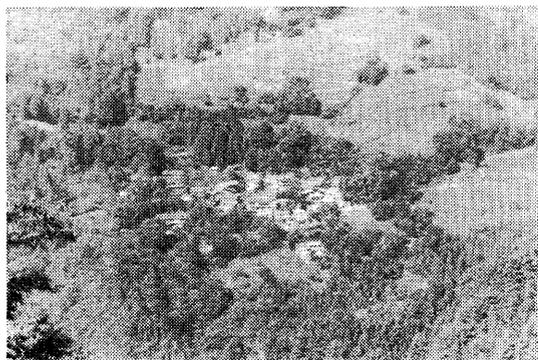
イ 疎村 数戸がまとまって散在しているもので、扇状地や、台地に見られるものと、山地、丘陵地に見られるものがある。下部町
 の疎村集落は後者に属する。

ロ 孤立荘宅 各個が独立して分散している集落で、平野村に見られる。ほりせめぐらした環濠集落や、林や生垣築地をめぐらせた垣内集落があるが、下部町には余り見られない。特にこの孤立荘宅は、農業制度や慣行、開拓制度や分家制度、どこでも水を得ることができるとの等質的自然条件によるなどの説があるが、これらが複合している場合が多い。中巨摩郡には、このような集落のなごりを多く見ることができ。

一般に最初の居住の発生の場合には、個々の家屋が孤立した孤立・荘宅



疎村形態をとる集落（和平部落）



小塊村形態をとる疎村集落（嶺部落）

集落、つまり散村が一般的であったが、人口の増加につれて次第に家屋が密集してくると、人口濃密な地方では一般に集村が多くなる。
 この散村から集村へ発達するのが普通の傾向である。道路や水路などのように、家屋の集中の核心になる線があると街村、路村のような線状集落になる場合が多い。
 地形と集落形態との関係は非常に密接であって、谷間や山麓線、あるいは河岸などには街村が多く、扇状地や台地には散村が多い。山地や丘陵地には散村や、小塊状集落が多い。これらは地形の直接の影響というよりも、地形の影響による生産力、従って人口密度の大小が集落形態に現われたものと思われる。

二 発生的分類

集落の分類には単なる形態のほかに、集落の機能や、歴史的な発生及び

発達によって分類される類型もある。このように類型を区分する場合であっても、主としてその形態を問題とする限りは、やはり集落形態の一類型といえよう。

参考までに、その類型をあげてみる。

(1) 豪族屋敷村

豪族（名主、地侍）の館を中心として発達した集落で、環濠集落の中に含まれる。

二重の濠の中央に館、周囲に小作人小屋や倉庫を配して集落を形成。大きいものは集落全域のまわりに濠をめぐらしたのもある。

(2) 名田百姓村

この豪族屋敷村は天正のころのものが、甲府盆地に多い。豪族屋敷村より発生が古く、形態は環濠より垣内が多い。歴史的発生は、豪族屋敷村と同じく、由緒ある家柄のものが領主よりの特許を得て、小作人を伴って耕地を開拓し、集落を形成したものである。

(3) 隠田百姓村

発生は名田百姓村よりさらにさかのぼる。土豪が、班田収受制のもとで絶戸となったものの田地を返さなかったり、農民をして内密に開発したりして、公租を課せられるのを避けて、秘かに耕作させ、生産物及び利益を自分のものとするために形成された集落で、豪族武士の経済的地盤となつた。

(4) 新田開発村

江戸前半期に集中的に形成が見られたもので、名主のもとで、半奴隸的地位にあった小農を独立させ、藩主の領地内生産力の向上をねらった為政者の政策のもとに行われた開拓事業によってできた集落である。開拓者の地位によって次のように区分される。

- 切添新田 農民個人事業
- 村請新田 村落共同事業
- 土豪新田 名主等、土豪の事業

給人新田

藩士の自主事業。

町人請新田

裕福な町人が藩の依頼によって、資金調達した事業。

領主開発新田

藩の直営事業。

(5) 寺百姓村

寺社の所領を耕作するために形成された集落（鳥居前村）なお、都市集落の発生的分類は次のように分けられるが、その内容については省略する。

門前町、宿場町、城下町、港町、市場町、湯治場町

第四節 集落と村

自然村

これまでの記述の中で用いた集落ということばは、「一定地域に、複数の家が、定住した場合、その居住群を集落という」という概念規定で用いてきた。

その場合、集落の構成要素は単一同族団の場合もあるし、あるいは、いくつかの同族団の結合である場合、または名主・小作人というような単なる従属関係の集団やそれらとは全く関係のない集団等、多様である。

しかし、いずれにしても人間の定住によるかたまりである以上、そこには何らかの地縁の結合と、それを基礎にしたその成員だけに特有な社会的組織や、規範（きまり）が生まれる。このようにして、一つの社会としてのはたらきをもつ集団（集落）を自然村という。

農村社会は、その地域的広がりの上から

- 1 小字（組）
- 2 大字（部落）または旧幕藩時代の村
- 3 第一行政村（地区）明治市制・町村制の村
- 4 第二行政村（町）昭和二十年代合併町村

とわけて考えることができる。

自然村はこの区分けからみると、2大字(部落)または旧幕藩時代の村と考えられる。

この考え方は学問上は異論があるようであるが、本誌では、大字(部落)イコール自然村の考えをとっていききたい。

集落はこの区分けでいくと、小字(組)大字(部落)明治市制・町村制施行による村など、それぞれが、すべて集落という語で包括される。これはこれからの分類考察上不便であるので本誌の場合は、学問上の適否は別に論考するとして集落の段階的概念を次のように規定した。

- 1 小字(組) → 単位集落
- 2 大字(部落) 旧幕藩時代の村 ↓ 集落
- 3 第一行政村 → 行政集落村

4 第二行政村 → 行政町

下部町を具体的に例にとってみると、次のようになる。

- 1 昭 和 奥 杯 松 葉 → 単位集落
- 2 常 葉 三 沢 古 閑 → 集落
- 3 富 里 久 那 土 古 閑 → 行政集落村
- 4 下部町 → 行政町

村という語感からは自然村のイメージが強い。そこで行政集落村と呼称した。

また町という語感からは、地域的にも経済的にも、集落発生的にも特質的にも、都市集落のイメージになる。そこで町は行政町と呼称することとした。

第二章 下部町の集落

第一節 地形的概観

一 地形の概観

下部町は山梨県の南部、西八代郡の最南端に位置し、町内は便宜上、旧村単位の下部、久那土、古関の三地区に大別され、下部地区に町役場、久那土、古関地区にそれぞれ支所が設置されている。

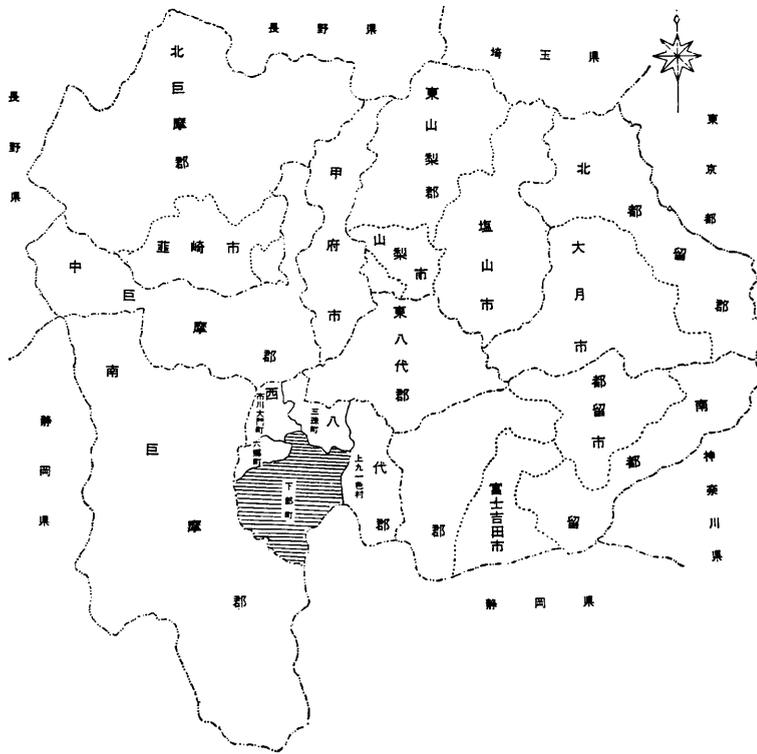
町の東部は一、五〇〇メートル以上の反木山、竜ヶ岳、雨ヶ岳、毛無山等の山嶺をもって上九一色村及び静岡県富士宮市に境し、南部もやはり一、五〇〇メートル以上の二つの三角点をもつ山嶺をもって南巨摩郡南部町とこれに続く身延町に接している。

北は蛾ヶ岳、大平山、釈迦岳等、これまた一、〇〇〇メートル級の山々をもって市川大門町、三珠町及び上九一色村に境し、蛾ヶ岳から流れる稜線が岩間平に突出する稜端である伝水山をもって六郷町と境している。

わずかに南西に開けてはいるが、平坦部は少なく、急峻な山塊が富士川に落ちこんでいる。町の西方は南巨摩郡中富町、身延町と対している。

総面積は、一三〇・七六平方キロメートルで、西八代郡の総面積二九二・八七平方キロメートルの約半分を占める、面積的には西八代最大の町である。町の西部を国鉄身延線が南北に通じ、町内に五つの駅舎を有している。東部は標高九〇二メートルにある本栖湖の半分が本町に属し、国道三〇〇号線をもって、富士宮市及び岳麓地方と結ばれている。

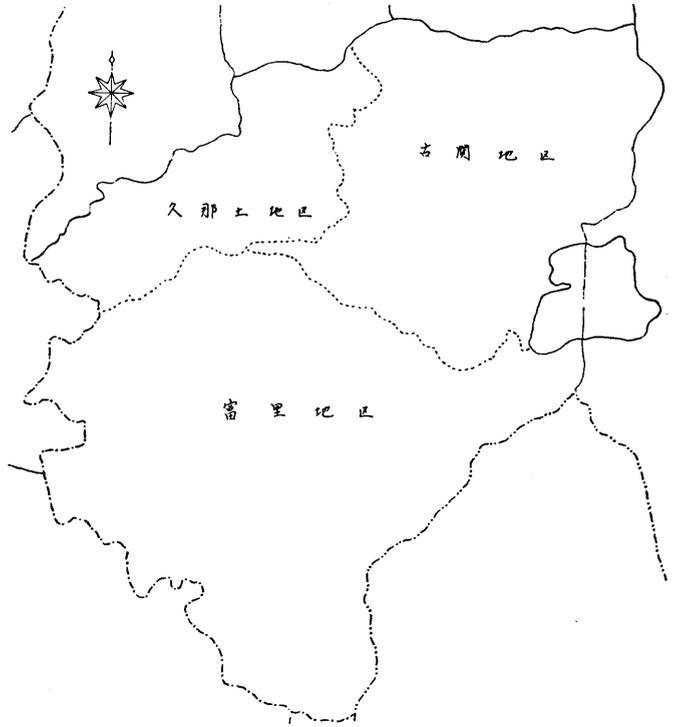
面積は西八代郡最大であるが、町内には反木山、桑木山、五老峰など、その他の五指に余る一、〇〇〇メートル以上の急峻な山嶺がそびえたち、その面積の大部分は山塊によって占められている。宅地も含めた農用地は



下部町位置図

西八代郡各町村の面積及び中心部標高

標高	総面積	種別	町村名
五九三	六・六 ^{km} ²	上九一色村	
二六三	三・六	三珠町	
二〇〇	三・七	市川大門町	
二四三	一三・六	六郷町	
二五〇	一三〇・七	下部町	

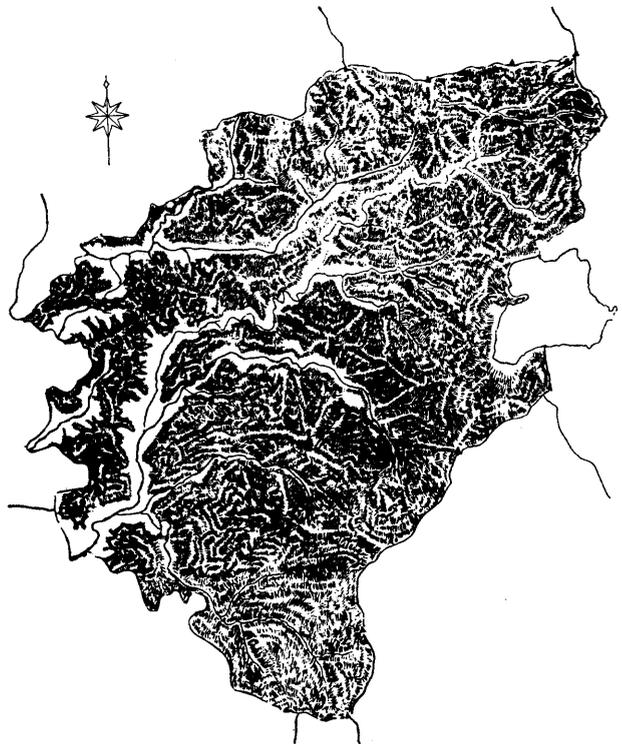


町内地区分布図

四・八三平方キロメートル（農業センサス統計）であるので、実に面積の八一・五パーセントは山岳によって覆われている。
 それら急峻な山塊の合い間を流れる富士川水系に属する四本の富士川支流の河川があり、それら河川が山塊をけずった河岸段丘及び河川集積原野に集落が点在している。

二 集落の水平分布

このように、下部町は土地のほとんどが山岳におおわれ、平坦地が少なく、集落は山岳の谷間を流れる四つの水系が形づくった河岸段丘、または



下部町ケバ図

小さな扇状地、集積原野に点在している。

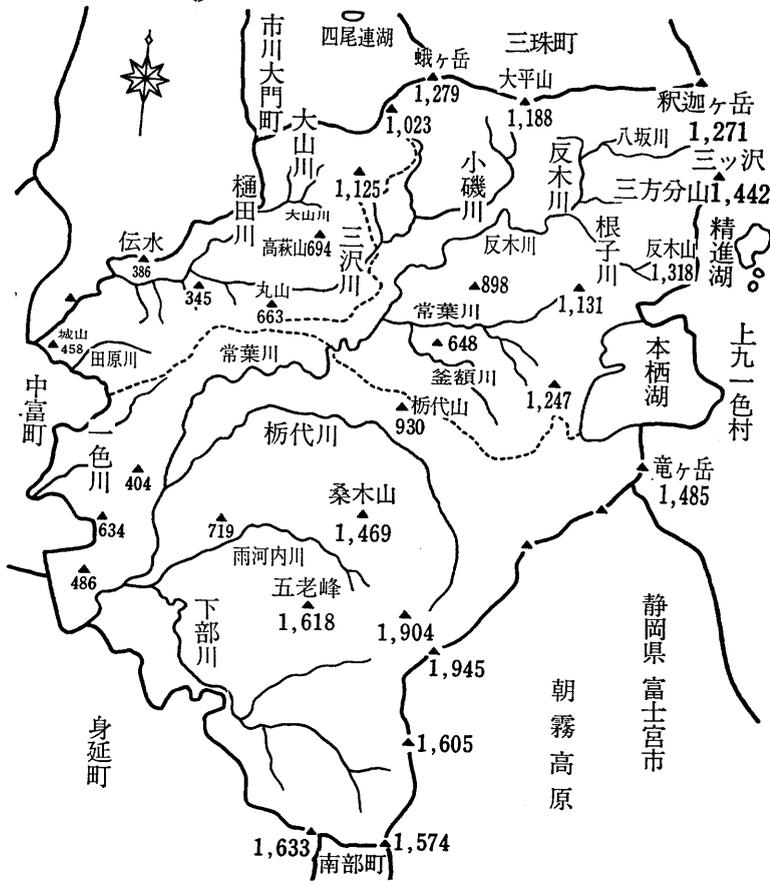
これら集落の平面的分布状況は、分布図に見られるように、各水系に沿って線状に分布している。

しかし、すべての集落が必ずしも川辺に沿ってあるのではなく、山頂近く、または山嶺の中腹に点在する孤村集落も数多い。

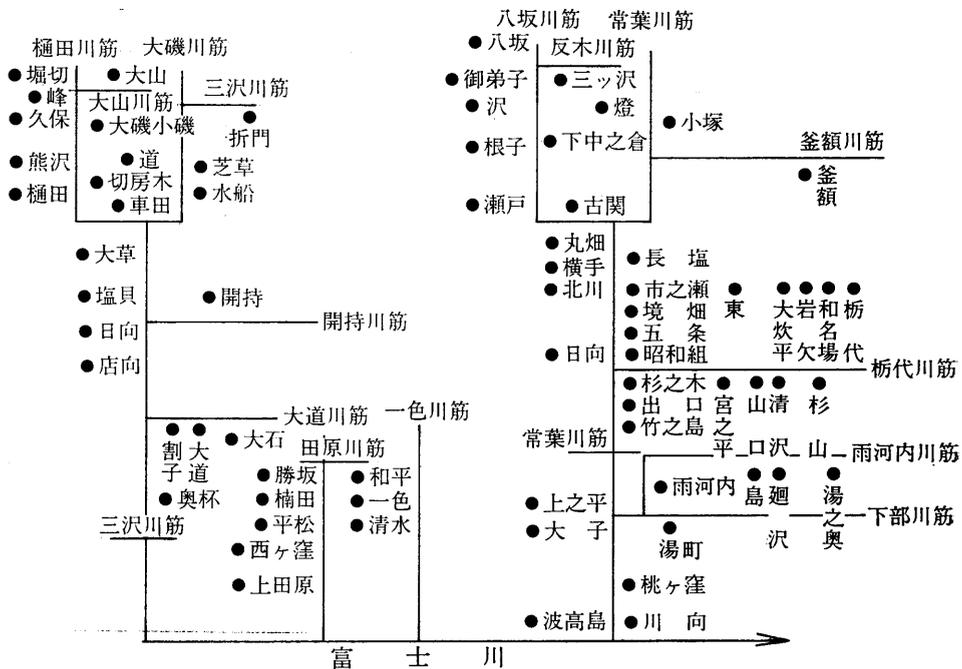
それら孤村集落の歴史的発生過程は、すべてにおいてつまびらかではないが、そのほとんどが同族集団で形成されていると思われる、同姓を名づけることから、何等かの歴史的過程があったものと思われる。

また、河川集積原野と見られる三沢、常葉地区の平坦地には三沢氏、常葉氏などの豪族が居住していたことから、これらの地にはやや密集した豪族屋敷村的性格をもつ集村または散村集落がある。

下部町地形図



河川別にみる図集落分布表

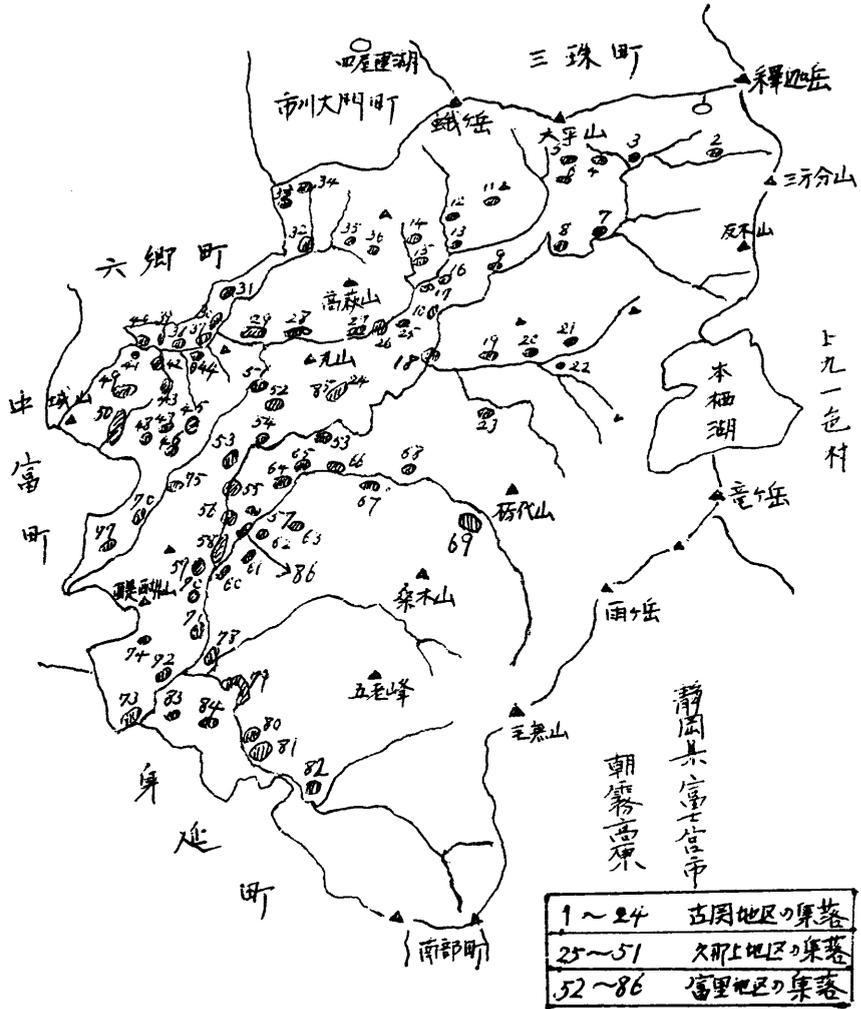


集落分布図対象表

古 関 地 区			久 那 土 地 区			下 部 地 区		
1	八	坂	25	芝	草	52	横	手
2	三	沢	26	水	船	53	北	川
3	沢		27	道		54	長	塩
4	御	子	28	切	房 木	55	市	瀬
5	上	門	29	車	田	56	境	畑
6	下	門	30	樋	田	57	五	条
7	二	屋	31	熊	沢	58	昭	組
8	根	子	32	久	保	59	日	向
9	根	組	33	嶺		60	杉	木
10	瀬	戸	34	山	家	61	宮	平
11	峯	山	35	下	大 山	62	芦	口
12	大	磯	36	上	大 山	63	清	沢
13	仏	僧	37	大	草	64	大	平
14	上	磯	38	塩	貝	65	下	欠
15	下	磯	39	日	向	66	上	欠
16	田	村	40	店	向	67	杉	山
17	八	子	41	奥	杯	68	和	場
18	古	関	42	割	子	69	栃	代
19	中	倉	43	大	道	70	出	口
20	燈		44	開	持, 柿 島, 住 宅	71	竹	島
21	中	敷	45	勝	坂	72	上	平
22	小	塚	46	平	松	73	波	島
23	釜	額	47	楠	田	74	大	子
24	丸	畑	48	西	窪	75	和	平
			49	大	石	76	一	色
			50	上	原	77	清	水
			51	わ	ら び 平	78	雨	内
						79	雨	町
						80	湯	
						81	島	沢
						82	廻	奥
						83	湯	窪
						84	桃	向
						85	川	畑
						86	丸	
							東	

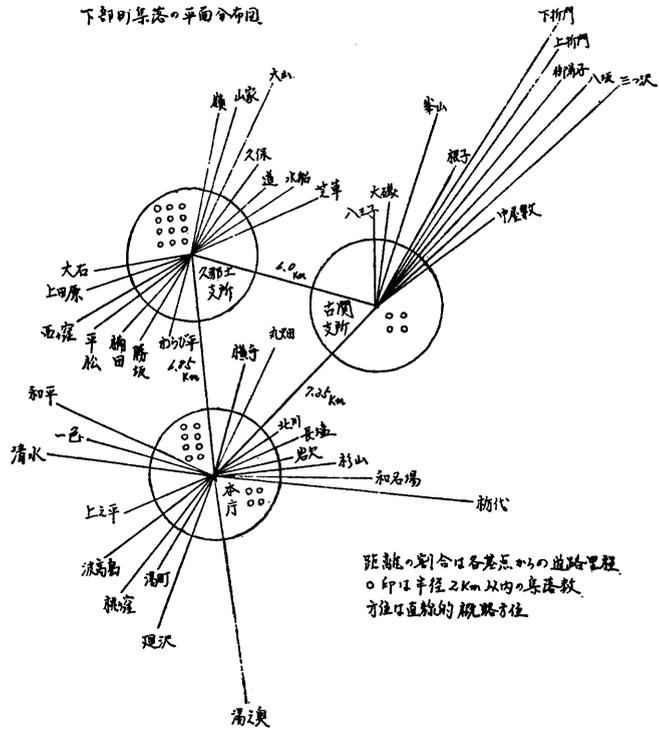
これら集落の平面的広がり、町が広いだけに大きく、直線距離で南北に約一二・五キロメートル、東西に約一一・五キロメートル、道路里程では、南北に約二四キロメートル、東西に約一九キロメートルに及んでいる。

また、久那土地区、古関地区は照坂峠によって限られ、久那土地区、下



集落分布図

部地区は、丸山から勝坂峠に至る山嶺によって限られている。古関地区、下部地区は、常葉川に沿った山嶺を切り取り、曲折した道路一本によって結ばれていたにすぎない。今でこそ国道三〇〇号線となっているが、往時は人里はなれたさびしい往還であった。町村合併の歴史的経緯にもよる



村落平面分布図

が、これら交通上の悪条件から、二地区には役場の出先機関である支所がおかれ、それぞれ住民の便を図っている。

なお、分布図によって明らかであるように、集落のほとんどは町のほぼ北西区域に集まり、地形的条件から南東部区域には集落は見られない。北部山嶺においては、いくつかの孤村落が存在するが、北部は南東部と同じ山嶺とはいえ、比較的山容がゆるやかなことや、中郡筋との要路として、中世より交通が行われた歴史の経緯によるものと思われる。これら折門、御弟子、八坂等の北部山嶺孤村落は、中世、中郡九一色郷に属していたが、地形的にも、交通の便宜上からも自然な形として、沿革の節で

述べた通り、後に古閑村に合併し、さらに下部町として合併したものである。

このような地形的条件に加え、昭和になって西部地域に鉄道が通じ、駅舎が設置されるに及んで西部地域への集落密集度は強まり、新しい集落が形成されてきたのに反し、北部孤村落は離村するものがあいつぎ、過疎化現象は加速度的に強まって、すでに無人集落となったところもある。

三 集落の垂直分布

下部町の標高は最低は波高島の二〇一メートルから、最高は毛無山頂の一、九四五メートルにわたり、その間、九〇二メートルに上九一色村と接して本栖湖がある。

全体的に南東部が高く、北部も一、〇〇〇メートル級の山々がそびえ、いずれも西部富士川に向かって急激に落ちこんでいる。

したがって集落の大部分は中央西部一三〇メートルから、二五〇メートルの間に集まっている。また、北部山岳地帯及び中央東部地区の山岳地帯山嶺の高地にいくつもの孤村落が存在する。それらの折門、八坂等の集落は本栖湖の標高より高く、西八代最高標高集落である上九一色村富士ヶ嶺地区（富士豊茂）の標高に匹敵する。

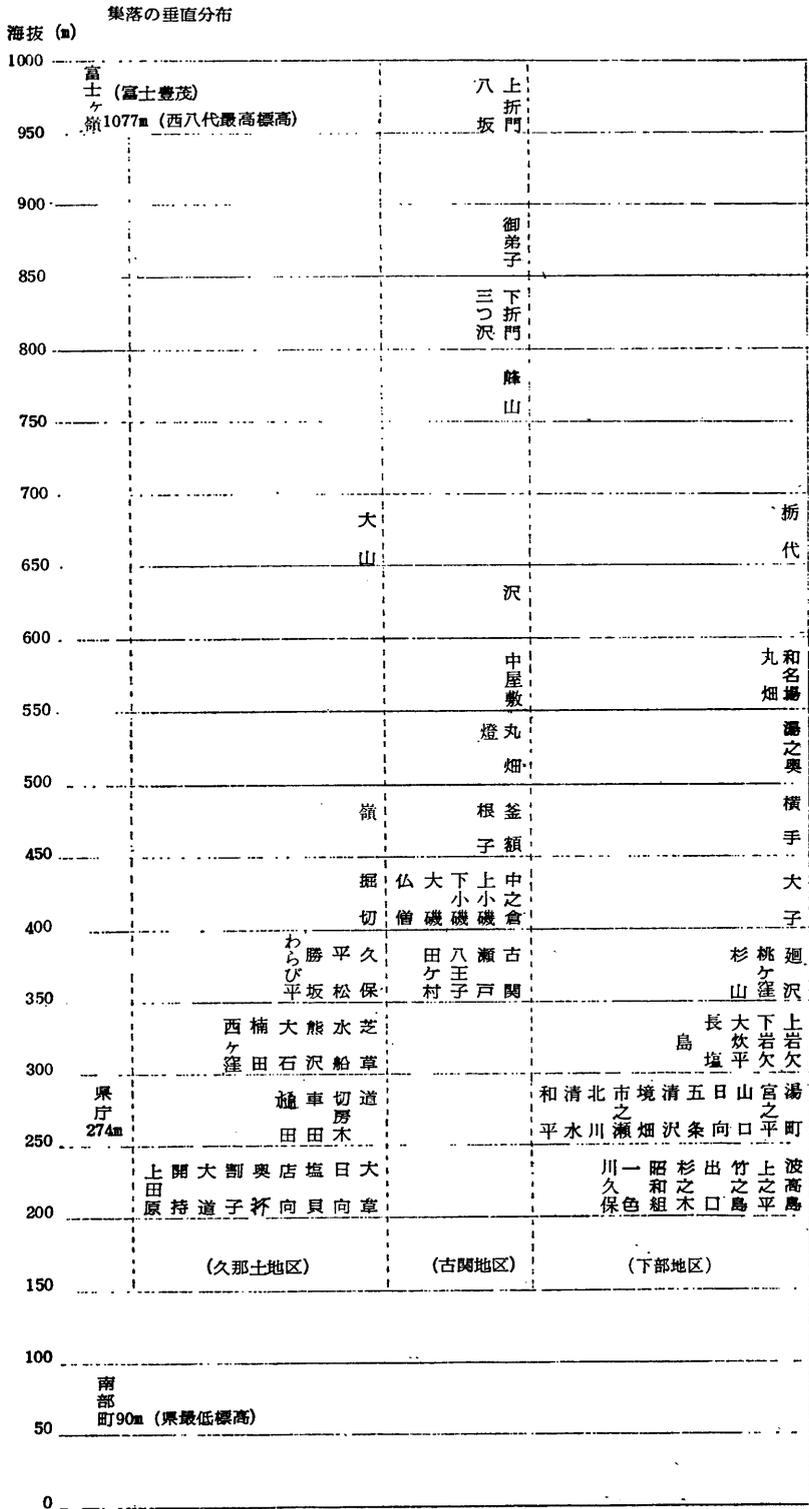
第二節 集落の形態分類

一 集合状況的分類

下部町あるいは、合併以前の富里村、古閑村、久那土村等は明治以後、行政による何等かの行政効率の必要性から生まれた意図的なものである。その経緯については第一節、沿革の主要で述べた通りである。

集落を形態的、発生的に分類し、考察するには、近代の行政意図によって生まれた集落よりも、自然発生的に生まれた集落を対象とする方が適切であると思われる。そこで、明治八年合併の富里、共和。明治二十二年合

集落の垂直分布図



地区別 里程 標高一覧表

下部地区			古 関 地 区			久 郡 土 地 区		
単位集落	海 抜	役場及び支所からの距離	単位集落	海 抜	役場及び支所からの距離	単位集落	海 抜	役場及び支所からの距離
	m	m		m	m		m	m
湯之奥	500	7130	古 関	370	125	芝 草	310	4350
廻 沢	350	5190	釜 額	470	1880	水 船	300	3900
湯の町	260	3560	瀬 戸	390	1650	道	280	3100
波高島	201	4310	根 子	480	5050	切 房 木	280	1750
大 子	430	5010	下中之倉	440	1530	車 田	250	700
上之平	230	3130	中屋敷	580	4580	樋 田	260	700
竹之島	240	1430	峯 山	770	6230	熊 沢	300	1630
出 口	240	1190	上小磯	430	3480	久 保	360	3500
杉之木	240	925	大 磯	420	4250	嶺	470	4550
宮之平	250	310	八王子	370	2730	大 山	690	5900
山 口	290	1130	下折門	800	10480	山 家	400	4730
日 向	270	310	上折門	960	9880	大 草	240	330
昭和組	230	100	御弟子	870	9100	塩 貝	240	880
東	230	100	沢	610	7100	日 向	240	1100
五 条	260	690	三つ沢	830	10250	店 向	230	1250
清 沢	290	1560	八 坂	960	9500	奥 杯	230	1450
大炊平	300	1940				割 子	230	1380
下岩欠	310	2190				大 道	240	1600
上岩欠	340	2940				開 持	240	1500
境 畑	260	940				大 石	340	2950
市之瀬	270	1630				勝 坂	380	3100
杉 山	380	3810				楠 田	300	3350
和名場	550	4880				平 松	380	3830
とじろ	670	8130				西ヶ窪	340	4150
北 川	280	2310				上 田 原	240	3450
長 塩	300	3310				わらび平	370	2600
丸 畑	550	4380						
横 手	480	3500						
和 平	280	5400						
一 色	240	4100						
清 水	260	5200						

里程 下部地区は下部町役場（本庁）久郡土地区は久郡土支所、古関地区は古関支所をそれぞれ基点とし、各部落のほぼ中央までを計測した。
 計測値は25000分の1、下部町等高線図を用い地図上で計測した値と、乗用車の距離統計による実測、又は歩度計によって歩測した値との平均値をとった。
 標高 25000分の1下部町等高線図で読んだ値と登山用高度計（感度50m）で実測した値との平均値をとった。

併の久那土・古関以前の自然村集落を対象に考察することとする。

この自然村集落は行政町となった現在でも、その形態や集合状況が大きく変化することなく、その名称とともに現在に残されているので、考察上の支障はないものと思われる。

下部町は、第二節で概観を記述したようにそのほとんどは山岳によって占められ、平坦地が少ないという地形的な特質条件から、大きな集村形態をとる集落は少ない。下部町の集落（自然村）の大部分は小塊状集落と疎村に分類されるものと思われる。もちろん、戸数何戸以上が塊村、何戸以下が疎村という数的基準があるわけではなく、家屋の集合状況や道路への依存度、道路へ対しての家屋の向き、産業形態などから大まかに分類するのであって、行政村の社会機能的考察や、歴史的過程の考察の便宜のために分類するものであるので、多分に主観的な要素をもっている大まかなものである。

集合状況から形態的に次のように分類してみた。

塊村 一定地域に家屋が不規則にかたまっている形態。

常葉、清沢、芦原山口、大炊平、宮之平、市之瀬、一色、北川、長塩、

古関、水船、道、芝草、樋田、嶺、山家、切房木、等

道路への依存度が生活の経済基盤としては低く、比較的一定地域に不規則な道路に沿って塊状をなしていることから塊村に分類されるものと思われる。

街村 塊村が生活の経済的基盤として道路への依存度が低いのに比して、主な幹線道路に沿って街道に依存して発達した集落で、道路に沿って線状に家屋が並び、しかも家屋は方位とは関係なく道路に向かつて建っている。古くは宿場町、門前町等であるが、現代的には商店街が分類される。

常葉の昭和組、三沢の店向等、古関も一見、街村に分類されると思われるが、馬場、松葉、宮平、上村、下村、屋敷等の小字名や、家屋の向き等から考えて、むしろ塊村と考える方が適切であろう。

第二章 下部町の集落

路村 道路への経済的依存度は低く、道路に沿って、家屋が線状に配され

その背後、または前方に、水田、畑地、山林、原野等の農耕地が地割されている形態をとる集落

車田、大道、大草、岩欠、上之平、など

散村 家屋が分散した集落で、更に疎村と孤立住宅村に分類されるが、下部町には、孤立住宅村はない。

疎村 数少ない家屋がまとまって散在しているもので、扇状地、台地、河岸段丘、山地に多く見られる。

三沢、大磯小磯、根子、杉山、中之倉、和平、三沢は集村に分類されるべきであると思うが、古関に見られるような集村、発生的な小字名がみられず、楠田、大石、開持、塩貝、柿島、西久保、奥杯等、むしろ疎村と思わせる字名ばかりで、このことから考えても疎村集落がいくつか集まって形成された散村ととらえるのが適切であると思われる。

集落が社会進歩とともに増大するにつれて、さまざまな要因が複合的に作用して人口密度が高まり、散村から集村へ発達するのが普通の傾向であり、道路や水路、現代的には鉄道など、家屋集中の核心になる線などがあると街村、路村のような線状分布の集落になる場合が多いが、三沢はその好例であろう。

その他現代的には第二次産業である工場などの産業構造的な要因が散村から集村への主要な発達要因となる場合も多いが、本町の場合はそのような例はない。

また、反対に道路の産業的なはたらきや、集落の自然環境的条件から、発達要因が非常にうすいか、あるいは無い場合は、社会の進歩とはうらはらに散村は孤村となり、むしろ衰退の傾向をもつ。

このような傾向は、疎村集落のみあるものではなく、下部町のような、山村の状況のところでは、塊村とみられる集落においても見られる現象である。前記において塊村に分類した集落の中でも、このような傾向の

みられる集落はいくつもある。

孤村 疎村として形成された集落が、単一にそのまま村を形成したもので、社会進歩に見合った発達要因がうすく、散村から集村への発達

過程とは反対に、ますます孤立化する傾向にある。

大山、八坂、折門、栃代、和名場、湯の奥、桃ヶ窪、単位集落的には、勝坂、楠田、平松、西ヶ窪、大子、川向等

孤村集落は社会が自給自足の産業構造の性格を強くもっていた時代はともかく、社会的機能が複雑に高度に発達するにつれて、孤村的性格は強まり、衰退していく傾向はますます強くなる。

すでに無人化し、集落が消滅した川向、桃ヶ窪、折門、西ヶ窪等であり、三ツ沢、下大山、大子などのように、集落としてその形態をなくしているところもある。

行政としては、そのような集落の自然条件を分析し、自然条件に見合った産業的施策を強力に推進する必要がある。

例 林業対策としての森林組合の事業や、養魚場設置の施策に見られるようなもの。

二 発生的分類

歴史的発生の過程はつまびらかではないが、現存する屋敷、馬場等の小字名、『甲斐国志』土庶の部に見られる、馬場氏、常葉氏、三沢氏、根子弾正、佐野氏などの豪族や、その居趾等から考えるに、豪族屋敷村、名田百姓村、隠田百姓村などに分類されるものと思われる。

三沢、常葉、市之瀬、根子、湯之奥、古関等は平野部に見られるいわゆる環濠集落の形はとらないまでも、すでに天正時代にこれら豪族の居住が認められることから、一応豪族屋敷村と解してよいであろう。

しかし、下部町に現存する集落は、この時代にはすでに形成されていたものであり(常葉の昭和組、三沢の店向は除いて)発生的には名田百姓村と考えるべきかもしれない。

くわしくは後述するが、三沢の開持、柿島、塩貝等はいわゆる垣内(カキツ)転化して(カイト)の地名的起源をもつものではないかとも考えられる。

垣内はもともと、垣の内、あるいは区画された範囲内の意であるが、中世、地頭、名主などの所有地、開墾地、及び開墾地につくった分村をも意味するようになったという。

これらのことから考えて、下部町の各地区中心部の集落は、名田百姓村から豪族屋敷村へと発達していったものと思われる。

車田、道、上之平、切房木、上田原、樋田等、豪族屋敷村とはいえないまでも、名田百姓村であることは、ほぼまちがいないと思われるが、甲斐国志記載の戸口や、それと面積との比、この石高等から推察するに、あるいは記録には残っていないまでも、土豪が集落形成に大きな作用を及ぼしていたかもしれない。

車田村	戸 四九	口二五〇	石九八石
道 村	戸 五五	口二二五	石五七石
切房木村	戸 四六	口二一〇	石五六石
上田原村	戸 六一	口二七八	石九五石
上之平村	戸 五四	口二四八	石九〇石

その他の疎村集落の中には、隠田百姓村があると考えられるが、その発生源はつまびらかでない。

その他、集落にまつわる伝説などから歴史的にある人物や、その一族が隠れ住み、または流浪の途上移り住んで定住し、集落を形成したのではないかと思われるものもある。(大磯・小磯の例)

また、一色のように、庄園制度の一色別納の地から生じた地名であるといわれるものもあり、一色がそれであるならば、この地にはそこに居住していたか否かは別にしても、名主職となっていた人物がいたはずであり、集落の形成は、相当に古いものといえよう。

いずれにしても、下部町内の集落の発生は古く、江戸前半期に集中的に

その形成が見られた新田開発村の集落はないものと思われる。

例えば車田に今井という地名があるが、集落の小字名で、他の地名と関連して考えるに、新田開発村とはいいがたい。「今井は今居」という意にて新居の義に同じかるべし」といわれていることから車田地内の名主、または土豪の新居か、集落内の一開拓地と解した方が無理がない。

特殊事情によって発生した集落に、金山開発によって、発達した湯之奥、湯治町として発達した下部がある。

山梨県政六十年史には、湯之奥金山の成立原因として、富里村地内に向山千軒、広里千軒、長野千軒と称する集落があったと記載されている。

(註、地元では中山、内山、茅小屋という)

第三節 人口とその変遷

一 徳川期の人々

明治維新以前に現在の下部町を構成している村々にはどれほどの人たちが居住していたのであろうか。

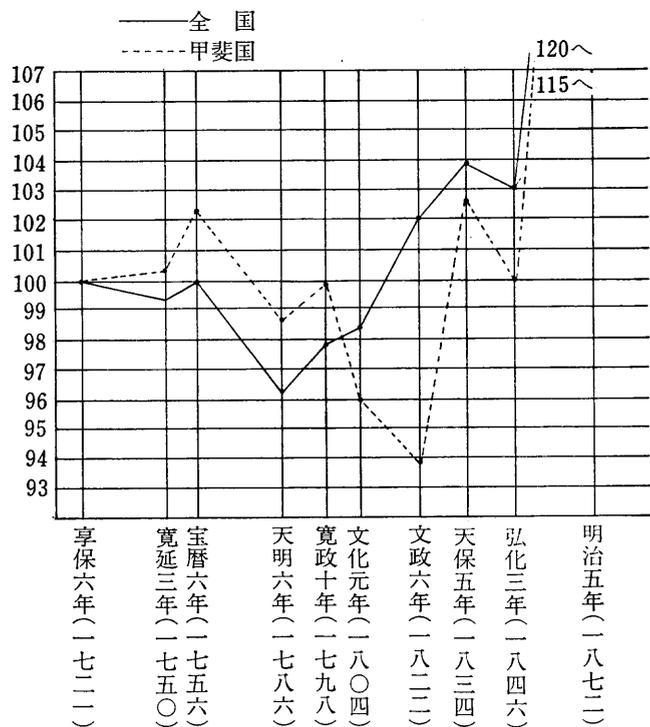
日本における人口調査は古く、太宝二(七〇二)年の太宝律令による戸籍の制定に始まる。

戸籍は、律令のうちの戸令によって「凡そ戸籍は六年に一たび造れ。一月月上旬より起して、式に依りて勘へ造れ。里別に巻を為せ。惣て三通を写せ。……中略……。二通は太政官に申送せよ。一通は国に留めよ」(令集解卷九、戸令)と定められ、氏名、続柄、職業が登録された。その後、律令体制の崩壊によって戸籍もまた自ずと廃されたが、近世に至って、徳川政権のもとで統一国家の管理体制が整備強化される中で「検地」「宗門改」が実施され、特に「宗門改」は「人別帳」の形で記録されることによって、再び戸籍の復活が行われ始めた。

享保六(一七二一)年、將軍吉宗がこの「人別帳」によって、人口数を報告させて以来、律令制時代と同じく、六年目毎(子年と午年)の全国人

第二章 下部町の集落

享保6年を100とした場合の125年間の人口増加率の推移



口数が幕府に届け出られることになった。

しかし、これらの中には公卿、武士、武家に従属する者、無籍者、四民以下とされた人々などはことごとく除外されている。

また調査上の不備もあって、全体で一〇パーセント程度の過小評価が生じたと考えられている。

このように宗門改、人別帳等の資料は精度の上で大きな問題をもつし、さらに一国内の地域別人口といった点ではまた不明な点も多い。

しかし、徳川期、庶民の人口実態を知る上の唯一の資料であり、他に代わるものはない。

下部町の場合も徳川期の人口を知る唯一の手がかりは「宗門改」(宗門

人別帳)「村諸式明細帳」であるが、これまた、どの部落にも残っているものではなく、現存するものは少なく、時代、地域ともばらばらで残念ながら、統計的処理ができるように資料を収集することができない。

結局、文化二(一八〇五)年から一一(二八一四)年にかけて編さんされた『甲斐国志』のみが一応の精度をもち、統計的に考察し得る唯一の資料となった。

ただし、この場合も、前記同様、公卿、武士及びその家族や、これに従属するものは除外してある。

しかし、山梨師範学校教諭笠井恵祐は『綜合郷土研究』の「人口調査」の中で武士数の補正を行っている。笠井氏は安政四(一八五七)年の「甲官便覧」を用い甲斐国内武士の総数を五七七人とふんでいる。

府内 五〇四人 石和陣屋 二二人 長禪寺陣屋 二五人
市川陣屋 二六人 合計 五七七人

この五七七人という数字は「甲斐国志」の甲斐国総人口二九一、三八五人に対し、〇・二パーセントにすぎない。更にこれを一人の武士に平均約五人明七年戸籍では武士一人に対し、家族四・六人とされていると考えると、誤差は一、〇パーセントにすぎない。さらに神官、僧尼、修験者などは明治七年に全県で五六人とされている。これとて、統計的には無視しうる数と考えるとよからう。

いわば甲斐国は、天領であったということから武士数が比較的少なかったために、それを除外した人口との誤差は少なくなっているものと思われる。

このことから考えても、現下部町を構成している村々の文化年間における実際人口と『甲斐国志』(村里の部)に記せられた数との誤差率はごく僅少と考えられ、この数をもって当時の人口数と確定しても誤りはないものと思われる。

『甲斐国志』に依る当時の山梨県人口は

府内 九、五六六人

九筋三領 七七八部落(村) 二八一、八一九人

計 二九一、三八五人

であり、そのうち

八代郡 東河内領は

村数 五九カ村 戸数 三、二四七戸

人口 一四、九六二人

となっている。

更に『甲斐国志』による現在下部町となっている村々の戸数、人口などは(表2)通りである。

ところで、関山孫三郎の「近世日本の人口構造」に掲載されている全国、及び甲斐国の人口動態は(表3)のようになっている。

この表で、甲斐国の人口の推移についてみると享保六年から、弘化三年までの一二五年間に人口はほとんど増加していなかったことがわかる。

この人口の停滞性は徳川期日本の一つの特質であり、必ずしも本県に限ったことではないが、本県にあっては、自然条件の過酷さと、それを克服する生産技術の停滞とが重なり、農業生産が一般に上昇しなかったことが大きな原因といえる。

ことに現下部町の村々は、自然条件の上からみると、急峻な山岳に占められ、平地は少なく、河川は急流で、往々にして氾濫し、水害を引きおこし、小雨乾燥の氣候によってしばしば干ばつが生じた。前節でも妙法寺記等の資料によって、十年に一度は大飢きんが生じたことは述べたが、笠井恵祐述によると、享保年間から明治三年までの間に水害四〇回、凶作不作等も平均すれば、実に三〇四年に一度は生じたとされている。

これらの結果として、人口増加を各人がくいとめるための「墮胎・間引き」が風習化した。たとえ生産があっても、一家の低い生活水準・栄養水準のために幼少時に病死するものが多かったであろう。また成人しても、低栄養水準に加えて医療の普及も乏しく、したがって流行病が発生すると全村、あるいは沢筋に位置する村々の広い地域に広がり、その為に死

〈表2〉甲斐国志に見られる文化3 (1805)年の村々の人口等
下部地区

村名	家数戸	男 人	女 人	計 人	馬 数頭	村石高 単位石	一 均 戸 平 高 石
波高島村	25	64	62	126	3	111.1	4.4
湯之奥村	18	38	35	73	3	35.3	1.9
下部村	34	71	65	136	4	95.3	2.8
桃ヶ窪村	7	16	16	32	1	6.5	0.9
上野平村	54	109	132	241	7	90.1	1.6
常葉村	150	345	300	645	20	373.9	2.5
清沢村	24	41	52	93	2	53.1	2.2
大炊平村	22	46	47	93	4	42.1	1.9
岩欠村	23	66	60	126	3	55.1	2.4
杉山村	33	89	79	168	4	60.2	1.8
市之瀬村	53	110	108	218	6	87.2	1.6
北川村	104	239	232	471	8	79.3	0.8
一色村	91	188	191	379	8	177.7	1.9
計	638	1,422	1,379	2,801	73	1266.9	1.9

久那土地区

村名	家数戸	男 人	女 人	計 人	馬 数頭	村石高 石	一 均 戸 平 高 石
芝草村	22	55	58	113	5	41.3	1.9
水船村	21	42	38	80	3	31.4	1.5
水道村	25	117	108	225	7	57.7	2.3
切房木村	46	103	107	210	4	56.6	1.2
車田村	49	126	125	251	7	98.5	2.0
樋田村	15	34	34	68	4	32.8	2.2
熊沢村	20	44	42	86	8	42.8	2.1
久保村	22	50	48	98	4	45.2	2.1
嶺村	12	40	27	67	2	18.7	1.6
大山村	14	26	21	47	2	16.5	1.2
三沢村	73	359	364	723	30	385.0	5.3
上田原村	61	138	140	278	10	95.0	1.6
計	380	1,134	1,112	2,246	86	921.5	2.2

古閑地区

村名	家数	男	女	計	馬数	村石高	一戸平均石高
古閑村	105	215	213	428	12	198.8	1.9
釜額村	19	62	37	99	3	30.1	1.6
根子村	52	140	127	267	5	44.5	0.9
中之倉村	42	99	82	181	6	45.5	1.1
大磯小磯村	49	123	106	229	3	58.9	1.2
折門村	24	60	40	100	3	26.3	1.1
八坂村	20	32	30	62	0	7.4	0.4
瀬戸村	30	74	68	142	4	54.3	1.8
計	341	805	703	1,508	36	465.8	1.4
下部町全体計	1,359	3,361	3,194	6,555	195	2,654.2	1.9

<表3> 全国・甲斐国の人口動態

年代	全国(千人)	甲斐国(人)
享保6年 (1721)	26,065 (100)	310,168 (100)
寛延3年 (1750)	25,918 (99.4)	311,193 (100.3)
宝暦6年 (1756)	26,070 (100.0)	317,349 (102.3)
天明6年 (1786)	25,086 (96.2)	305,934 (98.6)
寛政10年 (1798)	25,471 (97.7)	309,604 (99.8)
文化元年 (1804)	25,622 (98.3)	297,903 (96.0)
文政6年 (1822)	26,602 (102.0)	291,675 (93.8)
天保5年 (1834)	27,063 (103.8)	318,474 (102.6)
弘化3年 (1846)	26,907 (103.2)	310,273 (100.0)
明治5年 (1872)	31,517 (120.9)	358,918 (115.7)
()内は西暦年	()内は享保6年に対する増加率	()内は享保6年に対する増加率
享保6年から、弘化3年まで 125年間の増加率	(103.2%) (約1.03倍)	(100.0%) (約1.0倍)

〈表4〉徳川末期における各村々の人口動態表

村名	年代 (西暦)	年数	家数	人口			平均 家族数	年平均増加率%		備考
				男	女	計		家数	人口	
大炊平村	天保4 (1719)	87年間	21	52	55	107	5.0	0.05	-0.15	甲斐国志以前の資料をもとに、文化三年までの人口動態
	文化3 (1806)		22	46	47	93	4.2			
北川村	宝永2 (1704)	102年間	50	90	80	170	3.4	1.05	1.73	
	文化3 (1806)		104	239	232	471	4.5			
湯之奥村	天明8 (1788)	18年間	17	32	24	56	3.3	0.32	1.68	
	文化3 (1806)		18	38	35	73	4.0			
芝草村	宝永6 (1709)	103年間	21	35	37	72	3.4	0.04	0.55	
	文化3 (1806)		22	55	58	113	5.1			
切房木村	天文3 (1738)	68年間	30	85	60	145	4.8	0.78	0.65	
	文化3 (1806)		46	103	107	210	4.5			
釜額村	延宝4 (1676)	130年間	14	23	26	49	3.5	0.27	0.78	
	文化3 (1806)		19	62	37	99	5.2			
根子村	享保9 (1724)	82年間	40	77	75	152	3.8	0.36	0.92	
	文化3 (1806)		52	140	127	267	5.1			
以上7カ村の年平均増加率は、戸数で約0.4% 人口で0.9%である。										
清沢村	文化3 (1806)	30年間	24	41	52	93	3.8	-0.1	0.17	甲斐国志以後の資料をもとに、文化三年以後弘化三年まで四十年間
	天保7 (1836)		23	56	42	98	4.2			
市之瀬村	文化3 (1806)	22年間	53	110	108	218	4.1	0.08	0.08	
	文政11 (1828)		54	109	113	222	4.1			
常葉村	文化3 (1806)	13年間	150	345	300	645	4.3	0	-0.25	
	文政2 (1819)		150	328	296	624	4.2			
桃ヶ窪村	文化3 (1806)	21年間	7	16	16	32	4.5	0	0.89	
	文政10 (1827)		7	15	23	38	5.4			
切房木村	文化3 (1806)	40年間	46	103	107	210	4.5	-0.05	-0.21	
	弘化3 (1846)		45	93	99	192	4.3			
樋田村	文化3 (1806)	32年間	15	34	34	68	4.5	1.04	0.82	
	天保9 (1838)		20	37	49	86	4.3			
古関村	文化3 (1806)	33年間	105	215	213	428	4.1	-0.25	-0.11	
	天保10 (1839)		96	216	202	412	4.3			
大山村	文化3 (1806)	32年間	14	26	21	47	3.3	0	1.39	
	天保9 (1838)		14	36	32	68	4.8			
八坂村	文化3 (1806)	11年間	20	32	30	62	3.1	-3.1	0.73	
	文化14 (1817)		13	34	33	67	5.1			
折門村	文化3 (1806)	25年間	24	60	40	100	4.1	0.16	0.88	
	天保2 (1831)		25	62	60	122	4.8			
三沢村	文化3 (1806)	40年間	173	359	364	723	4.1	-0.04	-0.03	
	弘化3 (1846)		170	355	357	712	4.1			
以上11カ村の年間増加率は戸数で-0.2% 人口で、0.39%である。										

〈表5〉文化3年から40年ごとの人口

村名	文化3年(1806年)				弘化3年(1846年)				明治20年(1887年)				備考
	戸数	人口			戸数	人口			戸数	人口			
		男	女	計		男	女	計		男	女	計	
波高島村	25	64	62	126	27	65	64	129	32	95	97	192	
湯之部村	18	38	35	73	17	39	36	75	15	36	37	73	
下ケ窪村	34	71	65	136	34	72	67	139	35	78	79	157	
桃上野平村	7	16	16	32	7	16	17	33	7	18	21	39	
	54	109	132	241	50	101	121	222	42	88	83	171	
常葉村	150	345	300	645	150	353	303	656	149	363	385	748	
清炊平村	24	41	52	93	23	56	43	99	25	56	69	125	
大欠山	22	46	47	93	22	47	48	95	23	56	58	114	
岩山	23	66	60	126	24	67	62	129	36	76	85	161	
杉	33	89	79	168	35	91	81	172	38	90	100	190	
市之瀬村	53	110	108	218	55	112	113	225	48	101	102	203	
北川色村	104	239	232	471	106	245	238	483	112	279	307	586	
一	91	188	191	379	98	192	195	387	97	193	192	385	
下部地区計	638	1,422	1,379	2,801	648	1,456	1,388	2,844	659	1,529	1,615	3,144	
古関村	105	215	213	428	96	216	202	418	108	266	259	525	
釜根之倉	19	62	37	99	22	61	62	123	21	63	57	120	
大磯小磯	52	140	127	267	53	143	131	274	60	142	157	299	
	42	99	82	181	42	95	86	181	42	103	98	201	
	49	123	106	229	50	126	110	236	55	146	156	302	
折門村	24	60	40	100	25	62	60	122	20	45	37	82	
八坂戸村	20	32	30	62	10	31	30	61	7	21	20	41	
瀬	30	74	68	142	31	76	69	145	39	90	78	168	
古関地区計	341	805	703	1,508	329	810	750	1,560	352	876	862	1,738	
芝草村	22	55	58	113	29	57	58	115	27	64	58	122	
水道船	21	42	38	80	20	40	42	82	22	56	50	106	
切房木	25	117	108	225	27	119	109	228	53	152	150	302	
車田	46	103	107	210	45	93	99	192	48	120	134	254	
	49	126	125	251	50	129	127	256	53	145	133	278	
樋熊田	15	34	34	68	20	37	49	86	18	53	52	105	
久保	20	44	42	86	20	44	43	87	21	50	51	101	
大嶺	22	50	48	98	23	51	49	100	54	138	148	286	
	12	40	27	67	14	34	42	76					
	14	26	21	47	14	36	32	68					
三沢村	173	359	364	723	170	355	357	712	170	424	453	877	
上田原	61	138	140	278	42	70	61	131	40	142	153	305	
久那土地区計	480	1,134	1,112	2,246	474	1,065	1,068	2,133	506	1,344	1,392	2,736	
町全体計	1,459	3,361	3,194	6,555	1,451	3,331	3,206	6,537	1,517	3,749	3,869	7,618	

亡する者も決して少なくはなかったと思われる。

乏しい資料ながらも、収集し得た資料を整理した中から考察し得る一部村々の人口推移をみると、天文年間（一七四〇年頃）から寛政年間（一七九〇年頃）までの五十五年間は家数も、人口も一応の伸びを示してはいるが、天保年間（一八三〇年頃）から、以後、安政年間（一八六〇年頃）までの二十五年間は人口が減少し続けている。いわゆる天明、天保の大飢饉、疫病の大流行が原因と思われる。

徳川末期から明治初期にかけては、家数は余り変わらないまでも、人口は急激に増加を示し、例えば一戸当たりの平均家族数をみると安政元年は四・五人であるのに対し、二十五年後の明治一年には平均五・五人となっており、平均一人は家族数が増加している。

がろうじて、収集し得た資料を整理した結果からみた徳川末期における現下部町を構成している村々の人口動態は（表4）のとおりである。

前にも述べたように、寺請証文、宗門改帳、宗門人別帳、村諸式明細帳等の古文書資料が統計的処理をするまでには収集できなかったが、かろうじて収集し得た資料を、文化三（一八〇六）年と、それ以後弘化三（一八四六）年までの二つにわけて整理してみたものが（表4）である。

『甲斐国志』は、時の甲府勤番支配、松平定能（一七五八～一八三二）が幕府の内命を受けて着手したもので、定能が編さんの総裁となり当時、甲斐の国内に知られた三人の学者、内藤清右衛門（巨摩郡、西花輪村、長百姓）森島其進（都留郡、下谷村、長百姓）村松善政（巨摩郡、上小河原村、神主）らを編さん員にあげ、地方の村役人以下多くの協力によって資料を収集、九か年の歳月を費やして、文化十一年によりやく完成をみたものである。

全一二四巻、提要、国法の部、村里の部、山川の部、古跡の部、神社の部、仏寺の部、人物の部、士庶の部、附録からなる膨大なもので、資料収集の手広いこと、記述の正確なことで私撰地誌中代表的なものの一つに数えられているものである。

また、この甲斐国志編さんの資料収集時代の文化三年ころが、徳川期に

おける二大飢きんである天明天保の飢きんの中間にあり、関山孫三郎の「近世日本の人口構造」における全国及び甲斐国の人口表からみても、徳川期における人口減少期の中間になる年代である。この意味から文化三年を一つのポイントとしたわけである。

さらに弘化三年を徳川末期のポイントとしたのは、やはり関山氏の論文からは、全国的にまた甲斐国の人口が統計的につかめる年代として、享保六年があげられており、しかもそれから減少しつづけた甲斐の国の人口が再び増加曲線を描き、ちょうど享保六年と同じ人口に戻った年が弘化三年である。それはまた、文化三年から数えて四十年後であること、さらにその四十年後の明治二十二年、町村制施行を機会に合併のため、各村々に報告書を作製させているなどの理由によるものである。

また、弘化三年以後はどの資料を見ても、人口の増加率は急に高くなっている。このことから、徳川期の人口をその後の人口と併せて比較考察するために、弘化三年ころを徳川末期の人口と考えるのが適切であると考えて、この年を末期の時代ポイントとした。

ところで、この徳川期、各村々の人口動態表を見ると、文化三年を境に、その前期と後期で人口及び戸数の増加率に大きな特質のあるのがわかる。おそらく、天正時代から自然的増加率をたどってきた人口は、徳川中期になって頭打ちとなり、後期になるとむしろ減少傾向をとっている。また、後期には、桃ヶ窪村、大山村、八坂村、折門村など、山深い山間孤村においては戸数増加はないまでも、人口は依然として増加傾向を示しているのに対し、常葉村、切房木村、古関村、三沢村など比較的平坦地にある街村、路村等の集村は減少的傾向を示している。わずかに増加傾向にある清沢村や市之瀬村にしてもその増加率は非常に低くなっている。

従って、収集できた資料全体の統計で見ると、徳川後期における人口増加率は年平均〇・三九パーセントを示すが、山間孤村を除き、現下部町の中心的村落のみで計算すると、その増加率はわずかに年平均〇・〇六パーセントとなる。

仮にこの伸び率で文化三年から弘化三年まで推移したとすると、『甲斐国志』による各村々人口の約二・六パーセント増が弘化三年の推定人口ということになる。

関山氏の「近世日本の人口構造」によれば、甲斐国の文化元年の人口は、二九七、九〇三人であり、弘化三年のそれは、三一〇、二七三人である。この資料からは、四十年間の増加率は四・一パーセントである。それから見ると下部町の村々の増加率は非常に少ないが、資料収集数が少なく正確さを欠くきらいもあるが、下部町の自然環境の劣悪さや低生産性、徳川期における一戸当たり平均石高の比較等から考えてみると、二・六パーセントはそれほど大きく誤った数とも思えない。

そこで山間孤村の伸び率も考慮して文化三年から四十年後の人口を試算してみると、各村落ごとに増加率に格差があり、特に中心部に当たる比較的人口の多い村落が増加率がマイナスになるところが多く、全体的にみると総人口では文化年間とほぼ同じとなる。

これをさらに四十年後と比較してみると「表5」のようになる。

二 明治以後の人口

明治維新となつて、政府は統一国家としての国管理と政策遂行の上での基礎的作業としていち早く土地・物産・人口についての調査に着手した。明治四年四月、太政官布告をもって戸籍法を公布し、同五年一月二十九日現在をもつて全国一斉に戸口調査を実施した。従来の人別帳方式による石高、名主、高持、水呑などの身分記載方式を改め、華族、士族、卒、祠堂、僧侶、平民に区別し、氏名、生年月日、続柄などを記入させた。時の「干支」をとつて壬申戸籍と呼ばれているのがこれである。しかし、残念なことには、人権の見地から現在は法務局に保管され、固く封印されて、理由の如何を問わず、何人にもその閲覧が禁止されており、これを資料として利用することができなかった。時の統計資料も県全体としてはわかるものの、村単位の統計は残されておらず、明治初年における村々の人口実

態をとらえることができない。

社会的にみて、明治維新後は産業状態が一変し、生産が著しく上昇したことや、他県からの食糧移入が自由になったこと、また居住の自由が認められたことなどから、人口の増加率は急激に高まったであろうことは想像できる。

さらに明治十二年、太政官は山梨県に対して通達をなし、太政官権大書記官、杉享二をして甲斐国現在人別調を実施した。この調査は後に行われる国勢調査の予備調査的な性格をもつものであり、わが国初の本格的な統計調査であった。

調査は家別調査方式をとり、調査員の訪問聞きとり調査としているが、しかしこの調査の統計結果も、県郡単位までは県の保存資料によつて知ることができ、各村単位の資料は見当たらず、結局、明治初期の人口資料として断片的に収集できたのは、次の村々だけである。

村	年代	戸数	男	女	計
波高島	明治三年	三二	八一	八三	一六四
桃ヶ窪	明治七年	七	一九	一八	三七
切房木	明治二年	四六	一一七	一三一	二四八
嶺	明治三年	一四	三四	四二	七六
釜額	明治九年	二二	六一	五八	一一九
上野平	明治七年	四二	九〇	八五	一七五
杉山	明治七年	三八	七九	一〇一	一八〇
上田原	明治五年	四〇	七〇	六一	一三一

そこで、明治以後の人口の動態は、明治二十三年に行われた町村制施行の際の各村々からの報告書に記載された人口及び戸数を、明治二十二年の戸口として、そこを起点としてそれ以後、五年ごとの推移をみることにす

る。(五年ごとに区切ったのは、後に行われる国勢調査が五年に一回であるので、それにあわせて、五年くぎりとした)

三 現代の人口とその特色

(一) 明治末期から終戦時まで

明治十七年以降は、制度的に出入寄留の届出様式も確定し、人口の動態調査もやや確実さを増したといわれるが、それでも出寄留の脱落がおびただしい中で現任人口の計算が行われ、続けられた。

山梨県政百年史によれば、大正九年第一回国勢調査が行われるまでは、各種人口調査の間には大きな誤差があるとされている。例えば大正九年の第一回国勢調査結果と、それまでの市町村報告による人口、また本籍人口との間には大きな差があるとされている。同書の資料によれば国勢調査結果と本籍人口との差は実に一三パーセントになっている。

このように大正九年までの人口は確実性は低い、一応の推移の傾向はうかがい知ることが出来る。

明治維新以来の農業生産力の増大、所得の増加、教育文化の向上などは、家族を扶養する経済的基盤を多少とも改善させ「間引き、墮胎」の慣習の漸減を生じた。その結果として出生率の継続的な増加が生じたと考えられる。

下部町でも明治二十二年から、同四十年にかけての人口の増加は甚だしく、第二次世界大戦末期の異常増加率に匹敵する程の増加を示している。

この傾向は下部町のみではなく、全県的にも同じ傾向を示している。県人口の場合、明治十二年に比して同二十五年までの十三年間に四万人、同二十五年から三十五年間に五万人、三十五年から大正元年までの十年間に六万人と加速度的に増加している。

このような人口増加に対して、県全体の経済力や産業規模をもってしても、これらに十分な職を与え、所得を得させることは次第に困難となった。他方隣接する他府県、特に東京、神奈川、静岡などの経済発展は急速であり、これら隣接府県と山梨県との経済格差は急激に開いていった。こうし

大正9年各種人口比較

(山梨県)

国勢調査人口	男	女	計	国勢調査人口との差	比率
現任人口	二九〇、八七七	二九二、六六六	五八三、五四三		
本籍人口	三三九、六四四	三三六、四六八	六七六、一一三	十九、六九三	十七、七%

た中で、人々は他府県へ移動することで、人口増加の重圧をかわしていったといえよう。

下部町の場合も、このことは人口推移表に特徴的に表われている。大きな戦争があった中でも、明治三十五年から四十年にかけての大きな増加に比して、四十年から大正元年への増加率は急に鈍化している。中心的な下部地区は、それでもわずかな増加を示しているものの、久那土、古閑地区はほぼ横ばい、共和地区は減少している。

さらに大正五年から十年にかけての五年間は全体的に落ちこみを示しているが、これは前述したような社会的経済的要因のみではなく、統計上の要因も考えられる。前にも記したように、大正九年の第一回国勢調査までの現任人口と本籍人口との差は大きく、国勢調査以前の資料による人口は確実性の点で問題がある。しかもその差は常に現任人口がプラスであり、本籍人口を上まわっている。大正五年の人口は各旧村役場の統計資料であるのに比して大正十年のそれは、九年の国勢調査を受け、それを基に統計されていることを考えると、多少の統計的誤差は考えなければならぬ。

しかし、大正十年から、同十四年にかけての急激な減少は統計方法上の差とは考えられない。いずれも国勢調査の統計によるものであって、ここではやはり社会的要因が大きく作用しているものと考え方が妥当であろう。ちょうどこの時期は、第一次世界大戦後の世界恐慌が日本をおそ

明治22年以降 5年ごとの人口推移

地区	年 代	M22 (1889)		M35 (1902)		M40 (1907)		T元 (1912)		T 5 (1916)		T10 (1921)		T14 (1925)		S 5 (1930)		S10 (1935)	
		戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口
富里	戸	562	2,559	597	3,178	595	3,596	632	3,806	666	3,938	678	4,082	784	4,069	862	4,470	914	4,676
	平均家族密度		4.5		5.3		6.0		6.0		5.9		6.0		5.2		5.2		5.1
古閑	戸	332	1,656	317	1,873	321	2,061	346	2,138	338	2,242	335	2,137	356	1,867	355	1,982	374	1,988
	平均家族密度		4.9		5.9		6.4		6.1		6.6		6.4		5.2		5.6		5.3
久郡士	戸	466	2,431	442	2,484	418	2,627	440	2,629	424	2,766	428	2,566	474	2,317	509	2,592	511	2,629
	平均家族密度		5.2		5.6		6.2		5.9		6.5		6.0		4.9		5.7		5.1
共 和	戸	366	1,690	396	2,109	343	2,334	366	2,297	367	2,343	368	3,247	379	1,727	372	1,755	371	1,691
	平均家族密度		4.6		5.3		6.8		6.2		6.3		6.1		4.6		4.7		4.5
全 体	戸	1,726	8,336	1,752	9,644	1,677	10,618	1,784	10,865	1,795	11,289	1,805	11,032	1,993	9,980	2,098	10,799	2,170	10,984
	平均家族密度		4.8		5.5		6.3		6.0		6.3		6.1		5.0		5.1		5.1
			63.8		71.0		78.1		79.9		83.1		81.2		73.4		79.5		80.8

地区	年 代	S15 (1940)		S22 (1947)		S25 (1950)		S30 (1955)		S35 (1960)		S40 (1965)		S45 (1970)		S50 (1975)		S55 (1980)		
		戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口	戸	人口									
富里	摘要	戸	902	4,870	1,159	6,074	1,132	6,131	1,165	6,177	1,243	6,070	1,248	5,566	1,246	5,016	1,180	4,391	1,071	3,923
		平均	5.3	5.2	5.4	5.3	5.3	4.9	4.5	4.0	3.8	4.0	3.8	4.0	3.8	4.0	3.8	3.8	3.7	3.7
古閑	摘要	戸	374	2,054	408	2,276	390	2,253	447	2,472	422	2,214	405	1,893	379	1,594	359	1,325	394	1,356
		平均	5.5	5.6	5.8	5.5	5.5	5.2	4.7	4.7	5.2	4.7	4.7	4.7	4.2	3.7	3.7	3.7	3.4	3.4
久那郡土	摘要	戸	508	2,650	648	3,404	629	3,397	693	3,801	749	3,744	733	3,299	671	2,718	727	2,740	713	2,704
		平均	5.2	5.3	5.4	5.5	5.5	5.0	4.5	4.5	5.0	4.5	4.5	4.5	4.1	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7
共 和	摘要	戸	347	1,639	426	2,212	379	2,127	383	1,940	下田原、宮木は分町して中富町へ 上田原、一色は下部町へ(上田原→久那土地区、一色→下部地区へ)									
		平均	4.7	5.2	5.6	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1
全 体	摘要	戸	2,131	11,213	2,641	13,966	2,530	13,908	2,688	14,390	2,414	12,028	2,286	10,758	2,296	9,328	2,266	8,456	2,178	7,983
		平均	5.3	5.3	5.5	5.4	5.4	5.0	4.5	4.1	3.7	4.1	3.7	3.7	4.1	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6
体	摘要	戸	82.4	102.8	102.3	106.8	91.9	82.3	71.3	64.7	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3
		平均	82.4	102.8	102.3	106.8	91.9	82.3	71.3	64.7	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3	60.3

い、農村も深刻な不況に見舞われた時であり、特に小作農や零細農家の多い下部町の各集落は惨たんたる状況であったことが想像される。当時の農家の負債は自作農平均で五六一円、小作農平均で二九四円であった。しかもこの負債の内容は現在のような設備投資による生産性のもではなく、生活上の全く消費的なものである。一方、都市や工業地帯では、生糸相場の持ちなおしや、十二年の大震災後の復興に多くの労働力を必要とし、下部町でも多くの出寄留者を出したものとと思われる。

やがて恐慌もおさまり、養蚕、林業、その他県内産業の発展につれて、下部町人口も自然増加的傾向を示して、昭和十年代に入るが、それでも自然増加数の半数は流出人口となっている。

(二) 終戦から現在まで

前表で明らかのように、昭和十五年から、二十二年までの人口は異常な増加を示している。

これは一つは第二次世界大戦中の疎開者の受け入れによるものであり、山梨県はいずれの町村とも同じケースをたどって、人口の増加を来している。これらの増加は定住するのではなく、また産業構造の変化や経済的需用増大によるものではなく、一時的な現象であって、生産性のあるものでもなかった。

もう一つは、終戦に伴う帰還軍人や外地引揚げ者などの帰省、及び徴用などに強制的に出労させられた人たちの帰省によるものであり、さらにこれらに伴う出生率の増加が考えられる。しかしその数は前者による増加を上まわるものではなかった。

当時、我が国は戦時体制下の軍需物資生産に重点をおいた産業構造であり、加えて空襲により工業は壊滅状態にあった。工業の再建は急速にはできなかった。だが時を経るにつれて徐々に平和産業への移行が進展し、工業生産も再開し、物資不足も緩和されるようになってきた。それとともに都市からの疎開人口は、再び都市への人口流動として現われてきた。昭和二十二年から二十五年までの三年間はそれまで急激に上昇してきた人口が

逆に減少に向き、古閑、久那土、共和等のきなみに減少している。

都市復帰現象は単に人口減少のみでなく、それまで上昇し続けてきた戸数も急激に減少していることからもうかがえる。町全体としては、三年間で一一一戸の家数が減少している。この数は明治三十五年から四十年までの減少率（年平均一五戸）を上まわる年平均三十七戸の減少となっている。この都市復帰による戸口の減少も、昭和二十五、六年ごろを峠として、再び増加に転じている。

朝鮮動乱に端を発した特需による景気の向上は岩戸景気、神武景気の言葉を生み、社会の景気は向上し、一方、戦時中の異常状態から、自然に戻った人口動態は出生率の増加をもたらし、また乳幼児の死亡率の低下、医療の発達、食生活の向上、国民所得の増加など、さまざまな好要因が作用して人口は増加し、昭和三十年にはそのピークに達している。この傾向は町内三地区とも同じケースをたどり戸数二、六八八戸、人口一四、三九〇人に達している。この数は大正末期から昭和初期にかけての経済恐慌時、また明治三十五年の人口の一・四倍、戸数で一・三倍となっている。

下部町の過酷な自然環境、それからくる貧弱な地場産業の経済状況ではこの異常な人口増加は受け入れる余地はなく、限界に達したと見るべきであらう。

昭和三十年代は、我が国が異常ともいえる急激な経済発展に突入した時代である。敗戦によって史上類を見ない打撃を受けた我が国が、一億近い人口をかかえて民族的に自立し、世界経済の中で先進諸国に仲間入りしていくためには、経済的にも独自の地盤を固めなければならず、そのためには工業立国の方針を進める必要があった。政府は工業発展の方途を講じ、あらゆる援助を惜しまなかったために、我が国の産業は急速に発達して工場の新設は相次ぎ、GNP（国民総生産）は増大し、巨大工業地帯の発生とともに、工業地域への人口流動が見られるようになった。

下部町も例外ではなく、昭和二十五年から三十年にかけて膨張した人口は、はけ口を見つけたように流動をはじめている。この現象は単に出かせ

ぎ的労働人口のみの流出ではなく、戸数減少をも伴い、これから後の人口減少にさらに拍車をかけている。

日本経済はその後も急速に発展を続け、昭和四十二年のGNPは自由世界第三位、国民所得では第二位となり、翌四十三年にはGNPで自由世界第二位となった。資本は自由化され、それに伴って企業の合併も相つぎ、四十五年には八幡・富士両製鉄所が合併、世界一の企業が誕生して、日本経済は異常な発展を遂げた。この経済成長は工業都市への人口過密状況を生み、また逆に農山村地帯には極度な過疎現象をひきおこした。

本町においても、昭和三十年代に始まった人口の流動現象は急速に進み、昭和五十五年には何と明治二十二年の人口八、三三六人をはるかに下回り七、九八三人となっている。この人口激減状況は現在に至ってようやく衰えを見せてはいるものの、下部町に多い山間の疎村、孤村集落に深刻な過疎問題を生み出している。

③ 過疎化の波

下部町における過疎現象は、昭和三十年代、日本が高度経済成長期に入った時から始まる。前述したような社会経済情勢の中で、青年層の県外流出が続く、年齢別人口構成は後で述べるように青年層の比率が低くなり、結局子どもの出生に関係する年齢層がうすいため、必然的に出生率は低下してきた。

しかも、それに加えて、生活水準の向上を望んで家族規模を縮小する傾向、子どもの教育を考慮して子どもの数を制限する傾向、女性解放に伴う分娩、育児への配慮、文化水準の上昇とともに、少産少死の傾向は増大し、幼児の人口は急激に低下していった。事実、昭和二十五年、平均家族数は五・五人であったものが年々低下し、昭和四十六年には遂に四人となり現在では三・六人と低下している。この数は年寄り一人に夫婦、子どもが一人か、または夫婦に子ども一人か二人の平均家族を想起させる。世界的経済恐慌に見まわれた昭和初期でさえ、平均家族数は四・七人であったことを考えると隔世の感がする。

第二章 下部町の集落

・ 13年間に戸数の減少率が10%以上の集落

川向、桃ヶ窪	100%
折門、八坂	55%
杉山	27%
一色	20%
湯之奥	19%
三保	18%
釜額	17%
大磯小磯	16%
車田	13%
上田原	13%
根子	10%
切房木	10%

・ 戸数がほとんど変わらないかむしろ増加した集落

下部	+1戸
上之平	+3戸
清沢	+1戸
岩欠	+1戸
市之瀬	+8戸
波高島	-2戸
樋田・熊沢	+9戸
三沢	+11戸
芝草・水船	+1戸
中之倉	+3戸
常葉	
大炊平	-1戸

・ 人口の減少率が30%以上の集落

折門・八坂	78%
杉山	49%
三保	45%
湯之奥	44%
根子	41%
大磯小磯	40%
一色	40%
清沢	37%
釜額	36%
古関	34%
芝草・水船	33%
岩欠	31%

・ 人口の減少率が20%以下の集落

波高島	13%
上之平	17%
市之瀬	12%
車田	15%
樋田・熊沢	9%
三沢	19%

町内各集落の現在人口

集落	年													備 考
	大 字	昭 和 41 年			昭 和 51 年				昭 和 54 年					
		戸	男	女	計	戸	男	女	計	戸	男	女	計	
富	川 向					0	0	0	0	0	0	0	0	昭和35 7戸
	桃ヶ窪	13	30	26	56	0	0	0	0	0	0	0	0	
	大 子					3	3	4	7	3	2	3	5	
	波高島	94	209	200	409	96	183	189	372	92	174	179	353	
	下 部	196	412	475	887	205	334	363	697	197	312	346	658	
	湯之奥	21	39	45	84	17	28	27	55	17	24	23	47	
	上之平	64	126	158	284	70	115	133	248	67	108	127	235	
	常 葉	426	923	1,041	1,964	425	761	821	1,582	396	680	727	1,407	
	清 沢	29	80	86	166	31	56	60	116	30	49	55	104	
	大炊平	28	81	77	158	27	64	71	135	27	57	65	122	
	岩 欠	40	106	96	202	40	77	75	152	41	70	69	139	
	里	杉 山	49	100	125	225	36	63	70	133	36	52	63	
北 川		104	268	290	558	97	211	216	427	96	212	204	416	
市之瀬		74	187	186	373	80	180	157	337	82	176	150	326	
一 色		80	151	174	325	67	105	119	224	64	97	98	195	和平も 含む
小 計	1,218	2,712	2,979	5,691	1,194	2,180	2,305	4,485	1,148	2,013	2,109	4,122		
久	芝草水船	40	100	106	206	41	71	73	144	41	70	68	138	下大山 は現在 1戸
	道	56	112	132	244	57	86	110	196	56	87	102	189	
	切房木	67	144	167	311	61	124	132	256	60	108	123	231	
	車 田	95	156	227	383	84	143	178	321	82	148	174	322	
	那 樋田熊沢	55	138	140	278	62	127	137	264	64	125	128	253	
	三 保	72	214	191	405	65	130	115	245	59	118	103	221	
	三 沢	288	677	723	1,400	308	576	597	1,173	299	551	582	1,133	
	小 計	733	1,661	1,825	3,486	731	1,358	1,446	2,804	713	1,301	1,372	2,673	
古	古 関	129	298	359	657	126	226	237	463	125	207	225	432	丸畑も 含む 峯山も 含む
	釜 額	28	76	78	154	24	46	53	99	23	52	46	98	
	中 之 倉	44	108	109	217	44	87	79	166	47	82	76	158	
	瀬 戸	34	64	84	148	34	43	55	98	31	36	47	83	
	根 子	70	190	175	365	64	115	126	241	63	101	113	214	
	大磯小磯	60	147	158	305	50	99	102	201	50	94	87	181	
	折門八坂	49	132	131	263	25	40	42	82	22	23	33	56	
	小 計	414	1,015	1,094	2,109	367	656	694	1,350	361	595	627	1,222	
合 計	2,365	5,388	5,898	11,286	2,292	4,194	4,445	8,640	2,222	3,909	4,108	8,017		

昭和二十二年のいわゆるベビーブームはその後、当然四十五年から五十年にかけて第二のベビーブームをもたらすはずである。しかし、下部町ではその傾向は全く見られず、幼児人口は横ばいを続け、青年人口もまた横ばい状態で推移している。

このことは、都市への青年層の人口流動が、依然として衰えを見せていないことを表わしている。

下部町全体の人口としては、昭和四十年から五十五年までの十五年間に二、七七五人（年平均一八五名、昭和三十年から五十五年までの二十五年間では実に六、四〇七人（年平均二五六人）の人口減少が見られる。この六、四〇七人という数は文化十一年、下部町の全体人口六、五五五人に匹敵する数である。二十五年の間に、江戸時代の三三か村が消滅したことになる。

しかし、この過疎現象は、下部町全体に平均的に進行しているものではなく、町内各集落の状況を見ると、地域的に格差が見られる。

前ページの表に見られるように、昭和四十一年から五十四年にかけて、十三年間に一五パーセント以上の戸数減少を記録した集落は、いずれも山間の孤村集落であり、比較的平坦地に位置する集村集落はむしろわずかながら増大している。

人口の減少についても同じ傾向が見られ、四〇パーセント以上の減少をみせている集落は前記の集落と重なる。

消費文化の発達、生活水準の向上と、それをもたらした産業構造は、もはや土地依存の生活をなしたたせなくし、人々を土地から引きはなし、都市従属の都市化生活へ追いやった。経済・生産性は都市のそれに比すべくもないが、消費レベルは急速に都市化していった。

道路はもはや集落間を結ぶ単なる連絡のための道や径ではなく、都市化した消費生活を支える経済的動脈の役目を果たすようになった。必然的に道路への依存度は高まり、町行政としても道路行政は重要な施策となった。しかし、道路が中之倉や、道、水船などのように主要往還的道路の路

村集落や、その道路に依存して発達した集村、街村集落はともかく、道路開設が困難な地域や、道路が行きずまり的な地域では、旺盛な消費をまかなえる物資流動は困難となる。人々は生活レベルの向上を図り、または維持するために、当然そこを出て、所得の増加と消費文化の享受のために努力せざるを得なくなる。

こうして、まず山間の孤村から人口流出が激しくなり、村としての機能をなくしていった。

川向、桃ヶ窪の両部落は遂に無人と化し、上、下折門もまた拳村離脱せざるを得なくなった。大山部落の下大山は、以前は九戸を数える孤村集落の形態をとっていたが、現在では一戸となり、集落の機能を失っている。このほか三沢の西久保、上之平の太子等も集落機能はなくなっている。

また幼児人口の減少は町内各学校の児童数減となり、以前は下部小学校にあった長塩、和名場、高島、湯町、一色。久那土小学校の道、上田原、三保。古関小学校にあった折八、磯、根子の各分校は、三保分校が小学校に独立したほかはことごとく廃止されてしまった。三保小学校も独立当時（昭和四十五年）には五〇人余りの児童数を数えたが、現在は一〇名の超小規模校となっている。

四 人口構成の特徴

過疎化現象は単に人口の減少に止まらず、人口構成上にもさまざまな問題をなげかけている。その最も特徴的なものは年齢階層別による構成の変化である。この構成を調べるのには国勢調査の資料が最も的確であるので、同資料が完備ししかも人口が最大ピークに達した昭和三十三年を起点として以降五年毎の五歳階級別人口構成資料によって考察することにした。

まず五歳階級別人口の変遷では、前述したような社会変化に伴って人口規模は年々減少しているのに比して、その構成割合は決して比例していない。

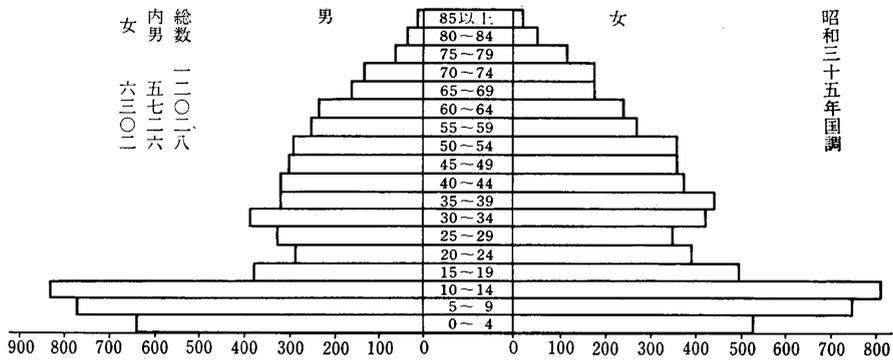
これを見やすくするために、累積型グラフにしてみがた、三十年におけ

5 歳階級別年齢人口とその変遷

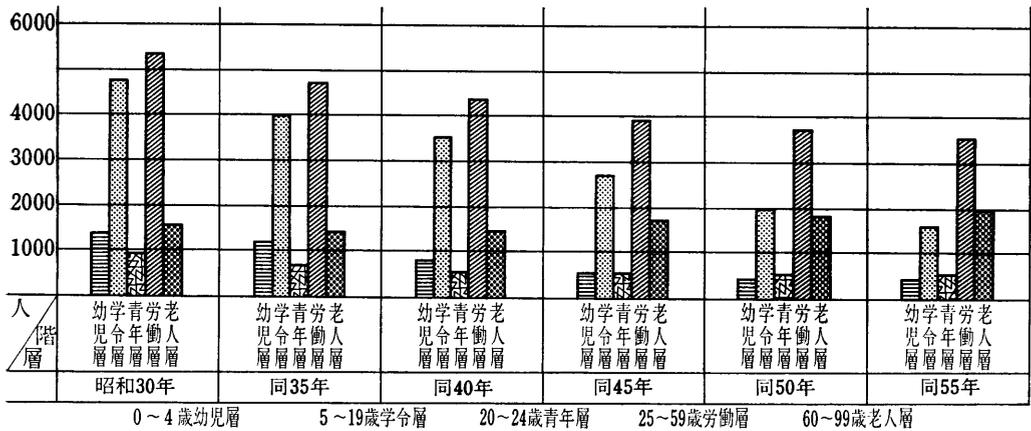
下部町 (国勢調査資料による) 55 年は役場調

	昭和 30 年		計	昭和 35 年		計	昭和 40 年		計	昭和 45 年		計	昭和 50 年		計	昭和 55 年		計
	男	女		男	女		男	女		男	女		男	女		男	女	
85以上	7	26	33	9	21	30	10	33	43	21	43	64	32	59	91	31	51	82
80~84	25	46	71	37	51	88	28	72	100	50	89	139	50	70	120	76	101	177
75~79	75	115	190	61	115	176	83	127	210	88	117	205	118	155	273	112	164	276
70~74	113	176	289	125	175	300	125	144	269	164	188	352	156	194	350	163	224	387
65~69	194	237	431	157	178	335	199	209	408	175	209	384	201	259	460	221	268	489
60~64	216	242	458	233	237	470	221	252	473	226	285	511	244	281	525	231	310	541
55~59	293	293	586	251	269	520	258	330	588	257	297	554	256	310	566	262	366	623
50~54	301	312	613	290	355	645	278	324	602	270	327	597	274	390	664	339	369	708
45~49	344	397	741	297	355	652	294	350	644	288	411	699	347	366	713	279	270	549
40~44	338	414	752	316	372	688	306	433	739	351	369	720	263	262	525	182	232	414
35~39	361	435	796	321	440	761	386	404	790	269	269	638	186	239	425	200	183	383
30~34	388	518	906	394	424	818	300	298	598	185	227	412	171	181	352	228	189	417
25~29	505	545	1,050	332	348	680	218	264	482	192	198	390	250	199	449	230	194	424
20~24	464	512	976	285	388	673	185	277	462	248	243	491	233	248	481	281	236	517
15~19	562	613	1,175	381	486	867	478	494	972	459	454	913	407	352	759	316	310	626
10~14	841	871	1,712	828	806	1,634	733	724	1,457	591	498	1,089	361	376	737	304	252	556
5~9	947	922	1,879	767	751	1,518	607	522	1,129	361	371	732	296	249	545	211	202	413
0~4	875	857	1,732	642	531	1,173	387	405	792	294	245	539	224	197	421	210	186	396
	6,849	7,541	14,390	5,726	6,302	12,028	5,096	5,662	10,758	4,489	4,840	9,329	4,069	4,387	8,456	3,876	4,107	7,983

社会的年齢階層別人口の変遷



本町年齢階層別人口構成 (昭和55年)



るピラミッド型の順調な人口構成は四十五年あたりから、中ふくれ型となり、五十五年にはずん胴型に近くなっている。特に本町において特徴的なのは、高等学校卒業以上の年齢層に当たる二〇歳から三〇歳の青年層が、中くびれになってきていることである。しかも、そのくびれの幅は年を追うにつれて上にのび、幅が長くなっている。このことは、高学歴社会になるにつれて進学率が高くなり、大学進学のための流出もさることながら、高卒就職者も、県外就職に道を求めざるを得ない社会情勢にあることを示している。中くびれが四十五年から五十年にかけて三〇歳代、四〇歳代と高齢化し、その幅が大きくなっていることは、進学のために流出した人口がユーターンはせずに、そのまま都市人口として定着していることを表わすものである。このような中くびれに属する二〇歳代後半から四〇歳代にかけての人口は、出生率に深くかわる年齢層であり、このことは直接的に出生率低下としてあらわれ、幼年層人口の減少となっている。さらに近時普及した家族計画は出生率低下をさらに大きくしている。

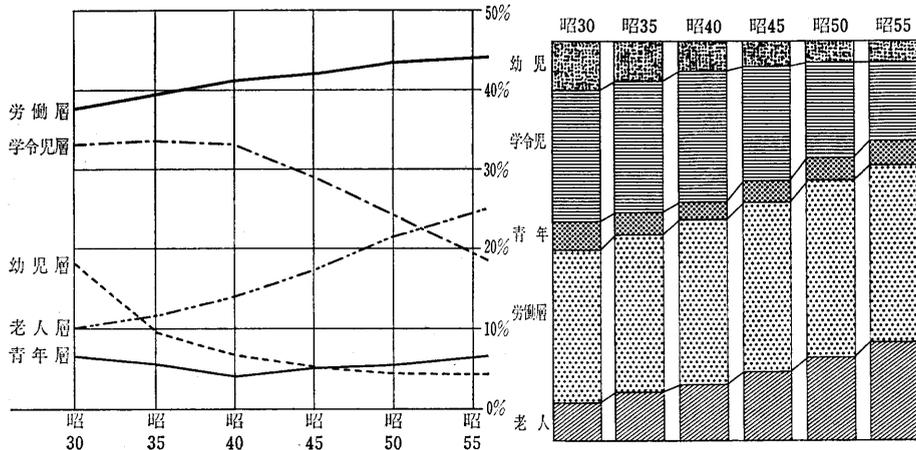
また、この部分について、男女間の比率を検討すると三十年から四十五年ごろまでは女子に比して男子の減少比率が大きいことがわかる。いわば流出の中心が男子であったことを示している。

しかし五十年、五十五年とその差は小さくなっており、女子青年層の流出も増大していることがわかる。これとは対比的に老人層は年々増加の傾向を示し、全人口に占める老人層の比率は高くなり、人口構成の老年化をはっきりと示している。

社会的年齢階層別人口とその変遷

年次	性別	0～4歳		5～19歳		20～24歳		25～59歳		60～99歳		総数
		幼児層		学令児層		青年層		労働層		老人層		
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	
昭和30年	男	875	12.8	2,350	34.3	464	6.7	2,530	36.9	630	9.1	6,849
	女	857	11.3	2,416	32.0	512	6.8	2,914	38.6	842	11.1	
	計	1,732	12.0	4,766	33.1	976	6.8	5,444	37.8	1,472	10.2	
昭和35年	男	642	11.2	1,976	34.5	285	4.9	2,201	38.4	622	10.8	5,726
	女	531	8.4	2,043	32.4	388	6.2	2,563	40.6	777	12.3	
	計	1,173	9.7	4,019	33.4	673	5.6	4,764	39.6	1,399	11.6	
昭和40年	男	387	7.6	1,818	35.6	185	3.6	2,040	40.0	666	13.1	5,096
	女	405	7.1	1,740	30.7	277	4.9	2,403	42.4	837	14.7	
	計	792	7.3	3,558	33.1	462	4.3	4,443	41.3	1,503	13.9	
昭和45年	男	294	6.5	1,411	31.4	248	5.5	1,812	40.1	724	16.1	4,489
	女	245	5.1	1,323	27.3	243	5.0	2,098	43.3	931	19.2	
	計	539	5.7	2,734	29.3	491	5.3	3,910	41.9	1,655	17.7	
昭和50年	男	224	5.5	1,064	26.1	233	5.7	1,747	42.9	801	19.7	4,069
	女	197	4.5	977	22.3	248	5.6	1,947	44.3	1,018	23.2	
	計	421	4.9	2,041	24.1	481	5.6	3,694	43.7	1,819	21.5	
昭和55年	男	210	5.4	831	21.4	281	7.2	1,720	44.3	834	21.5	3,876
	女	186	4.5	764	18.6	236	5.7	1,803	43.9	1,118	27.2	
	計	396	4.9	1,595	19.9	517	6.4	3,523	44.1	1,952	24.5	

社会的年齢階層別人口比率の変遷



このような傾向は山梨県全体としても同じような傾向を示すが、下部町の場合はそれが極端な形で特徴的に現われている。仮に六〇歳以上の年齢階級層の人口が全人口に占める割合を百分率で示すと、次のようになる。

昭和三十年 一〇・二 昭和三十五年 一一・六

昭和四十年 一一・九 昭和四十五年 一七・七

昭和五十年 二一・五 昭和五十五年 二四・四

昭和四十年から、四十五年にかけて急に割合は高くなっているし、五十年、五十五年と上昇割合はさらに続いているが、これらは医療技術の進歩、老人医療無料化など社会福祉行政の向上による平均年齢の高齢化もあるが、それよりも青年層の人口流出、低年齢層の極端な人口減少が高齢化を強く押し上げていると見るべきであろう。

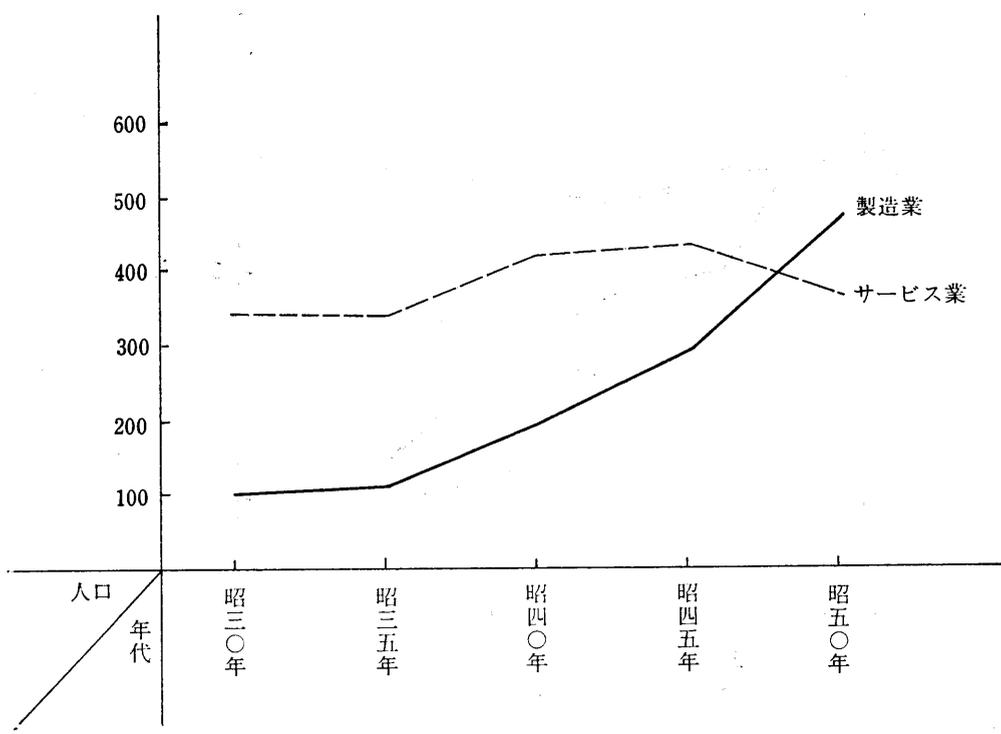
生産性人口といわれる二十五歳から五十九歳までの年齢層の変遷を見ると、これは高年齢層や低年齢層のような大きな変化が見られず、大体横ばい状態を示している。とはいえ、その人口はやはり減少傾向を示している。昭和三十年と比較すると五十五年は一、九一七人も減少している。年平均七六人強の減少である。このことは、県内における就業の余地が、下部町内、及びそこから通勤可能半径内においては限界を示すものである。

しかし、この生産性人口が全人口に対する比率をみると、むしろわずかながら高率上昇カーブを描いている。このことはわずかながらも家族所得の上昇を示すものといってもよいであろう。

年齢層の高齢化、生産性人口の減少にもかかわらず、消費水準の低下をくいとめているのは、低年齢層の減少による平均家族数の低下、後述する企業誘致などの政策による、女子労働人口の増加等であると考えられる。

過疎化現象の分析的考察のもう一つの観点は、労働人口（生産性人口）の推移と産業別就業状況の変遷である。これも国勢調査の資料により、昭和三十年以降、五年ごとに昭和五十年までの変化を示すと次頁表のとおりである。まず特徴的にいえることは、第一次産業（農業、林業）が三十年以

女子就業人口の変遷



降二十年間に急激に減少し、逆に第二次産業（建設、製造）と第三次産業（卸、小売、サービス）が同じような割合で増加していることである。

昭和三十年代は農業の就業率が五七パーセントであったのが、同五十年代には一八パーセントと三分の一に減少している。これは農業技術の進歩、機械化などによる経営方式の近代化による労働力の減少とみるよりも、社会の経済構造・産業構造の変化による離農者の増大とみるべきであろう。

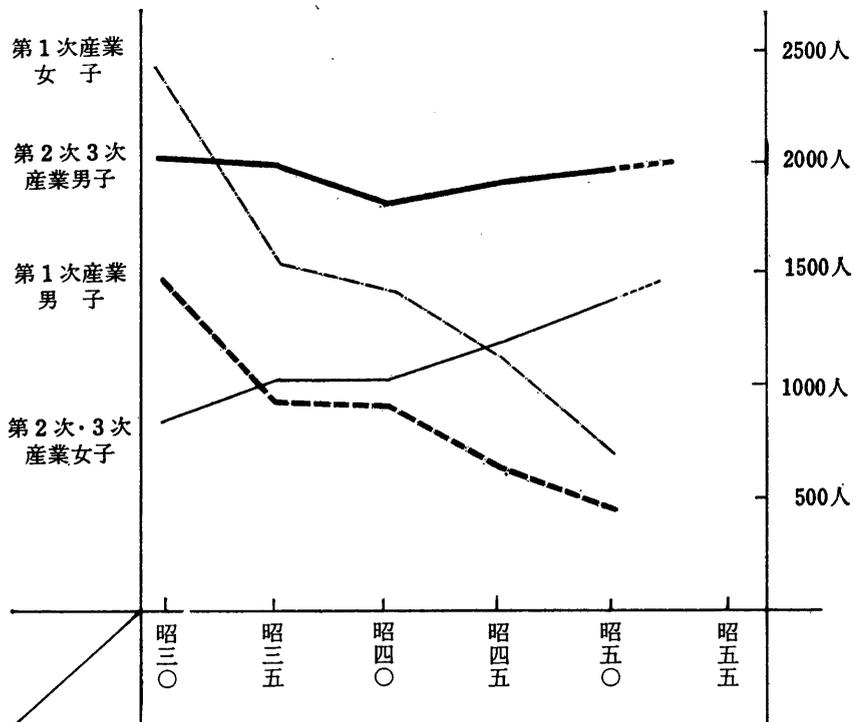
限られた狭少な耕地、農家の大多数が兼業農家であることを考えれば、当然の変化と見ることができる。一時、全国的に三チャン農業ということがいわれたが、下部町の場合、農業における男女の就業比を計算してみると昭和三十年から、同五十年まで、男子四〇パーセント前後、女子六〇パーセント前後と、男女間の比率はほとんど変わってはいない。

農業就業人口における女子の百分比

昭和三十年	六二%	昭和三十五年	六二%
昭和四十年	六二%	昭和四十五年	六三%
昭和五十年	六一%		

農業就業人口の減少に伴って、農家数も減少しているが、農家数の減少が残った農家の経営規模の拡大につながっていない。このことは、本町を含めた河内地方の自然環境上からくる特質のひとつである。近代的産業構造化した現代社会において、専業農家として、企業的に経営規模を確保するには余りにも耕地が狭く、また立地条件も劣悪である。農家の経営規模は小さく、ほとんどが零細農家で、兼業農家が多い。兼業とはいってもむしろ副業的に家計を補足するために農業を営む形が多い。このような形態からは、その男女比が常に女子に高くなるのは当然である。加えて農業機械の発達とその導入は、季節的だけでなく恒常的に余剰労働力を生む結果となる。このようにして農業従事者は余剰労働力だけでなく第二次、第三次産業における雇用の拡大があれば、農業規模を縮小しても、経済的メリットの高い産業に流れていくことは当然といえよう。従って農業就業人口の減少があっても、一方において他産業の雇用の拡大があり、非就業人

産業別男女別就業人口の変遷



口の増大につながらない限りにおいては、本町のような自然状況の中ではそれほど大きく問題視しなくてもよいであろう。次に労働人口（生産性人口）の変遷であるが、労働人口（生産性人口）を国勢調査では一五歳以上として統計処理をしているが、この年齢層の中には

産業別、年代別就業人口

産業別分類	年次	性別		昭和30年				昭和35年				昭和40年					
		性別		男		女		男		女		男		女			
		男	女	計	%	計	%	計	%	計	%	計	%				
農業		1,529	2,415	3,944	57.5	940	31.8	1,565	59.9	2,505	45.0	902	33.0	1,451	58.2	2,353	45.0
林業		301	66	367	5.3	345	11.7	151	5.8	496	8.9	129	4.7	18	0.7	147	2.8
漁業		2	1	3	0.04	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
狩猟		32	15	47	0.7	22	0.7	5	0.2	27	0.5	31	1.1	0	0	31	0.6
水産		364	25	389	5.7	456	15.4	77	2.9	533	9.6	451	16.5	33	1.3	484	9.2
建設		294	103	397	5.8	248	8.3	111	4.2	359	6.4	294	10.7	193	7.7	487	9.3
製造		357	235	592	8.6	379	12.8	296	11.3	675	12.1	348	12.7	317	12.7	665	12.7
卸小売		14	6	20	0.3	13	0.4	7	0.3	20	0.4	17	0.6	4	0.2	21	0.4
金融		195	31	226	3.3	147	4.9	29	1.1	176	3.2	156	5.7	31	1.2	187	3.5
運輸		9	0	9	0.1	9	0.3	0	0	9	0.2	9	0.3	0	0	9	0.2
電気		328	341	669	9.8	295	9.9	342	13.1	637	11.4	314	11.5	425	17.0	739	14.1
ガス		131	54	185	2.7	100	3.4	27	1.0	127	2.2	75	2.8	21	0.8	96	1.8
水道																	
熱供給																	
通信																	
給電																	
公																	
計		3,556	3,292	6,848	57.5	2,954	31.8	4,214	59.9	5,564	45.0	2,726	33.0	2,493	58.2	5,219	45.0
1 労働人口(15歳以上の人口)		4,186	4,881	9,067	57.5	3,489	31.8	4,214	59.9	7,703	45.0	3,369	33.0	4,011	58.2	7,380	45.0
2 総人口		6,849	7,541	14,390	75.5	5,726	84.6	6,302	61.9	12,028	72.7	5,096	80.9	5,662	62.1	10,758	70.7
3 労働人口の就業率			84.9														
4 現実労働人口(25~59歳)																	
5 1に對する非就業人口割合					1.6						1.5						1.4
6																	
7 農業の男女比		100	160	6,848		100		166		2,505		100		161			
8 サーパーの男女比		100	103	9,067		100		115		7,703		100		135			
9 製造業の男女比		100	35	14,390		100		45		12,028		100		66			
10 卸小売業の男女比		100	66	5,444		100		78		4,764		100		90			

産業別分類	年次	性別		昭和45年			昭和50年						
		男	女	男	女	計	男	女	計				
農業		655	1,133	48.7	1,788	36.7	448	701	33.9	1,149	25.6		
林業		67	2.6	9	0.4	76	1.6	35	1.4	6	0.3	41	0.9
漁業		2	0.1	0	0	2	0.04	2	0.1	2	0.1	4	0.1
鉱業		27	1.0	2	0.1	29	0.1	29	1.2	1	0.1	30	0.7
建設業		505	19.8	46	1.9	551	11.3	539	22.2	57	2.8	576	12.8
製造業		285	11.2	289	12.4	574	11.7	393	16.2	464	22.5	857	19.1
卸売業		399	15.7	351	15.1	750	15.4	355	14.6	296	14.3	651	14.5
小売業		15	0.6	11	0.5	26	0.5	18	0.7	18	0.9	36	0.8
金融業		147	5.7	25	1.1	172	3.5	14.1	5.8	26	1.3	167	3.7
運輸業		7	0.3	1	0.04	8	0.2	8	0.3	1	0.1	9	0.2
電気ガス水道熱供給業		345	13.5	434	18.7	779	15.9	360	14.8	458	22.2	818	18.2
サービス業		91	3.6	24	1.0	115	2.4	97	4.0	33	1.6	130	2.9
公務													
1 労働人口(15歳以上の人口)	計	2,545	2,325	4,870	36.7	2,425	2,063	4,488					
2 総人口		3,243	3,726	6,969		3,188	3,565	6,753					
3 労働人口の就業率		4,489	4,840	9,329	69.8	4,065	4,391	8,456					
4 労働人口(25~59歳)				62.4									
5 現実労働人口(25~59歳)				3,910									
6 " 1に対する非就業人口割合					1.3								
7 農業の男女比		100	172			100	156						
8 サービス業の男女比		100	125			100	127						
9 製造業の男女比		100	101			100	118						
10 卸売業の男女比		100	88			100	83						

町村人口密度の比較

人口密度 100 人以下 の 町 村	総人口 人	多人口 順 位	総面積 km ²	広面積 順 位	人 口 密 度		人口稀 薄順位 S 50 人	経営耕 地面積 km ²	経営耕 地に對 する人 口密度 人
					昭35年人	昭50年人			
芦 安 村	699	22	148	3	7.9	△ 4.7	1	0.2	3,495
早 川 町	3,777	9	370	1	△ 28.9	△ 10.2	2	1.6	2,360
三 富 村	1,772	17	136	5	△ 20.3	△ 13.1	3	1.2	1,476
丹 波 山 村	1,364	19	101	10	△ 22.4	△ 13.5	4	0.3	4,546
上 九 一 色 村	1,880	16	86	13	△ 26.7	△ 21.7	5	6.2	303
鳴 沢 村	2,136	15	89	11	25.9	△ 23.9	6	2.5	854
小 菅 村	1,328	20	52	17	△ 38.9	△ 25.6	7	0.6	2,213
芦 川 村	1,067	21	37	19	△ 46.9	△ 28.9	8	0.7	1,524
道 志 村	2,424	13	79	14	△ 39.2	△ 30.5	9	1.7	1,425
白 州 町	4,555	7	138	4	49.6	△ 33.1	10	6.7	679
須 玉 町	8,403	3	174	2	△ 67.3	△ 48.2	11	9.8	857
大 和 村	2,218	14	44	19	△ 61.1	△ 50.8	12	1.0	2,218
大 泉 村	3,266	11	63	15	△ 65.9	△ 51.8	13	4.8	680
足 和 田 村	1,569	18	28	20	△ 57.2	55.4	14	0.8	1,961
秋 山 村	2,507	12	45	18	△ 69.3	△ 56.0	15	1.4	1,790
武 川 村	3,459	10	60	16	80.2	△ 57.4	16	4.2	823
富 沢 町	5,181	6	88	12	△ 77.9	△ 59.1	17	3.2	1,619
○下 部 町	8,456	2	131	6	△ 92.0	△ 64.7	18	4.2	2,013
南 部 町	7,590	4	112	8	△ 82.6	△ 67.5	19	2.7	2,811
牧 丘 町	7,539	5	102	9	△ 96.7	△ 73.7	20	7.2	1,047
身 延 町	10,345	1	130	7	△ 105.8	△ 79.3	21	3.4	3,042
山 中 湖 村	4,607	8	89	11	△ 132.2	88.5	22	1.5	3,071
西 八 代 郡 上 三 大 六 下 九 一 珠 大 郷 部 一 珠 大 郷 部 色 村 町 一 珠 大 郷 部 町 門 町	1,880		86		△ 26.7	△ 21.7		6.2	303
	4,229		29		△ 171.7	△ 144.4		3.7	1,142
	13,627		33		△ 435.2	△ 412.1		4.0	3,406
	4,862		13		△ 414.1	△ 366.1		2.0	2,431
8,456		130		△ 92.0	△ 64.7		4.2	2,013	
西 八 代 郡	33,054		293		△ 134.4	△ 112.9			
山 梨 県	783,050		4,463		△ 175.2	175.4			
下 部 町 古 久 那 地 区 下 部 地 区 古 久 那 地 区	4,391		60		△ 100.9	△ 73.0		1.7	2,583
	1,325		49		△ 44.6	△ 26.6		1.1	1,204
	2,740		21		△ 178.5	△ 130.6		1.4	1,957
一 玉 田 八 勝	9,692		29			326.0		9.6	1,007
宮 穂 富 田 沼	3,380		8			419.4		3.9	866
	6,814		10			694.6		4.1	1,661
	4,195		8			503.0		3.6	1,165
	8,854		37			240.8		8.9	994

高校及び大学在学中のもの、及び高年齢者も含まれている。現実性からいうと無理がある感がある。現在、社会的に生産労働にたずさわるのは高卒以上であり、その年齢は一九歳である。現在高校進学率は百パーセントに近く、しかも大学への進学率も年々高くなって、その年齢はさらに押し上げられている。このことは、国勢調査における労働人口の就業率を計算してみると、その率が年々低下していることからもうかがわれる。国勢調査における労働人口が現実の労働人口であるならば、その就業率の低下の割合にみあって、失業率の高さもつと社会問題化するはずである。現実には下部町の場合も、失業問題がそれ程深刻な問題とはなっていない。

そこで、大学卒業後、すべての青年が何等かの職につくものとしてその年齢を二四歳、現在定年年齢とされている年齢を六〇歳とし、それをめやすにして、二五歳から五九歳を現実労働人口として割出しを試みた。そしてそのすべてが就業しているものと仮定して、総人口から差し引き、残りを非就業人口としてみた。

この非就業人口を、現実労働人口で除し、労働人口一人当たりが非就業人口何人を扶養することになるかを計算してみたのが「現実労働一人に対する非就業人口の割合」である。この数値は昭和三十年、一・六八、三十五年一・五八、四十年一・四八、四十五年一・三九、五十年一・二八と年を追って減少している。このことは、現実に生産性人口の増加か、またはその就業率の上昇を示すものであろう。

国勢調査による労働人口をもとにして計算した就業率の低下は、進学率の上昇が大きな原因と考えられ、現実の就業率の低下はないものと思われる。

では、現実就業率の上昇をもたらせたものは何であるかを考えてみると、ひとつは前述した青年層人口の流出による、人口減少であるが、もうひとつ見逃がしてはならないものは第二次、第三次産業における女子労働人口の増加である。昭和三十年には八七七人が、同三十五年には一、〇四五人、四十年、一、〇四二人、四十五年、一、一九〇人、五十年、一、三

六二人となっており、三十年代に比して五十年代は、五〇パーセント以上の増加率である。

これに対して男子のそれを見ると、昭和三十年、二、〇二七人、同三十五年、二、〇一四人、四十年、一、八九〇人、五十年、一、九七七人と変化なく、むしろ減少している。

このことは、通勤条件が困難な女子労働人口（特に主婦の場合）を考慮してみると、町内における女子労働の就業容量の増大を物語っている。事実青年層人口の流出は変化しないにもかかわらず、製造業、サービス業における女子就業人口は年々増加している。製造業においては、昭和三十年代一〇三人に対して、五十年代には四六四人と四倍強になっており、サービス業においても、三十年代三四一人に対し、五十年代には四五八人と、一・三倍となっている。人口が減少している中でこれだけの増加を示していることは注目し値する。

なお、女子労働の特質からいって、町内企業の下請的家内労働の就業者もまた増大している。統計的にはつかむ資料はないが、その数は少なくはない。それら統計の数値としてはでてこないが、潜在的労働人口として生産性に深くかかわっているはずである。

女子就業人口はそのほとんどが町内産業の業者とみてよいであろう。そしてこのことは、下部町行政が当面課題として取りこんできた過疎対策を拡大し、地場産業発展の諸施策は潜在的労働人口を増加させている。このような過疎対策は県段階でも重要施策として取り組まれ、それは経済成長の鈍化と相乗して、流出人口のユーターン現象を生みだしている。本町においてもそのきざしは見えている。

産業別人口構成とは直接的に関係しないが、過疎対策として重要視されるものに住宅問題がある。本町は平坦地が少なく、立地条件としても企業誘致には限界がある。しかし、全県的にみれば国中はその発展性が強く、県としても重要施策として推進している中であり、下部町はその通勤範

厩内に入る。このことを考えれば、町営住宅の建設、県営住宅の誘致はこれまで以上に推進しなくてはならない問題のひとつであろう。

三沢地区にある柿島町営住宅を例にとれば、その入居者のほとんどが現実労働人口の年齢層であり、潜在労働人口も含めると、その就業率は百パーセントに近い。また出産率にも大きく関係する年代層である。これを一集落とみると、おそらく下部町内のどの集落にも見られない高出産率を示しているであろう。昭和五十五年度、久那土小学校入学児童は二六名であったが、その内の九名が柿島町営住宅の児童によって占められているという事実がそのことを立証している。

(5) 人口の分布状況

山間地、山沿い地帯、平坦地と地形的に複雑な下部町の場合、人口の分布状況は一樣ではなく、地域的に大きな差がある。

下部町の人口密度は、昭和五十年調べで一平方キロメートル当たり六四・七人である。これは同年山梨県の一七五・二人にくらべて、一一〇人、西八代郡の一三四・四人にくらべても六九人も少ない。山梨県五四町村中、三十七番目にランクされる低い人口密度である。人口密度が一〇〇人以下の町村は県下に二二町村あるが、下部町は其中で稀薄順位で十八番目である。しかし人口では二番目、面積では六番目に大きい町に位置している。

人口密度が低いということは、一見、一人当たりの土地利用効率が高いように思われるが、単に土地面積が大きいということ、そのこととは別問題である。土地が産業経済上どのように利用し得るかという土地の経済効率が最も大切な問題である。下部町のように山地が総面積の八〇パーセントを超え、しかもそれら山地は急峻な山岳である状況では、経済的に有効な土地利用は非常に小さく限定されてしまう。それどころか、道路の改修にしても多額の費用を要し、経済的には損失の要素が強くはたらく。

ちなみに一、九七五農業センサスによる下部町の経営耕地面積は四二、二七七アールで、この経営耕地面積当たりの人口密度を割り出してみると、

一平方キロメートル二、〇一三人となる。

これを下部町と同程度の人口規模である勝沼町と一宮町の場合でみると、勝沼町は九九四人、一宮町は一、〇〇七人であり、下部町の人口密度と比較すると二分の一である。

町内の分布状況をみると、昭和五十年調べで、下部町地区七三人、古閑地区二七人、久那土地区一三一人で、やはり地区により密集度に大きな差異がある。久那土地区は総面積が少なく、山地面積も比較的少ないこと、集落も、路村、街村の集村集落が多いこと。これに対して古閑地区は、面積の大部分が山地であること、集落もほとんどが孤村集落であることなどが原因である。

さらに久那土地区の三沢、下部地区の常葉、古閑地区の古閑など比較的平坦地で、かつ鉄道の駅周辺、また地区の中心的集落は人口集中度が高い。しかも過疎化の中で人口密度の減少はほとんど見られない。

次に人口密度の減少度合いをみると、本町の場合、昭和三十五年九一・九人であったものが、五十五年には六〇・三人と、三一・六人も減少している。この減少人口密度数は上九一色村の人口密度を上まわる数である。減少比率で見ると三四％の減である。

これを地区別にみると、下部地区三七人減（三七％の減）古閑地区一八人減（四〇％の減）久那土地区五二人減（二九％の減）となっており、やはり山地面積の比率の高い地域ほど、人口密度の減少率も高くなっている。

第四節 集落の移り変わり

一 下部地区

現在の下部地区一円は平安朝中期、既に八代郡川合郷の下部及び常葉組に属し、源義光の統轄するところであった。

その後、桃山時代に清沢、大炊平、岩欠、杉山、北川、市之瀬、常

葉、上野平、波高島、桃が窪、下部、湯之奥の十二か村に分かれ、そのまま江戸時代に続き、八代郡東河内領に属した。

明治七年、山梨県布達をもって県下小村群に対し、合併勧奨が行われ、これに応じて翌明治八年四月、前記十二か村が合併して「多くの村が集まり、富みたる里」という意味で「富里村」と称するようになった。

明治二十二年町村制施行のときに大河内村字大堡のうち川向部落を分割し、桃が窪に合併し、また昭和二十四年四月共和村字宮木のうち、大子部落を富里村へ境界変更した。そして昭和二十九年に至って、富里村を「下部町」と称するようになった。

昭和三十一年、町村合併促進法により、久那土村、古関村、共和村と対等合併し、新しい「下部町」として発足した。そして町内は旧村単位により下部地区、古関地区、久那土地区、共和地区となったが、昭和三十三年共和地区のうち、宮木、下田原が分町して中富町へ合併したために、上田原は久那土地区へ、一色は下部地区へ含めて呼称するようになった。

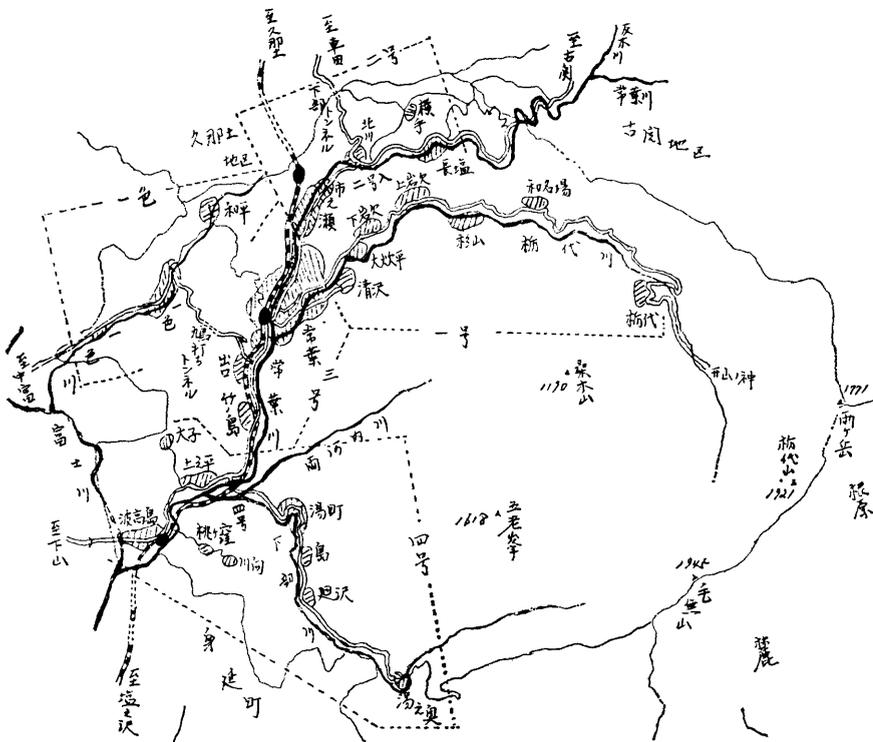
下部地区の現在戸数は一、〇七一戸、人口三、九二三人、下部町内三地区の内での最大の地区である。一戸当たり平均家族数は三・七人、人口密度は六四人である。

旧幕時代からの各村落は、常葉川流域、栃代川流域、下部川流域に点在し、常葉川と栃代川の合流点のはん濫原野に東河内領で最も大きい村落であった常葉村が存在した。

大正九年に富士から身延まで開通した富士身延鉄道はさらに延長され、昭和二年に身延―市川大門間が開通し、「下山波高島」「下部」「甲斐常葉」「久那土」各駅が営業を開始した。甲斐常葉駅の営業開始は、それまでに既に開通していた県道と相まってその近辺に新しい集落発生要因となった。常葉駅に至る県道沿いには急速に人家が集中し、新しい街村集落が生まれた。「仲之町」と呼ばれ、また昭和になってから生まれた集落という意味で「昭和組」とも称されている。

鉄道開通による人口の集中度は下部地区が最も高く、戸数増加率でみる

下部地区の集落分布



と、明治二十二年頃までは三地区とも旧幕時代とほとんど変わらないのに、昭和十年までの四十二年間に久那土、古関は一・一倍、富里は一・六倍となっている。

下部地区は地域面積が広く、集落も川筋に沿って広範に分布しているこ

とから、現在は便宜上、五つの部落集団にわけて呼ばれている。これは行政上の区画ではなく、生活習慣上の一応の区分けである。このような区分けは相当古くから行われていたらしく、また以前は行政区画的な意味合いももっていたようである。

富里青年団編「郷土史」（昭和四年発行）には「尚、理事者は村内執政上の通語に地形、並に隣接部落の連絡を考慮して方面を分ち、即ち、清沢、大炊平、岩欠、杉山の四区を第一号（栃代川流域の集落北川、市之瀬の二区を第二号（常葉川の流域の集落）常葉区を第三号（中心集落）上之平、波高島、下部、湯之奥の五区を第四号（下部川流域と常葉川流域の集落）と通称して執務の利便を計る」と記せられている。このような通称は現在でも使われ、現在はそれに一色川流域の集落、一色と和平を加えて五つの通称区分けで呼ばれている。

(一) 常葉（ときわ）

国鉄身延線甲斐常葉駅を中心とし、北は常葉川上流の市之瀬、南は下流の上之平、東は栃代川沿いの清沢、大炊平に隣接する。常葉川、栃代川の合流点のはん濫平野に集中する街村集落、酒屋、中島仲之町（昭和組）その西岸山麓に塊村集落をつくる日向、合流点下流の河岸段丘に点在する塊村集落、杉之木、出口、竹之島（通称岩下ともいわれる）栃代川流域に列村、塊村をつくる宮之平、芦原、山口、川窪（東）五条が丘に分布する、五条、石等、白代、境畑等の小字集落からなっている。

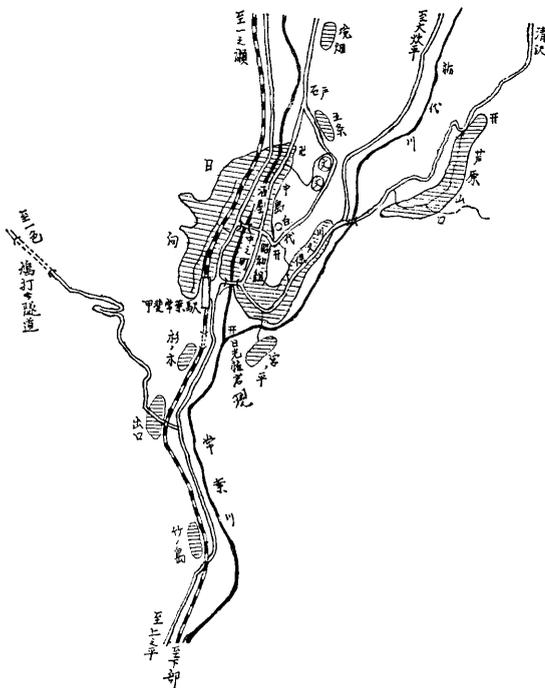
旧幕時代は一五〇戸、六四五人、村石高三七三石九斗五升九合で、一戸当たり平均石高は二石五斗であり、往時から近隣の村々に比べて裕福な村であった。甲斐国志にも「東河内の一犬邑なり」と記されている。その後戸口は増加をたどり、近代になって国鉄身延線が開通するや、戸口は爆発的に増加し、昭和三十五年には最高に達したが、その後は減少を示し、昭和四十一年には四二六戸、一、九六四人となり、昭和五十一年には四二五戸、一、七一九人、昭和五十五年には四一八戸、一、七一九人となって

いる。

このように過疎化現象を示してはいるが、他の集落と比較して特徴的なのは、人口減少率に対して戸数の減少率が低いことである。

昭和四十一年から五十五年までの十四年間で戸数は八戸減少しただけであるのに、人口は四七四人も減少している。年平均で見ると、戸数は一年平均〇・六戸の減少に対して人口は三三・八人も減っている。このような現象は久那土地地区の三沢の平坦部にも見られる現象で、街村集落をもつ地域の過疎現象の特徴である。そしてこのことは人口の年齢構成が非常に高齢化していることをも示している。高齢化現象は最近特に激しくなっており、四十一年から五十一年の一〇年間は戸数が年平均〇・一戸の減少に対し、人口は二四・五人であるのに、五十一年から五十五年の四年間には戸数年平均一・八戸の減少に対し人口のそれは五七・三人となっている。

常葉の集落分布



このような高齢化の傾向は若者の流出と同時に、一戸当たりの平均出産数の減少が相乘的にはたらいている結果である。

これを端的に表しているのが、小学校在籍児童数の減少である。(第七編第二章を参照してほしい。)

また各小集落の戸口の推移は次の通りである。

常葉の集落発生は古く、五条が丘からは先史時代の縄文・弥生土器類が多数出土している。

平安朝末期には既に常葉氏が居を構え、一帯を支配していた。五条が丘はその居跡であるといわれる。常葉の地名がこの豪族によるものなのか、集落発生時からつけられた地名なのかはわからない。

また、どのような理由によるものかはわからないが、寛永二(一六二五)年に城台を白代、関道を石等、御城平を五条平とそれぞれ改称されている。

地形的にみても豪族が館を構えるには格好の地であり御城、城台、関道などはそこから生まれた地名であろう。

往時、栃代川、常葉川の合流点はもつと常葉川の上流地点にあり、現在の日光権現は、今の宮之平と地続きであったということである。そうだとすると宮之平の地名もうなずける。

東(川久保)は地形的な由来によるものであり、またここを東というのも、常葉村の東端に位置するからであろう。

日向も、地形的に南面傾斜地の陽光のよく当たる土地につけられる通常の地名である。

芦原、杉之木などはその地の植相に由来するものであろうと思われる。

竹之島は、瀧ノ島であったという説もある。また、ここには篠竹(天名竹)が多く繁茂していたからという説もある。竹之島地内には、昔大出水で日光権現が流され、社殿は波高島まで流れて行ったが鳥居だけはここに止まったところから、鳥居島という地名のところもある。

杉之木地内の現在の身延線のトンネル附近は巨大な岩盤が川瀬につき出していため、道はその上を通っていたと言われ、そのため杉ノ木、出

下部小学校児童数(一〜六年)

年	代	学級数	児童数
大正	一五年	一三級	六四七人
昭和	一六年	一五	六九八
〃	一七	一六	七四八
〃	一八	二〇	七五五
〃	一九	二四	九一二
〃	二〇	二五	九三七
〃	二一	二五	八七六
〃	二二	三三	一〇四〇
〃	二三	二五	七六九
〃	二四	一九	五〇七
〃	二五	一二	三六八
〃	二六	一一	二八六

口、竹ノ島を総称して岩下とも称されている。

境畑、出口などは村境に位置する場所の意であろう。

酒屋中島、芦原山口については、酒屋と中島、芦原と山口、それぞれ分離していた地名が複合したものであるという説と、初めから複合的につけられた地名であるという説がある。

大正初年に県道が常葉川の川沿いに開通してから、常葉の中央部には他の集落や、他府県、市町村から転入して居を構える者が増え、これまで田園地帯であった所に新しく集落が発生してきた。典型的な街村集落の発生を見たわけである。この集落は仲之町と呼ばれたが、昭和の即位大礼挙行の際、これを好機に昭和組として組織し、村の行政区画の一つとした。現在の国鉄身延線である身延鉄道の甲斐常葉駅設置後はさらに発達して現在に至っている。久那土地区の「店向」と同じく、交通機関の発達に伴って発生し、発達した集落の好例である。

往時の要害の地、五条が丘には現在、下部小学校、中学校が置かれ、その下、白代には下部町役場、同開発センターが設置されている。また、馬

常業の人口の変遷

	文化3年		明治22年		昭和4年		昭和41年		昭和51年		昭和55年	
	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口
五 条・境 畑									30	115	30	120
酒 屋 中 島									21	64	20	51
昭 和 組									89	339	88	303
日 向									103	372	102	342
宮 ノ 平									26	92	26	84
東 (川久保)									64	246	63	240
芦 原・山 口									29	115	27	101
杉 ノ 木・出 口									36	128	34	125
竹 ノ 島									27	248	28	124
計	150	645	149	748	241	1,181	426	1,964	425	1,719	418	1,490
一戸平均家族数	4.3人		5.0人		4.9人		4.6人		4.0人		3.5人	

場五郎右衛門が自ら、滅ぼした常業四郎左エ門信泰の菩提を弔うために開基したといわれる常業山東前院や常業の氏神である諏訪神社も白代にある。さらに降って仲之町通りにはさまざまな商店が軒を連ね、昭和三十年代までは旅館もあって名実ともに下部地区の中心部となっている。

中島には、馬場丹後守の墳寺である金竜山常幸院がある。

常業地内には過疎対策の一環として町が誘致した企業二社が操業している。一つは昭和四十四年三月に操業を開始した山梨帝通株式会社で従業員五十三人でテープレコーダーのアンブを生産している。もう一つは下部電子株式会社で、昭和四十七年七月操業を始め、現在は従業員六〇人でテレビ、ステレオのスイッチ等、電気器具の部品を生産している。いずれも過疎の進む中で地元の雇用拡大に大きく役立っている。

常業には佐野の姓が多く、次いで小林、渡辺、望月、馬場が多い。さらに依田、小松、堀内、赤池、太田、切金、遠藤、松井、曾谷等が多くみられる。このほか、数多くの姓がある。

馬場、切金は「日向」や「五条」に多く、「芦原山口」には佐野、渡辺、小松、「宮之平」には依田「杉之木」には佐野「竹之島」には佐野、太田、曾谷「出口」には堀内、佐野が多く、松井の姓は「川久保」というふうに「仲之町」以外の小字集落には特徴的に特定の姓が多くみられ、中には同族集団の傾向の強いかたまりもある。

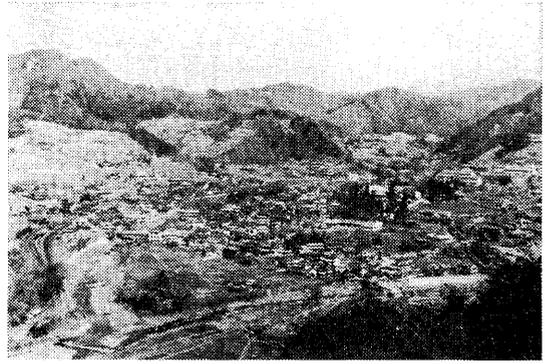
土地台帳による地名

山口山、芦原、山口、島之前、浜井場、滝下、常葉藪、宮ノ平、宮ノ原、杉ノ木向、原ノ下、大炊平、峠下、水所、出口、出口中瀬、出口入、南原、大子山、高松、竹ノ島、竹ノ島中瀬、竹ノ島下、八斗畑、大黒沢、鳥居島、屋形沢、杉ノ木、杉ノ木山、檜平、林際、田尾入、日光、堀田、奥田、東、白代、東畑、前田、御屋敷、五条、五条下、五条道上、五条山、石等(石戸)、石等山(石戸山)、柳久保、境畑、林、上ノ山、柳沢、北原、古屋敷、源太屋敷、源太屋敷入、大久保、南沢、大日向、桑木山、

(二) 市之瀬

常葉川に沿い、常葉の部落に隣接する集落が市之瀬（旧市之瀬村）である。常葉川はここをやや広い段丘平地を作っている。いわゆる市之瀬平である。国鉄身延線の市之瀬停留所が集落の北西、勝坂峠の登り口にある。集落は「日向」と「日影」にわかれているが、現在は国道三〇〇号線沿いに集中しはじめている。

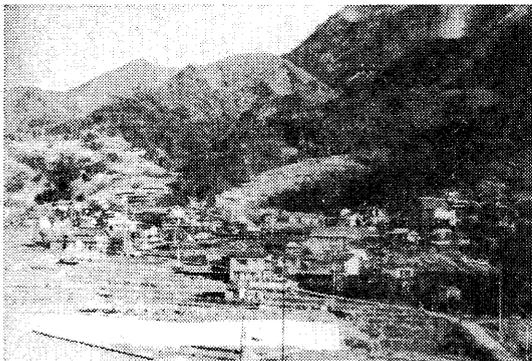
勝坂峠ふもとの三叉路は、市川から三沢を通ってきた道が、川沿いに下部へ下る道と、川を渡り山尾根伝いに杉山へ出る道とに分かれている古道の分岐点で、ここに道祖神があり、石の指導標には「右下部、左杉山路」と刻まれている。市川大門、鰐沢への関門の第一の木戸の地であったことから「一ノ関」が市之瀬となったものだとの説がある。また、古関から深谷を流れてきた常葉川が北川を過ぎて、急に川瀬も広くなり、里中



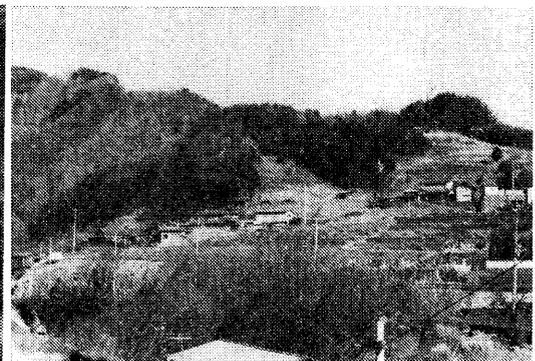
常葉昭和組・川久保・常葉日向



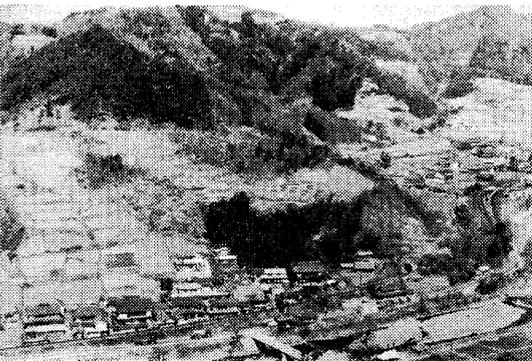
常葉 酒屋中島



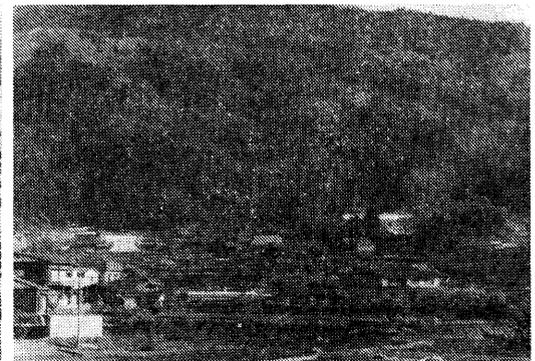
常葉 芦原山口



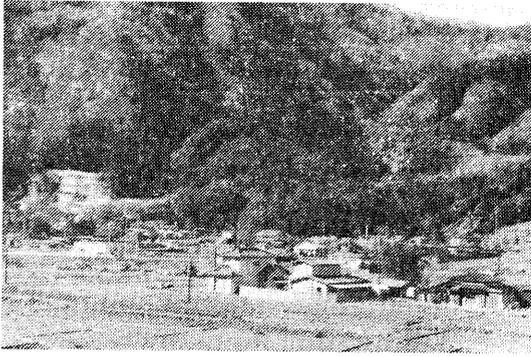
常葉 五条丘



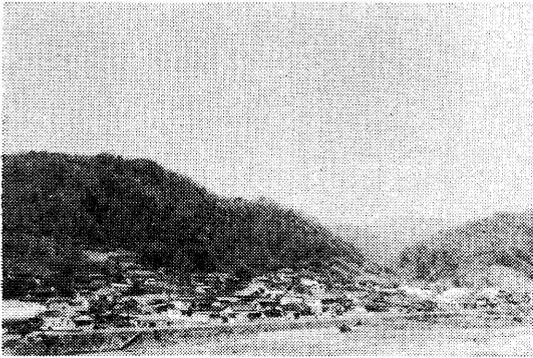
常葉 杉之木



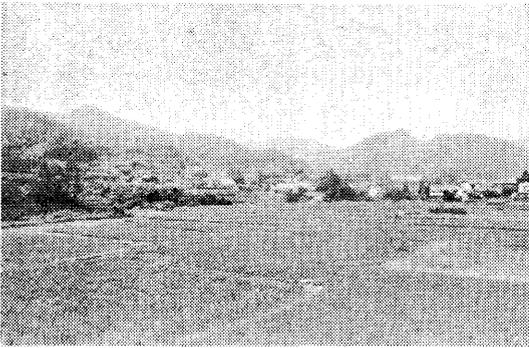
常葉 宮之平



常葉 出口



常葉 竹之島



市之瀬平と市之瀬の集落

はなにかと思われが、余りにも近接している地にいた両氏の間、どのような確執があったのかはわからない。永禄八（一五六五）年に馬場五郎右エ門が常葉次郎光季十代の孫、常葉四郎左エ門信泰の首を討ち、常葉氏を滅ぼしてしまい、後、天正十八（一五九〇）年にその菩提を弔うために、常葉の城台に東前院を開創したと伝えられるが、馬場丹後守忠次の子孫と、この五郎右エ門との関連はわからない。

また甲斐国志には、常葉の常幸院は馬場丹後守の墳寺なりと記せられ

に入るところから一之瀬となったとする説もある。

常葉川をはさんで、右岸が日向、左岸が日影である。

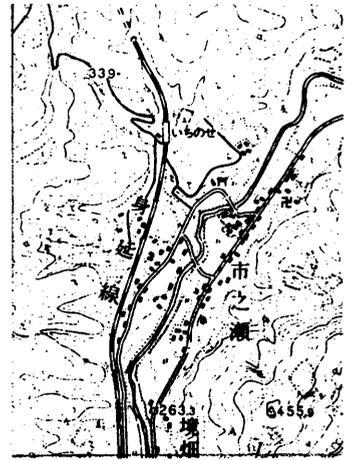
現在戸数は八二戸、人口三二六人、旧幕時代は五三戸、二一八人、石高八七石二斗七升四合であり、常葉村ほどとはいかないまでも、裕福な村であったといえよう。

昭和四十年、七四戸、三七三人。五十年八〇戸、三三七人であるので高齢化はいなめないまでも過疎化が進んでいる下部町の中で唯一の増加傾向にある集落である。集落の中を通る国道が拡張整備され、現在は常葉のバイパス工事のトンネル掘削が行われている。国道沿い常葉の境畑には県営住宅も誘致されて入居が始まっており平垣地、道路、日照など、住居地としての立地の好条件から、この増加傾向は今後も続くものと思われる。

日影の部落には日蓮宗で名高い法光山妙円寺がある。この寺は、建治元（一二七六）年の開山で大坊坂にあった真言宗の寺であったが、この地の

豪族馬場丹後守忠次がその居宅を提供してこの地に移し、九老僧の一人、日行上人によって日蓮宗として開山したものだといわれる。

常葉に常葉氏がいたように、市之瀬には馬場氏がいて支配していたので



市之瀬部落

ている。

馬場氏の系譜も定かではなく、寺院・宗派の錯綜した関係も明確ではない。両氏の間関係もわからないことが多い。妙円寺が馬場氏の居宅跡であるならば現在でも馬場姓を名乗る者がいてもよさそうであるが、市之瀬には馬場姓はなく、常葉の日向と五条に馬場姓が集中している事実はどう解したらよいのであろうか。

いずれにしても、平安朝時代にすでに村落が形成され、しかもこれを支配する土着の小豪族がいたことは確かであろう。

現在の姓は小林が多く、次いで桜田であり、この二姓以外には矢野、伊藤、山本、山宮の姓がわずかにあるだけである。

昔は農業集落であったが、現在は専業農家は一戸で、他は四八戸が第二種兼業農家であり、ほとんどが勤め人、職人、自営業である。特徴的な自営業として石材業がある。

昭和五十四年、日向地内、北川寄りに町民スポーツ広場と体育施設の設置が決まり、現在工事が行われている。完成の暁には下部町社会体育の中心地としてにぎわうことであろう。

土地台帳による地名

中村、市之瀬、中達、下袋、上袋、堡、日向中村、宮林、大坊坂、三つ沢、大平、峠、居森沢

(三) 北川

市之瀬の北の端、市之瀬平のつきる所で、常葉川は両岸から山が迫ってけい谷の様相を呈する。

その入り口で、国道三〇〇号線は橋を渡って常葉川の右岸に移る。この橋のたもとで久那土地区からくる西八代縦貫道路が国道に接続している。

この接続点の北側に塊村集落をつくっている部落が北川である。この地点からさらに上流に約一キロけい谷沿いの道を進むと、道路右側の河岸段丘上、及び常葉川左岸の山ふところに長塩の集落がある。



北川の部落

さらに北川部落のはずれと長塩部落のはずれから、それぞれ左方、丸山に登る道を約八〇〇メートル、標高差二〇〇メートルから二七〇メートルを登ると丸畑のうち、横手、笠、南沢(なみさわ)の疎村集落がある。これら、北川、長塩、丸畑の一部を総称して北川区という。(旧北川村)

現在戸数は九七戸、四〇〇人である。文化年間から現在までの戸口の推移をみると次表の通りである。

文化	三年	一〇四戸	四七一人	一戸当四・五人
明治	七年	一一五戸	五三六人	四・六人

明治二十二年一一二戸 五八六八 五・二人
 昭和 四年 一〇九戸 五五〇人 五・〇人
 昭和四十年 一〇四戸 五五八人 五・三人
 昭和五十年 九七戸 四二七人 四・四人
 昭和五十五年 九七戸 四〇〇人 四・一人
 昭和四十年以降の一〇年間に減少の率が大きくなっている。これを昭和に入ってから各小字部落ごとの推移でみると、

川	昭和 四年	二四戸	一〇一人	平均四・二人
	昭和五十年	二〇戸	一二六人	六・三人
北	昭和五十五年	二〇戸	八六人	四・三人
	減少率	八三%	八五%	
塩	昭和 四年	五一戸	二六三人	平均五・四人
	昭和五十年	四九戸	二二五人	三・五人
長	昭和五十五年	四七戸	二二二人	三・六人
	減少率	九二%	八一%	
畑	昭和 四年	三四戸	一八六八	平均五・四人
	昭和五十年	二八戸	一〇〇人	三・五人
丸	昭和五十五年	二八戸	一〇二人	三・六人
	減少率	八二%	五四%	

(減少率は昭和四年に対する五十五年の百分比)

このように、北川区全体として減少傾向をたどっているが、丸畑が特にその傾向が強い。

北川区のうち、北川の部落は市之瀬に隣接し、県道と国道との合流点付近に位置する塊村集落であって、小字には細分されない単一集落である。川の北側にあるところから、北川と呼ばれたものであろう。昔からの農業集落ではあるが、耕地面積は少なく土地の生産性も低い。旧幕時代の村

石高も七九石三斗九升という低さである。

近年でも、農業センサスでみる農家一戸当たり平均耕地面積は三二アールで、いわゆる三反百姓である。このような土地生産性の低さから、出かせぎや職人が多く、また家内手工業生産としてむしろの生産が古くから行われていた。明治二十二年の町村制施行当時の報告書によれば当時、富里村としてのむしろの生産は年産一万枚、単価五銭、生産額五百円であったが、その生産の大部分が北川であったということである。現在はその生産も、もう行われていない。

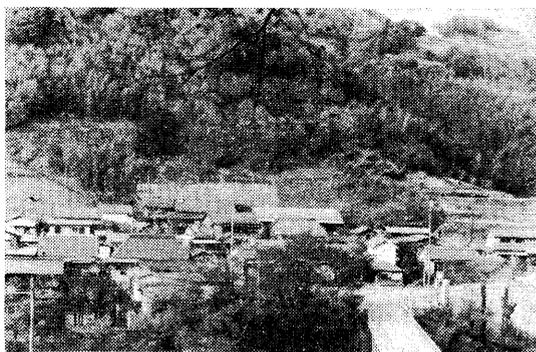
北川の部落は門西一軒の外全部小林姓である。

長塩は、その中が大曾里(大草里) 向川、紙屋、鍛冶屋の四つの小字に分かれる。やはり耕地面積は少なく、古くから本栖のすず竹を原料とした箕の生産が多く行われていた。箕は昔から農業生産には欠かせない重要な道具である。丸畑と共同で「長畑副業組合」を作り箕を生産し、それをもって広く各地を行商して歩く手工業生産が、長塩の重要な産業であった。

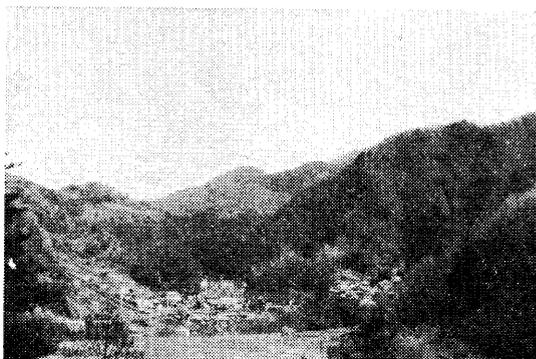
すず竹は日本各地の山地に広く分布しているいね科の植物である。いね科とはいっても細く、まっすぐな竹で、高さ一〜三メートル、直径五〜八ミリメートル程度の細竹で、節が隆起していないところから、竹細工の原料として広く用いられている。富士山二合目あたりから、山ろく一帯に広く自生しているので、古くからこれを利用して細工物をつくり、生計をたっていた集落が富士山をとりまくように存在していたということである。

鳴沢の「ざる」御殿場の「こうり」(行李) 山北の「箕」などその例である。丸畑、長塩の「箕」、北川の「蕨」は、下部地区の特産物といつてよいであろう。今は次第に生産されなくなり、その製法も伝わらなくなることが心配される。長塩では箕の生産以外にも紙屋、鍛冶屋の小字地名からも家内工業生産が古くから行われていたことがうかがわれる。

大曾里の小字名から焼畑農業が行われていたこともうかがうことができ。曾里はもともと「草里」(そうり)で、この地名は山梨県全域に分布するがそのうち七〇%、約一〇〇例が富士川、峡谷地域の東西河内領に集中



北川の部落



長塩の部落

している。これからみても河内領の貧困さがわかる。『甲斐国志』でもこの草里を説明して次のように記している。

「東西河内領ニ 苧生畑（かりゅうはた）ト云ウ事多シ、字義ハ苧立ニ作り、マタ草里畑トモ云イ、曾利、沢里、草履トモ書ク、他ニモ称セリ、山側草芥ノ地ヲ刈払イテ焼キテ土塊ヲ引キオコシ、キビ、アワ、ヒエ、アサ、ソバノ類ヲ蒔キチラス、培養スルニ及バズ」

現在にはほとんどが勤め人で、第二種兼業として農業が行われている程度であるが、特徴的なことは十余戸の農家が、サカタ種苗との契約栽培によって草花の種子生産を行っていることである。南面傾斜地にビニールトンネルを設置してパンジー、キンセンカ等の採種が行われているが作業主体は婦人層である。

大曾利には北条姓が多く、向川は磯野、串松、有田、紙屋には小林、鍛冶屋は磯野、赤池の姓が多い。

長塩の地名は、山中に鉱泉が湧出するところからつけられたものである。下部（塩部 塩ノ沢等この例である）。

長塩には明治時代から、現下部小学校（旧富里尋常高等小学校）の分校がおかれていたところである。

町指定文化財としては、無形文化財の獅子舞い及び山神社境内社叢がある。なお、長塩から岩欠へ峠ごえの古道があった。

（四）清沢（きよざわ）

常葉の川久保から栃代川をわたり、芦原山口の部落をすぎて、川久保から約五六〇メートル川沿いに上り、細尾沢を渡ると清沢の部落へ入る。

南側に細尾沢、北側に栃代川最大の支流である北の沢があり、この二沢の間の傾斜地に形成された集落が旧幕時代の清沢村である。

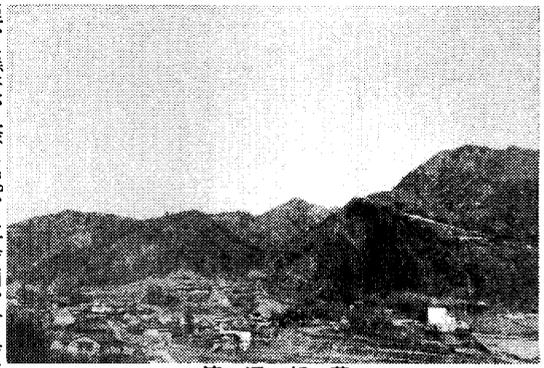
地名の起こりは、北の沢、細尾沢の流れにちなんでつけられたものであろう。

旧幕時代は戸数二四戸、人口九三人、村石高五三石七升四合で、一戸当たりの平均石高は二・二石であり、こじんまりした裕福な村であった。

現在戸数は、昭和四十年、二九戸、一六六人。昭和五十一年、三一戸、一一六人。昭和五十五年、二九戸、九七人と大きな変動もなく推移している。

小字は菅窪、下村、細尾の三つにわかれ、村の中ほどに氏神熊野権現を祀り、下村に清沢寺、細尾に法（宝）光寺がある。いずれも曹洞宗であるが清沢寺は下山竜雲寺の末寺、宝光寺は常葉常幸院の末寺である。

江戸時代、市川、西島地方の和紙は、幕府の御用紙となり、岩間の庄には東河内で生産されたみつまたや和紙の集荷場も設置され、ここをとりしきる運上役人も配属されるようになった。東河内の村々でみつまたの生産や和紙のすきあげに適した地域では盛んにその生産が行われた。清沢村は、背には深い山、周囲には清流と、立地条件は最適であり、当時は村をあげてみつまた生産に励んでいたということである。しかし、今はその形跡もない。



清 沢 部 落

近年は養蚕を主とする農業集落で
一戸当たりの耕作反別は他の集落に
対して比較的高く農業収益も高かつ
た。しかし昭和四十年、二九戸中、
専業農家三戸、第一種兼業農家一六
戸、第二種兼業農家六戸であつた
が、現在はほとんどが第二種兼業と
なり、勤め人が多くなつてゐる。
清沢には小林姓が多く、次いで竹
内、竹ノ内、磯野が多い、他には
渡辺、依田がある。

土地台帳による地名

石小屋、山之長場、船久保、南草
里、黒麦、奈良尾、上冷田、下冷田、寺ノ下、家ノ下、前田、宮ノ前、入
ノ沢、管之久保、久保畑、間登、休場、桃ヶ久保、丸作、小屋之平、細
尾羽、細尾、上日向、中日向、下日向

(五) 大炊平 (おいだら)

川久保から芦原山口への橋を渡らずにそのまま栃代川沿いに上ること九
五〇メートル、道と栃代川との間の平地に塊村形態をとる集落がある。大
炊平 (旧大炊平村) である。

現在戸数は二六戸、一一九人の小集落である。文化年間 (一六〇年前) は
二二戸、九三人。昭和四〇年代は二八戸、一五八人。昭和五十年は二七戸、
一三五人。そして五十五年二六戸、一一九人と、人口はかなりの減少をみ
せているものの、戸数は大きな変動がなく推移している。やはり高齢化の
進んでいる部落である。

大炊平の地名については定かではないが、甲斐国志、村里の部には「西

南ハ清沢村ノ界ナリ、大炊ノ言ハ負ナリ、方言ニ山ノ中腹、岩傍ナドニ正
路ナク小径アルヲオヒト名ヅク。山ヲ負フ如クニシテ蟹行 (カイコウ) ス
ルナリ、大ナル平原ト云フ事ニ非ズ、左右狭キ山谿ノ村ナリ」と記されて
おり、山を負う山腹にわずかに開けた平地の意であるとしている。

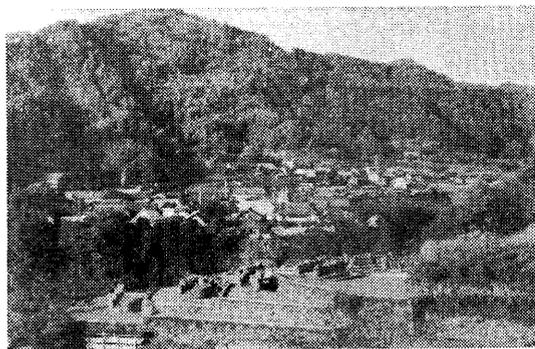
一説には大炊平の石小山の上に勝負平という所があるが、ここは馬場五
郎左エ門と望月四郎左エ門が勝負を決して、四郎左エ門が討ち取られた所
であるという。そしてここにはその後、丹後守のノロシ台が設けられ、大
炊平はその控地であつたところからつけられた地名であり、炊は炊飯の炊
であるという説もある。

さらに大炊平地内には、村の真下に幾筋もの深い洞穴があるが、自然の
ものか人為的なものはわからない。五条平にもやはりいくつかの洞穴跡
があり、大炊平と五条平とは洞穴による地下道でつながつてゐるという説
もある。そして大炊平は御城にあつた常葉城の控地であり兵糧貯蔵地であ
つたところからつけられた地名であるという説もある。

しかし、後の二説は、五条と大炊平との距離からみても、地形的に考え
ても、当時の土木技術からみてもは無理があり、また往時の街道が市之瀬か
ら杉山、長塩から岩欠へ尾根づたいに通つてゐたこと、また近郊の集落規
模や、当時の支配豪族の権力規模からみても、常葉城そのものが規模的に
そのようなことに匹敵するものであつたかどうかということなど考えても
軍略的な意味はうすく、真義性に乏しい。

昔からの農業集落で、山峽の村とはいえ、江戸時代の村石高は四二石九
斗で、一戸当たり平均石高二石であり山峽の村としては高い方である。

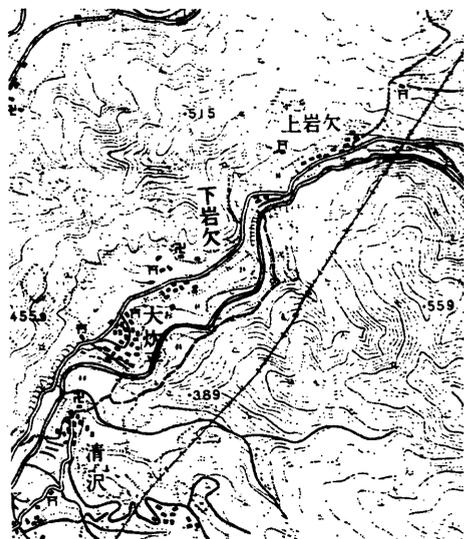
一、九五八年農業センサスでは部落の戸数二九戸中農家は二五戸、その
うち専業農家三戸、第一種兼業農家一六戸、第二種兼業農家七戸となつてい
る。現在では他の部落と同じく農業経営者は少く、ほとんど勤め人である。
大正中期頃まで、近隣の村々もそうであつたが特に大炊平には飲む、打
つ、買うの悪風があり、田畑を売つて酒代にかえ、家庭生活を破壊する者
が多かつた。この風潮を憂えて当時の青年層の有志、十余人が血判をもつ



大炊平部落

て禁酒誓状を作り、禁酒団を結成した。昭和五年に「禁酒興國」と刻した高さ三メートル余の石の塔を村の入口に建立し、内外に公示し、自律的にも他律的にも誓いの実践を約して今日に至っている。今日でも部落内においてはこの誓いは守られているということである。

部落の氏神は八王子権現で「上の宮」といい「下の宮」は曾我神社といつてこの二か所に祀られており、祭りには上の宮から下の宮へ、また下の宮から上の宮へそれぞれ神輿が交流するならわしがある。集落形成や、歴史的過程に何等かの関係があるのかも知れない。



大炊平地図

大炊平には昔から「伊藤」と「渡辺」以外の姓の者は住まなかったといわれるが、現在もほとんどがこの姓であり、他の姓の者もこの姓の同族である。

土地台帳による地名

せらぶ、山之神、以之山、高草里、上之山、馬込、日向、向、家之下、宮ノ前、中畑、立道、五条、上之畑、島、かいまがり

(六) 岩欠(いわかけ)

大炊平からさらに栃代川を右に見ながら登ること二〇〇メートル。下岩欠の部落に出る。それを過ぎてさらに約八〇〇メートル登ると上岩欠に出る。上岩欠、下岩欠の両部落が旧岩欠村で、岩欠の地名は地形上からつけられたものであろう。

『甲斐国志』村里の部には「大炊平村ノ東北十五町ニ在リ、岩石多ク欠崩シテ懸崖トナレリ、村名ノ起ル所ナリ、村中多ク掛樋ヲ造リテ耕水ヲ引ク」とある。

現在は部落を上と下に分けて総称しているが、上岩欠から、約二〇〇メ



禁酒の碑

トトル下った所に四戸からなる小部落「所沢」がある。他にも中村、坂下、遠屋敷（東屋敷）などと呼んでいる場所や地名もある。甲斐国志には小字名として所沢、中屋、東村、三國と四つの字が記されている。

郷土史研究家、岩倉正行氏によれば、村は往古比較的山際に生活の場を求めて小さな部落が点在していたという。しかし、天保年間に天変地異が激しく襲い、地滑り等が休みなく続き、変形した地形や、生活上の不便さから今の村の姿に変わったものだというのである。

現在の道路は昭和十年代ごろまでは栃代や杉山からの木材搬出用のトロ軌道で、往古は長塩から地蔵峠を越えて上岩欠へ出る峠道が往還であった。この古道はさらに部落の中を通って栃代川に下り、川を渡って川沿いに清沢へ出、山口を通って常葉へ通じていた。現在の村のはるか上方に杵地藏、またはきげん蔵と呼ばれる地藏がある。ここが長塩からきて、岩欠を通って常葉へ出る道と、杉山へ行く道、また和名場、栃代方面への道の基点でもあったという。

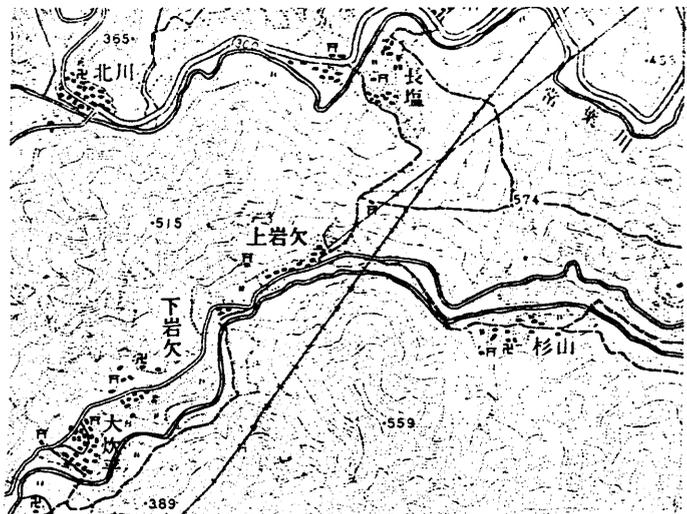
この杵地藏は高さ約八〇センチ、直径約二〇センチの円柱状の石像であるが、山梨県誌取調べ書（大正五年）には、この石像にまつわる伝説として次のようなことが書かれている。

「市瀬区ヨリ杉山区ニ越エル山坂ヲ地蔵坂下ト称シ其絶頂ニ杵地藏ナル石像ヲ祀ル、里人、判断ニ苦シム事アレバ、彼ノ石像ヲ拳ゲ、願意カナヘバ軽ク挙リ、カナハザレバ重シト、以ツテ吉凶ヲ占フニ中ラザルナシト言フ、此ノ陽石、三ツニ折レテ日本国土三ヶ所ニ在リ、其ノ一ヶ所ハ此所ナリト伝フ（他ノ二ヶ所ハ不明）」

このように道祖神が現在の村からはなれており、また氏神も部落からはなれていることから、集落の移動が行われ、形成時の集落と現在の集落とは位置も様相も異にしていることがうかがわれる。

長塩と岩欠との中間にある浅間神社は、現在でも長塩と岩欠が当番でその祭りを担当しているとのことであり、往時この両部落が往還を通して互いに密接な関係があり、交流が多かったと思われる。

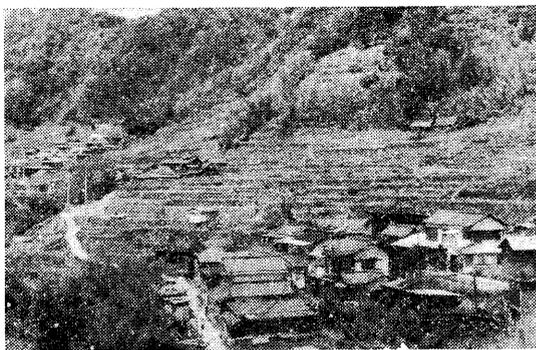
第二章 下部町の集落



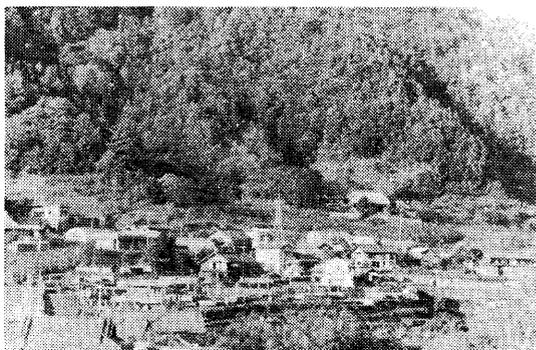
岩欠地図

現在の岩欠の戸数は所沢を含めて上岩欠が二三戸、下岩欠が一八戸、計四一戸、人口は一四〇人である。旧幕時代は三三戸、一二六人、村石高五五石七升五合であった。その後、昭和四年、三九戸、二四八人。昭和四十年、四〇戸、二〇三人。昭和五十年、四〇戸、一五二人と推移しており、戸数変動は少ないが、人口はやはり減少している。

岩欠は昔から養蚕を中心とした山村農業集落であったが、現在はほとんどが勤め人か職人である。岩欠には渡辺の姓が最も多く、上岩欠は渡辺、磯野、下岩欠は渡辺、赤池が多い。他には岩倉、村松の姓もある。



岩欠の集落（上岩欠）



岩欠の集落（下岩欠）

土地台帳による地名

押鼻、江路、新屋、佐口、仲屋、西河原、所沢、沢向、仲村、半之木、仲道、岩下、釜土、大半目、洗、作沢、見端、東屋敷、松ヶ畑、峠

(七) 杉山

上岩欠から約五〇〇メートル登ると、右側に川へ向かって下る道が分岐している。この道を栃代川に下り、川を渡って対岸にある集落が杉山である。

分岐点からさらに栃代川を右下に見ながら山腹をぬって登ること約一・五キロメートルで和名場部落への分岐点に至る。和名場はこの分岐点を約四〇〇メートル、標高差一〇〇メートルの急坂を登った山頂にある。和名場への分岐点を通り過ぎてさらに三キロメートル入ると、道は栃代川を渡る。橋を渡り、川へせり出した尾根の突端を回り込むこと一キロメートル

で、下部地区で最高標高六七〇メートル、役場から最も離れた集落、栃代の部落がある。

杉山、和名場、栃代、この三つの集落が旧杉山村、現在の杉山区である。

杉山の地名は定かではないが、この村が昔から薪炭の生産を主とした林産業の集落であり、昔、神代杉の巨木が繁茂し、近辺に杉の良林が多くあったところからの村名であろうといわれている。

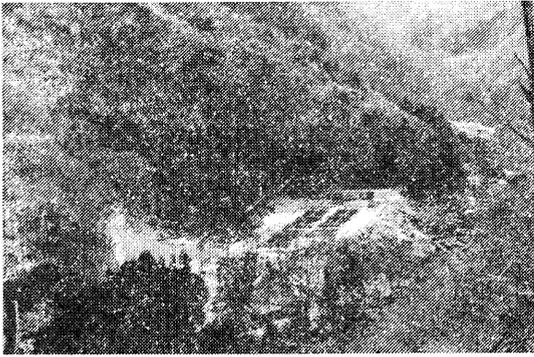
和名場には、今はこん跡しか残っていないが、昔は雨乞い淵ともいわれた小池があり、徳川時代にはもっと広い池であったという。ここに水鳥やけものが多く集まってくるので御猟場として罾をかけてこれを捕獲したところから罾場と呼んだのが地名の起こりだとされている。御猟場であったということは地形的にも規模的にも無理であるが、山村集落民の重要な罾場であったろうことは十分うなずける。和名場は外に和奈場とも書くし、『甲斐国志』は和那場と書いている。

栃代は栃（トチ）の木が多くあったところからつけられた地名であるという説と、周囲連山に守られあたたかも城壁の様を呈し、かつ小規模ながら産金産銅の鉱山があったところから戸城であったとする説とがある。

現在戸数は、杉山八戸、和名場一八戸、栃代一一戸、計三七戸、一一二人である。

徳川時代は杉山六戸、和名場一八戸、栃代一三戸、計三七戸、一六八人、昭和初期は杉山区全体で三六戸、二四八人であった。山間へき村のため、耕やす耕地も少なく民家も増えようもなかったであろう。戸数は江戸時代からほとんど変化がない。昭和三十年代から四十年にかけて、四九戸、二二五人となるが、五十年には再び三六戸、一三三人となっている。この変動の大部分は和名場部落である。

昔からの林主農従の村であり、昭和十年代までは栃代から常葉駅までトロ軌道が敷かれ、木材の搬出が盛んに行われた。現在常葉駅構内の駐車場となっている場所は当時搬出した木材の積出し場であり、現在川久保から



ヤマメの里振興センター

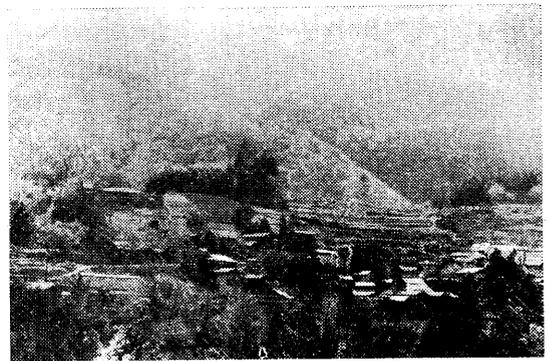
栃代へ至る道路は木材搬出用のトロ軌道であった。そのような産業状況から昔は柚（そま）木挽（こびき）などの伐採職人が多く、地元ばかりではなく遠く東北や和歌山、高知の林地地からも出かせぎで入居し、ここにおちついて永住するようになった人も幾人もいるとのことである。

和名場への入り口から少し上流の地点、栃代川のほとりにはアルカリ性ナトリウムマグネシウム泉である神奈温泉がある。温泉とはいっても泉度は一八度であるが、この温泉は昭和十年冬、そこだけ雪がとけ、餌に飢えた野鳥やサルが集まっているのを小林正三の先代が発見し、昭和十四年神奈温泉として開場したものである。

栃代部落への入り口、橋から百メートルの上流に下部町営「ヤマメの里振興センター」がある。

この施設は、下部町が山村振興計画の一環として、総工費九千九百万円をかけて昭和五十三年度に着工し、五十五年完成オープンしたものである。目的は栃代川流域の自然を活用し、ヤマメの養殖を行い、成魚を場内の釣り場で釣らせるほか、町内各河川への放流、併せて町の特産物として町内各旅館、民宿への供給を行い、農産物の農家直売方式を採用して山間地農業を観光地農業に移行させ、山村農業の振興を図ろうとするものである。施設は採卵からふ化、養殖までの一貫した養殖施設と、一般への保健休養の場を提供する人工河川の釣り場、宿泊施設や、キャンプ場などがある。

栃代部落はここから約一キロ、栃代山の山中に分け入った山ふところにある塊村状孤村集落である。ここ



栃代部落

えているにすぎない。

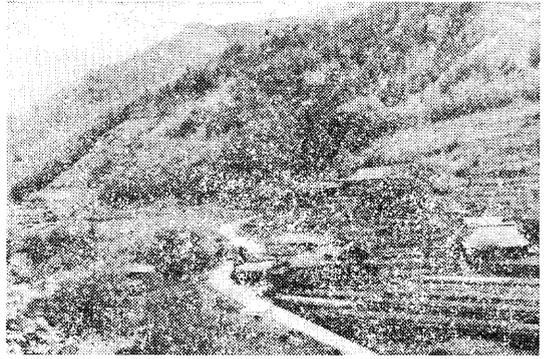
この八戸はすべて小林姓であり、同族集団の色合いが濃い。大杉山有明寺は日蓮正宗大石寺九代目日有上人の隠居寺として文安年間（一四四四～一四四九）に創建されたものである。今も上人が辿って来た細道を「お上人道」という。境内のイチョウの大木は上人が地にさした杖が根づいたものといわれ、杖が乳ぶさのようにたれさがっていることから「乳ノ木様」と呼ばれている。

杉山は八戸がすべて小林姓であるが、和名場もまた一八戸のうち一七戸が小林姓である。和名場は山頂に位置する孤村集落で、杉山村の中では一番大きい集落であった。そしてまた一番戸口変動の大きい集落であり、現在過疎率が最も高い集落である。

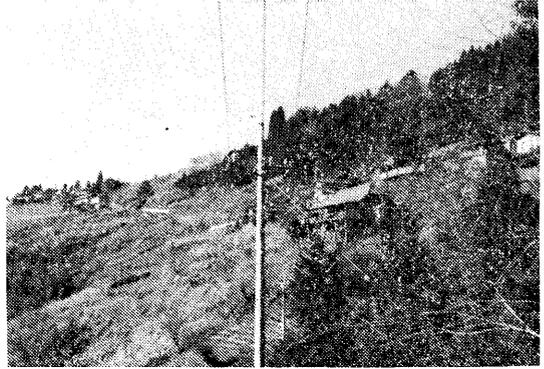
これといった農産物もなく、現在は養蚕を主とする農業の外職人、勤め人ばかりである。

には若宮八幡宮がある。この神社の神宝五人張りの弓には源為朝の名が刻してあるとのことである。また、天正のころ（一五七三～一五九二）の作とみられる鰐口もある。今から四〇七年も前にこのような山中にすでに集落が形成されていたとは驚くばかりである。栃代部落には小林、赤池、柴原、芝原、渡辺の姓がある。

杉山部落は、栃代川の左岸に開けた集落で、杉山区三集落の中で最も下流かつ河岸段丘上にある唯一の集落である。しかし、その立地条件にもかかわらずなぜか戸数は最も少なく現在で八戸、徳川時代から二戸増



杉山の部落



和名場の部落

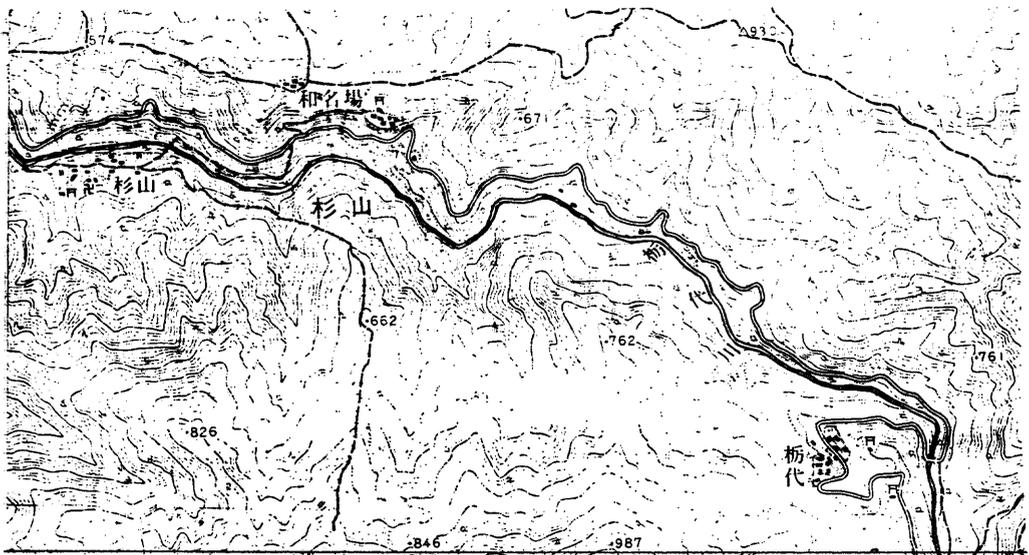
和名場への分岐点を少し通りすぎた左手山際に杉山区の分枝がある。

土地台帳による地名

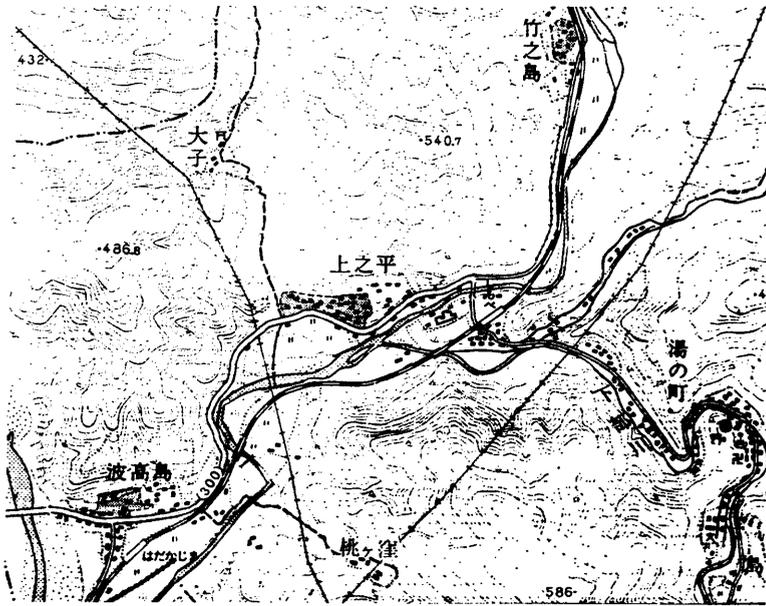
和名場、家之下、原、船久保、佐藤内、向島、森、管久保、東原、寺ノ前、大小屋、高草里、辰加尾、万久、郷良沢、萩原、広根、長屋、加籠作、西沢、栃代、羽前場、開平

(ハ) 上之平

常葉区の竹之島から常葉川に沿って約一・五キロメートル下った所で常葉川は川幅が広くなり、やや開けた河岸段丘の平地をつくっている。この平地の山際に塊村形態をとっている集落が上之平部落である。「地名の研究」によれば「上野」はハナワ、またはウワノから出る。



杉山区地図



上之平地区図

川底の低下によってできた両側の高い平地をいう」とある。地形学上河岸段丘地形に「上野」「上野原」などの地名が多くみられる。山梨県でも大規模なものでは、桂川段丘の第二段丘上に発達した北都留郡の上野原、櫛形町市之瀬台地の上の平、中規模のものでは三珠町の上野などの例があり、河川流域に発達した集落には多く見られる地名である。

ここ下部町の上之平も、これらと同じく地形上からつけられた地名であ

ろう。

現在の戸口は六五戸、二二六人である。江戸時代には波高島、桃ヶ窪などとともに帯金組十三か村に属し、五四戸、二四一人、村高九〇石一斗七合で一戸平均一・六石であった。

文化年間から現在までの戸口の推移は次の表の通りである。

この表でも見られるように文化年間から明治初期まで、他の集落においては戸口が漸増しているのだが、何故か上之平は、二割以上も減少している。その後再び同じ戸数にもどるのに八十三年も要している。

この現象の原因は何によるものであるかはわからないが、隣りの波高島が急激な増大をみせているのとは対照的である。いずれにしても、山間の閉鎖的な孤村落とは異なって街道筋の集落に見られる生活様式や、生活基盤となる産業構造の変化の激しさを反映したものであろう。

昔から米作を中心とした農業集落であるが、耕地面積はそれ程広くないため、専業農家は少なく、現在は勤め人が多い。農業は自家消費型の兼業農家が多い。

上之平には佐野姓が最も多く、遠藤の姓がこれに続く。

部落の真向かい、常葉川の対岸には下部温泉と同質の鉱泉が湧出しており、湯沢の湯として近隣のものに親しまれている。

なお、部落の上方、醍醐山の中腹に今は三戸であるが、小さい孤村落「大子」がある。大子は共和村の一集落であったが、昭和二十四年四月共和村から分離して富里村へ編入した部落で、姓はすべて遠藤であり、同族集団の色あいが濃い。

年	代	戸数	人口	一戸当	経過年数
文化三	(二八〇六)	五四戸	二四一人	四・四人	六六年間
明治五	(二八七二)	四二	一七五	四・一	

大正	十(一九二二)	四六	二五〇	五・四	四九年間
昭和	四(一九二九)	四八	二二八	四・七	八年間
〃	三十一(一九五五)	五五	二五三	四・六	二六年間
〃	四十一(一九六六)	六四	二八四	四・四	一一年間
〃	五十一(一九七六)	七〇	二四八	三・五	一〇年間
〃	五十五(一九八〇)	六五	二二六	三・四	四年間

土地台帳による地名

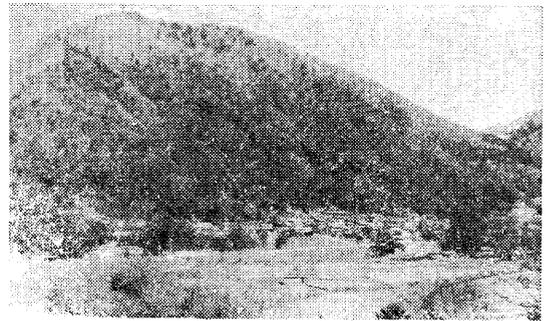
水口、家の下、白子、白子上、家ノ軒、宮ノ前、寺ノ前、押出、大福、俵行、道神、寒伴沢、大かれ、仲尾、上ノ山、大子坂、寒伴沢入、西山、扇畑、下田和、大子、桐久保、ナギ、日影島、山之神沢、向山、湯沢仲、川振石、湯沢、家ノ上、

(九) 下 部

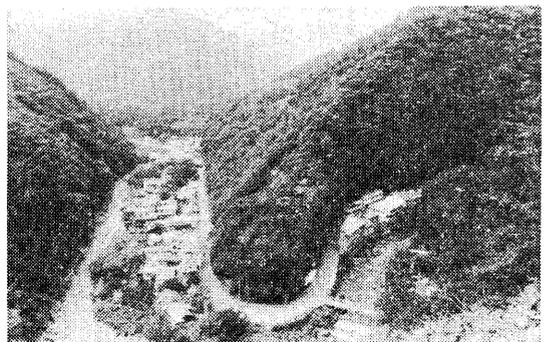
国道三〇〇号線を上之平の手前で分かれ、常葉川を渡ると国鉄身延線下部駅がある。この奥に五老峰及び毛無山、金山、御林山などの高山に源をもつ常葉川の支流、下部川のけい谷流域に発達した街村集落、下部がある。旧下部村である。

この集落は、古くから湯治場集落として発達し「信玄公の隠し湯」として有名である。

地籍的には下部駅付近及びその下流地点は常葉及び上之平に入るが、下部駅付近から、下部川上流にかけて下部温泉郷と呼称され、生活慣習的にも下部部落としてまとまっている。明治八年常葉村ほか十一か村が合併して富里村となり、昭和二十九年、下部村と改ため、下部町となり、昭和三十一年九月、古閑、久那土、共和各村と対等合併して、新しく下部町となった。



上之平部落



下部、湯町の集落

(島、廻沢の部落は右方さらに上流にある)

町名はこの下部温泉を町のシンボルと考え、下部をもって町名としたものである。

下部温泉の由来について、富里青年団編(昭和四年)郷土誌には次のように記されている。

「人皇一二代、景行天皇の御宇、狭穂彦王なるものあり、その三世の孫、臣知津彦の子塩海足尼といえるもの、甲斐国造に任せられ、領内巡視の際、五老峰西麓湯山に於いて噴出する泉源を発見し、喜悅禁ず能わず、立ちどころにその姓をとり、塩海の湯と名づけたり(又塩部の湯とも称せし由) 人皇五四代、仁明天皇承和三(八三六)年甲斐国主、藤原貞雄の次子修理大夫正信、偶々疥癬を患い、紀州熊野本宮へ祈願し、当温泉に入浴すること、三日を出でずして全治す。結願の夜、熊野権現が出現し、温泉より未申の方に我を祭祠せよと云う。その奇異なるに驚き、翌日、臣下と共に搜索せしに山頂平坦なる場所ありしを以てて宮殿を造営して祭る。之を

湯泉主神となす。(この頃より塩海(塩部)を下部と改むるという)

降りて、佐野新左衛門尉政隆なる人、武田晴信公に仕え、馬奉行たり、天文中、上田ヶ原に出陣し、大いに創傷を蒙り、当温泉に浴して治すことを得たり、然れども創所緊要部なるを以て陣に臨むこと能わず、殊に老後の身なるを以て隠遁を乞う。温泉の傍らに居を移して茲に住す。

又川中島の役、武田氏、上杉氏のために刀傷を蒙り、当温泉に入浴、日ならずして癒ゆ、公、大いに効頭の著しきを喜び、家臣穴山伊豆守梅雪をして熊野大神の宮殿及び浴場の修理を命ず、之より以来武田家の臣僚、入浴する者絶えることなし、ここに於て世に信玄公の隠し湯との称あり。

以療養向き温泉として農閑期の長期滞在者や外傷療養の自炊者が多かったが、近時諸施設が拡充整備され、家族や団体客が多く健全な保養温泉地として、昭和三十一(一九五六)年、厚生省から国民保養温泉に指定された。泉質はアルカリ性の単純泉で、微量ではあるが硫化水素化合物の溶存が認められる。二つの噴出所があり、一二の源泉口から毎分一、一〇ハリツトルの湧出がある。泉温は最高三二度の低温性温泉である。湧出泉水は各旅館、ホテルに分湯されるほかミネラルウォーターとして好評を得て、京浜地方を中心に多量に搬出されている。

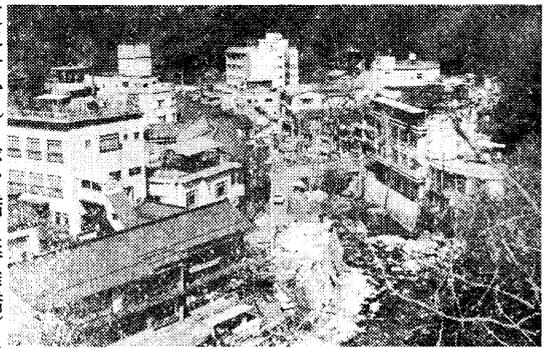
現在旅館数は三四軒で収容人員は四五〇〇人あり、このほか食堂七、料理店やバー五、喫茶店一、みやげ物店が軒をつらね、ここに働く人は町内はもちろん、他町村にも及び旅館及びその関連業に従事している。

この温泉郷の中央には町営の温泉会館、プールも設置されている。集落は温泉旅館街の「湯町」「廻町」と、それから上流の「島」と「廻り沢」の四集落からなり、旧幕時代の戸口は三四戸、一三六人であった。

村石高は九五石三斗六升二合で、一戸当たり平均石高は二・八石で、耕地の狭少なわりに、石高は高かった。

現在は、昭和初期に六二戸、三七〇人、昭和四十年、一九六戸、八八七人、昭和五十五年現在は一九三戸、六三四人で他の集落に比して爆発的に増加し、往時の山間のひなびた湯治村のおもかげはない。

第二章 下部町の集落



下部、湯町の旅館街

昭和四年当時の部落内の姓は、石部、佐野、小林、依田が比較的多く、他に高橋、中野、門西、松木などであったが、現在は戸数の増大に伴い、姓も多種多様となっている。

毎年五月十四日〜十六日に熊野神社の祭りを中心として、下部温泉まつりが催され、その中で松葉杖供養祭など独特な行事も行われる。

下部川と雨河内川との合流点には下部植物園がある。

湯町の温泉街の中央にある神泉橋を渡り、だから坂を進むと再び下部川を渡る橋と、そのまま直進する道に分かれるが、橋(善隣橋)を渡ると、島廻り沢の集落を経て湯之奥に入る。橋を渡らずに直進すると、今は青少年の家、保育所となっている旧湯町分校跡がある。

土地台帳による地名

横道、腰巻、湯向、雨河内、一本木、助代、上ノ山、大村、松原、初土、湯之平、ざれ、廻り沢、日向山、岩下、麦生、蔵狩、見之木、

(H) 湯之奥

下部駅から湯町を過ぎて下部川に沿って三・七キロメートルほど上ると湯之奥の部落がある。

五老峯の山すそを下部川が浸蝕した懸崖の一面にあり、塊村形態をとる孤村集落である。

下部と湯之奥地図



地名は下部の湯からさらに奥に入った地点との意であろう。

現在戸数は一七戸、四八人の山間農業集落である。旧幕時代は一八戸、七三人であった。明治二十二年町村制施行当時は一五戸、七三人と戸数が減少している。昭和初期富里村青年団編になる郷土誌によれば、昭和三年には三三戸、一九〇人と異常に膨張している。その後減少傾向をたどり、昭和三十年には二八戸、九五五人となり、四十年には二二戸、八四人に減り、五十年一七戸、五五人となって以後、戸数の変動はない。

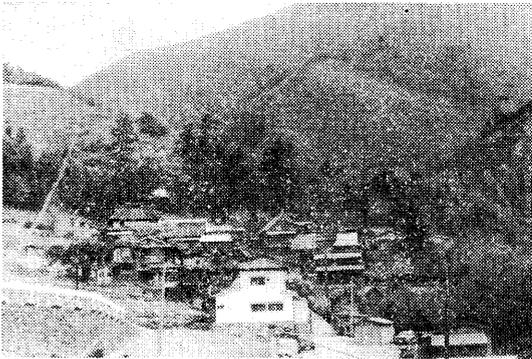
部落からさらに四キロメートル余り、毛無山塊中に武田時代から徳川時代にかけて栄えた金山の跡がある。当時、内山千軒、中山千軒、茅小屋千軒と呼ばれる人家があり、総称して湯之奥三千軒と呼ばれ川尻金山よりもはるかに多い採掘人夫の大集落があった。今も精錬所跡をはじめ大名屋

敷、宮屋敷、寺屋敷、女郎屋敷などの屋敷跡や、宝きょう印塔をはじめとする墓地、精錬に使用した諸種の石ウス、鉱石のズリなどがある。

現在も湯之奥大崩壊（大ガレ）を中心として付近一帯は金、銀、銅、マンガンの試掘鉱区で品位分析によれば金一万分の四、銀一万分の四、銅百分の四、アエン百分の六、鉛百分の一八とのことである。

湯之奥金山は、武田時代、穴山氏の領有するところであり、穴山氏富強の源をなした。徳川時代には幕府の天領となったが、金山奉行は穴山梅雪時代、佐野縫殿右衛門であり、以後世襲によって金山及び湯之奥を統轄してきた。佐野氏は帰農して慶長初年、柳沢吉保の時に姓を門西に改めており、以後現在にいたっている。

佐野氏（門西家）の居宅は、江戸中期初頭の民家として昭和三十九（一九六四）年、国指定重要文化財となり、昭和四十四年には復元工事も完成して往時の姿をとどめている。



湯之奥部落

部落の中央には、急斜面を登るせまい一本の石だたみの道路が走り、その両側に整然と屋敷割りして民家たちが並んでいる。道路の上端には大山祇命を祭神とする山神社がある。

鉱山閉山後はさしたる農産物もなく、林業を主とする山間畑農業であるため、過疎化は進み廃屋となっている住居もある。

五老峯、毛無山塊の森林は一、九三九ヘクタールにのぼり、この開発を目的に下部の神泉橋左岸を起点として昭和十八年度までに林道三・四キロが開通したがその後中断していた。戦後、昭和三十三年に工事を再開、四十五年に九・三キロを完成、

四十四年に湯之奥一猪之頭線と改めて現在山梨、静岡両県から工事を進めている。これが完成すれば、二四・七キロの林道となり、両県の交流、地域の振興、また下部温泉と白糸の滝を結ぶ観光ルートとして期待される。

部落の下方に、下部川の川幅が急に広くなっている広河原（海河原ともいう）と呼ばれる所がある。これは安政年間の大地震によって対岸の山が崩壊し、流れを止めて一小湖を形成した。（周囲六キロ余という）その後、水の落下口が小崩壊をくりかえして湖の原形を失い、広大な河原となったものだという、海河原の名称はこれによるとのことである。

部落をすぎて林道を一キロほど登った所に毛無山登山道がある。湯之奥には望月姓六戸、門西姓三戸、他に佐野、佐田、浦田、遠藤などの姓がある。

山中深くにある孤村集落である。

土地台帳による地名

久保平、中山、広野村上、家之下、後山、永屋、泉水、若草里

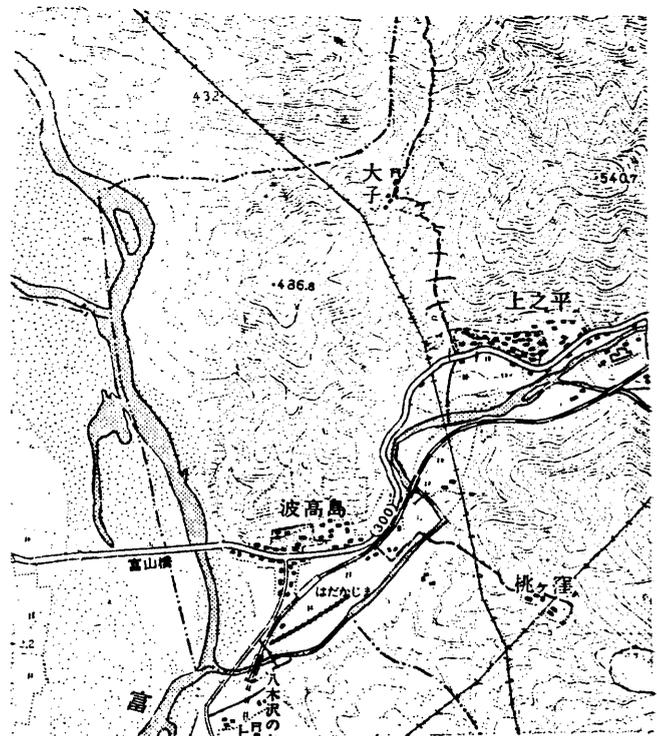
(四) 波高島

上之平から約一キロメートル、南西に常葉川を下ると波高島である。

常葉川流域の中で最も南端に位置する集落で、富山橋を渡ると国道五二号線に接続し、また縦貫道路も整備されて帯金、身延方面へも通ずるようになり、主要道路の分岐点となっている。

村のおこりは、醍醐山峰続きの村上山頂付近に平坦地があり、その周辺に発生した塊村集落であったといわれる。しかし、時代を経るにしたがって徐々に下段の土地へ移住してきたものだといわれる。富士川、常葉川の改修が進み、国鉄身延線波高島駅ができてからは、平地に住居を構える人が増え、現在は駅前を中心に一部街村らしい形をもっている。

往時は常葉川、富士川のはん濫によって、水田耕作は困難であり、農業は畑作にたよるほかはなかった。したがって最も初期の段階には、波高島

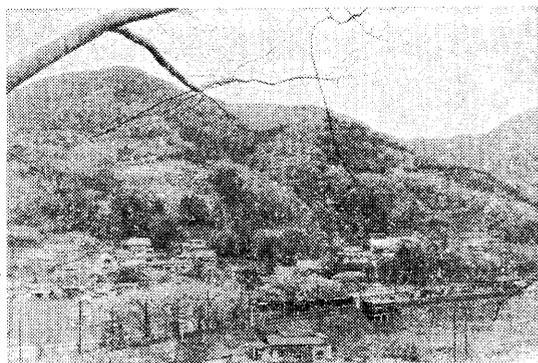


波高島地図

とはいわず「畑が島」と呼んだものでもいい、やがて「波高島」に転化したものであるという地名説がある。

また、西から流れてきた富士川が、醍醐山の山塊にあたって、その山すそをめぐりながら、川瀬が向きを変える所であり、しかも、早川との合流点の川下にあり、川幅はせまく、川瀬は急流となることから「波高島」の地名がでたとする説もある。「島」とは一般に地域の意もあり、河岸に発達した集落や、河岸の特定地域を指す場合によく呼称される地名である。下部町の「竹之島」「柿島」、鵜沢町の「羽鹿島」「鬼島」、中富町の「西島」、早川町の「硯島」「大島」など近隣だけでもその例は多い。

甲斐国志、村里の部には波高島村について「富士川ニ臨ミ、河津場アリ、



波高島部落

以下帯金へ係ル方ハ駿州ノ通路ナリ」とある。註「津出」とは、港から荷船を出すことの意で「河津場」とは、河川における津出の場所の意であろうと思われる。

波高島は対岸の下山への人馬の渡船場だけではなく、富士川舟運の時代、東河内における重要な津出の場所であったと思われる。

ということはまた同時に、南は川沿いに駿州へ、北東は下部、常葉、古関へと陸路における要地でもあったといえる。

昭和になって、富士川に木造の貫取橋（有料橋）が架設されたが、間もなく大水で流され、それ以後は渡船によって対岸との交通をはかってきたが、船頭不足から、部落内各戸が二戸当て当番制で船頭を務め、かろうじて渡船を維持してきた。社会の産業構造の変化、経済発展に伴う人口流出はますます人手不足を強め、当番制船頭も出勞が困難となり、再び仮橋をかけて通行料を徴収し、その維持費に当ててきた。

昭和三十五年、山梨県初の新工法による永久橋として現在の富山橋が架設されて、交通は非常に便利になった。

波高島は旧幕時代、戸数二五戸、人口一二六人、村の石高一一石一斗七升で、一戸当たり平均石高は四・四石となり、現下部町を構成している旧幕時代の村々の中では、ずば抜けた高い石高を示している。

明治初期には三二戸、一六四人が増え、明治二十二年町村制施行時までにはたいした変動もなく推移してきたが、明治末期から大正時代にかけて増加し始め、特に昭和二年に富士身延鉄道が延長されて身延、市川大門間が

開通し、下山波高島駅として駅が置かれてからは戸口は激急に増加した。昭和三年、五三戸、二七五人となり、昭和四十年には九五戸、四〇九人、昭和五十年、九六戸、三七二人、昭和五十五年現在、九二戸、三四八人となっている。

過疎化が進んだとはいえ、その率は他の集落に比較すると低い傾向にある。しかし、やはり青年層の流出は多く、高齢化の傾向は強まっている。

昔からの農業集落であるが、他の集落同様、現在は勤め人が多い。波高島には古くから分校が設置されていたが現在は廃止された。波高島には、佐野、高野、鈴木、遠藤、の姓が多い。

土地台帳による地名

柴田、若宮、下川原、老ノ尻、前島、東畑、高遠、西ノ里、宮沢、奴田（奴多）竹ノ沢、上ノ山、井口、湯沢、蓮草里、細沢、

(三) 桃ヶ窪 川向

上之平から、国道三〇〇号線を波高島に入る手前で左側に分岐する道がある。この道を入り常葉川を渡り、そのまま山中へ七〇メートルほど分け入ると桃ヶ窪の集落跡へ出る。現在は全戸移住してしまい、三戸の空家と二戸の廃屋があるだけである。

ここを過ぎてさらに三〇〇メートルほど山坂を登ったところに川向の集落跡がある。ここはすでに家屋もなく一面の杉林となっている。

桃ヶ窪は旧幕時代は桃ヶ窪村として一村をなしており、甲斐国志によれば七戸、三二人、馬一頭で、村石高は六石五斗二升六合であった。これからみても、往時からの山中の孤村であった。明治八年四月、波高島は外十か村とともに富里村となり、桃ヶ窪部落となったものである。

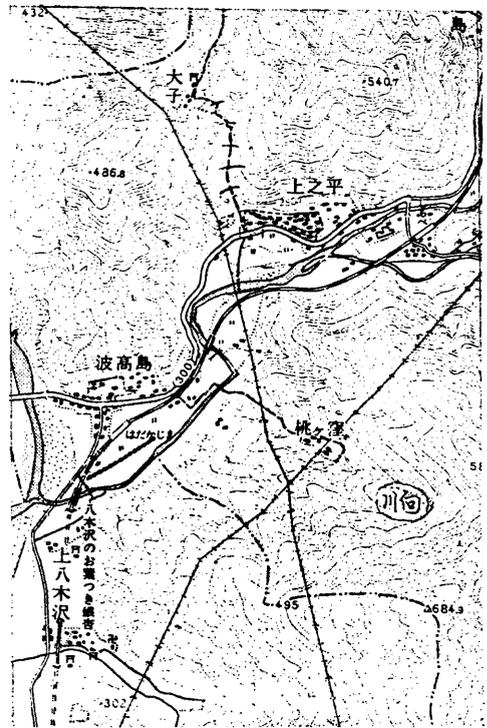
地名については次のような伝説が残されている。昔河内領主が下部温泉に湯治に行く際ここを通過したが、山の中腹に桃の花が満開でみごとに景色の集落を見た。そこで、その部落へ登って花見をした。その時、佐野庄

川向は旧幕時代は大袋村に属し、明治七年の第一次町村合併によって大河内村の一部となったが、地形的に行政上無理があり、明治二十二年七月市町村制施行を機会に富里村に合併したものである。以後便宜上、桃ヶ窪とともに桃川と通称された。

桃ヶ窪、川向ともに山間孤村で耕地も少なく薪炭の生産、用材の伐採を主とし、かたわら焼畑農業を営む貧しいへき村であったため人口、戸数の増えようもなく、両部落合わせて一三戸の戸数は、旧幕時代から明治、大

次右衛門というものがこれを迎えて奉仕し、歓待した。領主はこれを賞し、目通りの土地を庄次右衛門にたまり、地名を「桃ヶ窪」と命名したという。

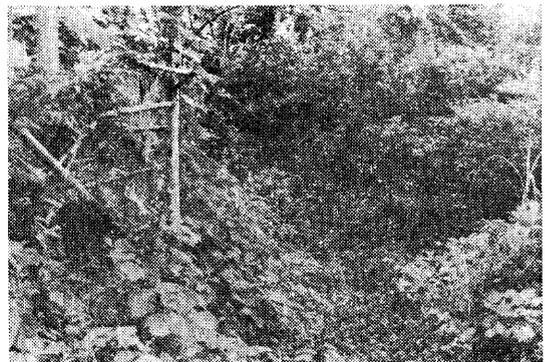
往時、下山から富士川をわたり、下部へ出るには、常葉川を川沿いに登り、下部川に入り、下部の村へ入る道と、桃ヶ窪の沢向かいの山腹を通り、山越えをして下部の村へ下る山道があったものと思われる。伝説の道はこの山道であると思われる、このあたりは、今も御路の地名が残っている。



桃ヶ窪川向地図



桃ヶ窪に残された廃屋



廃屋も朽ちはてた川向部落跡

正、昭和と変化なく推移してきた。

昭和三十年代後半から始まった過疎現象は、いち早くこの山間の両集落を襲い、まず、川向部落が次々と離村し、昭和四十一年四月にはついに無人部落となった。

桃ヶ窪部落も昭和四十年代に入り、七戸から三戸に減少、同四十四年十月には無人部落となって現在にいたっている。

土地台帳による地名(桃ヶ窪)

かまぶた、久保、御路、上之山、前畑、松森、前沢、山沢畑(とび地) だけ(とび地)

土地台帳による地名(川向)

崩、家ノ前、日向、天狗津留

(吉) 一色

常葉の出口から国鉄身延線の踏切りを渡って山中へ入ると、出口から約一キロで鳩打隧道へ入る。トンネルを抜けて約九〇〇メートル下ると一色川に出る。一色川を渡ると道は川に沿って川の上下に分かれる。上流に行くくと大平、峯（八久保）の集落からなる和平の部落、下流に下ると、平、際沢、古宿、芦田、樋口、宮ノ脇、清水、日向、前田の集落がある。これらの集落を総称して一色と呼んでいる。旧一色村である。

一色の地名は荘園制度の一色別納の地から生じたものといわれ、全国的にもその例が多い。佐藤八郎は、その著「甲斐地名考」で一色別納について吾妻鏡を引用して次のように説明している。

一色別納については吾妻鏡にその例がある。

「花押（源頼朝）」

下す、上総国佐是郡の内、矢田、池和田村。

早く権介の娘を以て、一色別納と為し、限り有る所当は加々美小次郎に弁せしむべきの事。

右、件の両村の公事を優免せしめん為に、一色別納とし、権介の娘に仰付くる所なり、然りと雖も限り有る所当に於いては、加賀美小次郎に弁せしむべきの状、件の如し。

文治二年正月廿一日」

とあるのがそれである。これは源頼朝が、功臣上総権介広常の娘で、甲斐源氏の名将小笠原長清（別名、加々美小次郎）の夫人となっていた女性に對して与えた下文で、この女性に亡父広常から譲られた前記の矢田、池和田の二村の名主職を有していた。その父広常は頼朝の功臣であったが、やもすれば無礼なところがあったので頼朝はむほんの心ありと疑い、寿永二（一一八二）年に彼を殺害した。間もなく広常の無実がわかり、後悔した頼朝は父を失った長清の妻を慰めるべく、広常の死後、四年を経た文治二年に前記二村の公課を免じるべくこれを一色別納としたものである。

こういう所は当時、各国の荘園にもあったとみえ、一色の地名は各地に

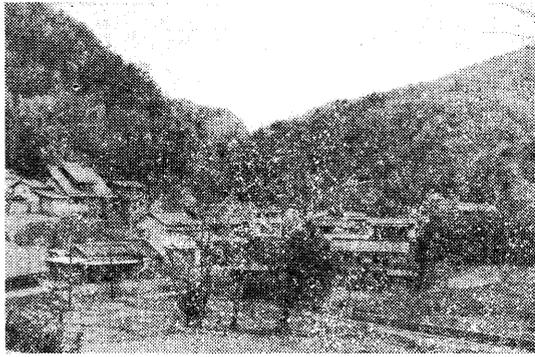


一色の部落地図

ある。

そして、下部町一色を例にあげ、近県にも三重、愛知、静岡、神奈川の旧東海道に属する地方にすべて一色の地名があると述べている。

『岩間村誌』（昭和二六年）では「東鑑」建暦三（一一二二）年五月七日の条に「甲斐国岩間庄」の名が見え、しかもそれが、和田一族の乱の功によって伊勢二郎兵衛尉なる者に与えられているところから、岩間の庄の成立を鎌倉以前であったと推定している（一色はこの岩間の庄に属していた）



一色の部落

これからみても、一色の集落形成は相当古く、平安朝時代、岩間の庄として、荘園内の一村落で誰が誰に一色別納の地として認めたものかはわからないが、公事免除の地となったものが、地名となったのであろうことは間違いないと思われる。

明治八年、下田原、上田原、宮木とともに四か村が合併して共和村となり、明治二十二年、町村制施行時はそのままであったが、昭和三十一年九月対等合併して下部町となり、昭和三十三年四月には下田原、宮木は分町して中富町に編入したが、一色は上田原とともに残り、現在に至っている。

江戸時代の戸口は、戸数九二戸、口数三七九人、馬八頭、村石高一七七石七斗六升で一戸当たり平均石高は一・九石と、東河内領内では平均以上の石高であった。以後大正五年、八一戸・五八三人で昭和四十年には八〇戸、三二五人、同五十年は六七戸、二二四人で現在は六三戸、一八七人となり、他の集落と同様過疎現象が進んでいる。そのために今は住居がなくなった集落もある。

和平部落のうち、峯（八久保）は天明年間の山津波によって、高所にあったものが現在地に移動したともいわれている。和平の集落は他からも移住するものもあり、一時は和平三三軒といわれた時代もあったそうであるが、現在は一八戸、六〇人である。ここからは三沢の平松へ抜ける古道があり、往古の往還であったそうだが、現在は通る人もなく、道は消滅している。

一色は昔からの農業集落で、昭和三十三年の農業センサスでは農家数は八一戸、うち専業農家は三一%の

二五戸、第一種兼業が三八%の三一戸、第二種兼業が三一%の二五戸となっている。十七年後の昭和五十年のセンサスでは、農家数は五一戸になり、うち専業農家は一七%の八戸、第一種兼業農家は一一%の六戸、第二種兼業農家が増加して七二%の三七戸となっている。

構造的には専業農家が減り、第二種兼業農家が増えて、農業以外に生計の道を得て、勤め人などが多くなっているが、下部町内の他集落と比べて農業依存率は高い。

この集落も学校の創設は明治七年と早かったが、多くの変遷をたどり現在は廃校となっている。

一色のこの川筋に人が住みついたころは五苗字五屋敷であったといわれるが、現在は内藤、佐野、古屋、依田、春沢、萩原、近藤、佐藤、小林、加賀美、青柳、望月、新井、深沢の姓があり、他の地域と比較してみても塊村集落としては珍しく多様な構成になっている。

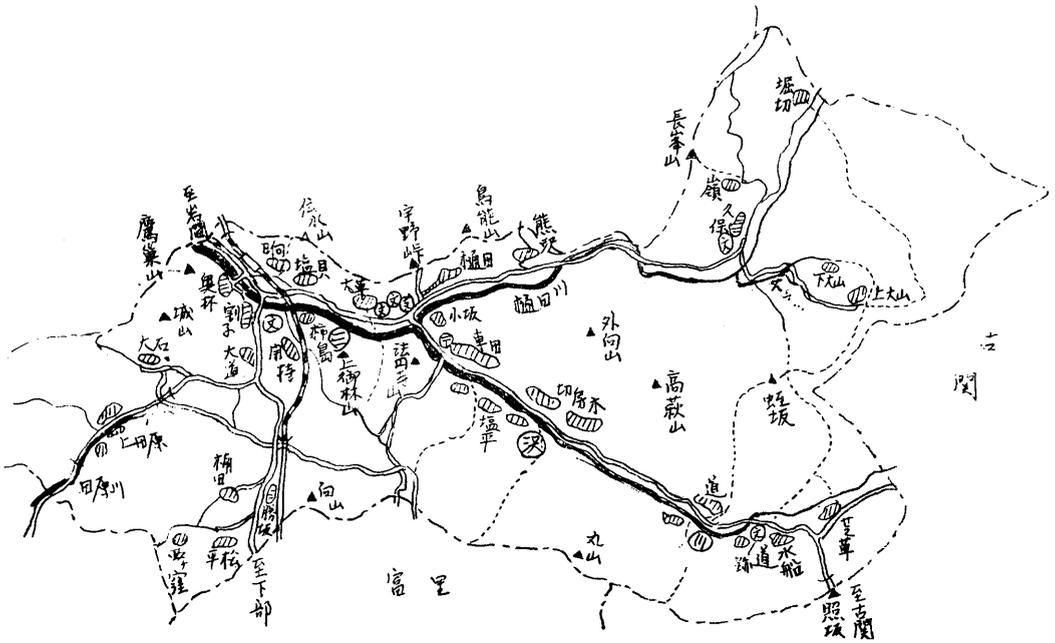
土地台帳による地名

栗山、大平、八久保、萩間、芦田、樋口、大子、和田、細久保、平、嵐山、古宿、宮ノ脇、上日向、西沢、清水下、日向、前田

二 久那土地区

久那土地区は、旧久那土村（芝草、水船、道、切房木、車田、樋田、三沢）で、それに昭和二十六年、落居村熊沢部落が、落居から分離して久那土村に編入し、さらに昭和三十年、嶺、大山、久保、山家の一部が山保村から分離して久那土村へ編入した。昭和三十一年久那土、古関、下部、共和の一町三か村が合併して下部町となって、久那土地区となったものである。後、三十三年、下田原、宮木が下部から分離して中富町へ編入してからは上田原も久那土地区へ入り、現在にいたっている。

地名のおこりについては、大正五（一九一六）年七月、山梨県志編纂会が県志編纂のために行った久那土村取調書によれば「村名タル久那土ノ由



久那土略図

来ヲ按ズルニ、往古、三沢村ノ中央ニ、一ノ瀬、田原、車田、三方面ニ通スル岐路アリタル、里人此処ニ神ヲ安祀シテ岐神ト呼ビタリ、今尚此地点ニ奥杯ト称スル一部落ノ存スルアリ、是即チ岐ノ転化シタルナラン、久那土の村名、之ニ基キ改メタリ」とある。

古語辞典によれば「岐神（くなどのかみ）とは分かれ道に祭られる神で、道祖神、さええの神、ッふなどの神」ともいう」とあり、また神代記、四神出生の章には「こは本の号（みな）を来名戸の神と曰す」ともある。

郷土史家の考察によれば、奥杯は、お岐様のこと、「お」は尊敬と親愛を表わす、接頭語であり「おくなど」に奥と杯の漢字をあてて、奥杯としたものであろうとしている。

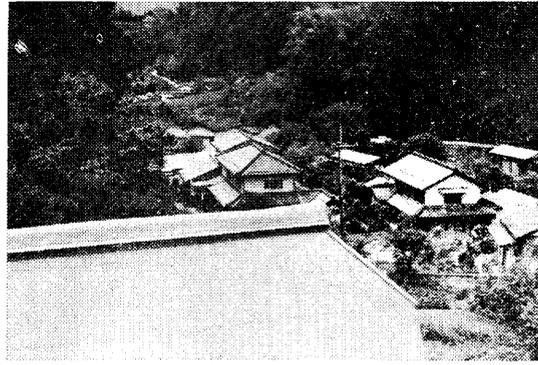
また一説によれば、明治二十二年、町村制施行を機会に合併当時、三沢村ほか六か村の合併から、七里村として申請したが、当時の郡長、依田孝が他に同名ありとして「岐」に久那土のあて字をして村名としたものであるという。しかし甲斐国志、古跡の部にも「久那土」の字はでていない。

以下久那土地区内の各部落の概要を記すが、部落概要中、姓名については同姓が二戸以上のものを記し、他は省略した。これは集落考察上で姓名で問題となるのは地名と、豪族居住やその系列及び同族集団が主たるものであるからである。

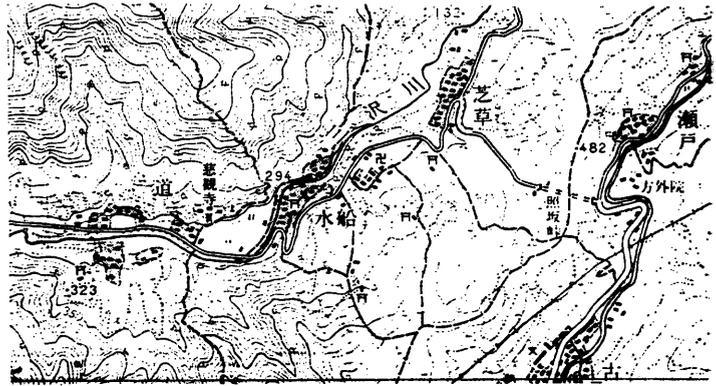
(一) 芝草（柴草）

久那土地区の東のはずれ、三沢川（大磯川）の左岸、河岸段丘上に位置する集落で、戸数二三戸、人口六八人、東北は自害沢によって大磯小磯部落に境を接し、東は照坂を経て瀬戸部落へ続き、北は空峠を隔てて三保へ通じ、南は水船部落と隣接している。

部落は上村（うえむら）と下村（したむら）にわかれ、上村は内藤姓を名のり、下村は赤池姓が多かったが、年々戸数が減少し、現在下村は五戸を数えるだけになっている。甲斐国志によれば、江戸時代文化年間の戸口は戸数二二戸、人口は一一三人、馬五を飼い、石高四一石であったとされて



芝草部落



道・水船、芝草地図

いる。水田は下村の川沿いにわずかにあるだけで作物はほとんど陸作（お
かきく）である。農業は自家消費の補いとする程度の米作のほかは段丘、
または山腹斜面に作付けた桑園による養蚕が主であったが、現在はほとん
どが離農し男子若者は出かせぎや勤め人として通勤している。

地名の起こりは古老のいいたえによると「往古、下流の切房木に堰
塞（えんそくせきふさぎ）があり、湖となっていて、隣村の水船までは舟が
通ったが、当地にはこれならなかった。下村の湖辺は短かい草が一面に生え
ている草地であったところから、芝草の地名が起った」といわれている。

照坂峠へ向かう往還と、大磯小磯へ通ずる道路との分岐点でもある。郷

土史家、加藤善吉は町公報、部落探訪で次のような話を紹介している。

「珍しい事に、この部落の氏神様、諏訪神社は隣接する水船部落の地内に鎮座し
ている。昔は水船と共同で祀ったらしいが徳川時代に紛争を起し、市川代官所
の裁決で芝草単独の神社となった。敗訴した水船は、そのまた隣の道村、白山神
社の氏子となったという」

久那土村時代はもちろん、町村合併後も、道村に久那土小学校の道分校
があり、児童達はその分校に通学し、高学年になると本校である久那土小
学校に通学していたが、古関の過疎化が進み、児童減が学級定員を割るこ
とから、通学上の便ということもあって学区変更をして、現在は小中学生
とも古関小中学校へ通学している。

また、往時、二寺のあったことが、前記部落探訪に記されている。

「部落内には昌寿寺と教聖庵の二か寺があったが、火災で焼失したのを機会に、
明治七年六月十日許可により二寺とも廃寺となった。」

土地台帳による地名

南尾り、中畑、茶道沢、築敷、上ノ山、中村、竹下、新井、寺の前、寺の
上、横マクリ、地藏堂、通地、自害沢、ツルネ、瀬戸坂、深沢、中オバ
ネ、照坂、崩沢、釜淵、藤ナト、平松、大向山、ナギ、川久保、川久保
上、水那久保、小掛作り、ザレ岩、宮林、芽山、上川久保、向山

(二) 水船（みずふね）

芝草に隣接し、その西南に位置する集落で戸数一八戸、人口七〇人、三
沢川（大磯川）に沿った道路に並ぶ列村の形態をとる下村（したむら）と、
左岸段丘上に塊村形態をとる上村（うえむら）とに二分される。上村は小
林姓を名のり、下村は中村姓を名のっており、いずれも同族団の色合いが
濃い。

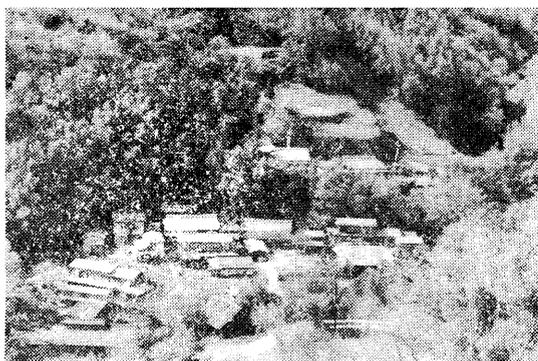
地名のいわれは甲斐国志によれば「名義、切房木ニ類スベシ」とされ
ている。これは往古、大磯川が切房木でせきとめられ、湖水をなしている

時代、船着場であったため、村名をなしたということである。

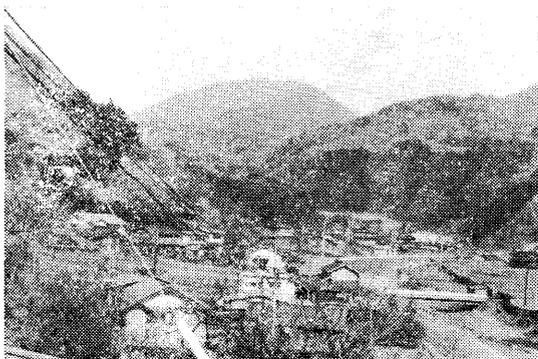
江戸時代の戸口は、戸数二一戸、人口八〇人、馬三を飼い、石高三一石であった。現在の戸口は一六〇年前の江戸時代のそれを下まわっていることになる。特別な産業はなく、昔から養蚕を農業の主体とし、他に職人として出かせぎが多かった。現在も職人、勤め人が大部分である。

段丘上を利用した桑園による養蚕が盛んに行われ、昭和三十年調では二〇戸の戸数のうち一三戸が養蚕を営み、年間掃き立て量六二〇グラム、年間収繭量一、九八四キログラム、当時の金額で八二一、九七四円の収穫であったことが記録に残されている。現在はほとんどが離農し、勤め人として通勤している。

水船地区の東のはしに、諏訪神社が祀られている。甲斐国志には「水船村境ニ在リ、柴草ト両村ノ鎮守ナリ、社中ニ七抱ノ杉ノ樹アリ」と記述されている。



水 船 部 落



道 部 落

土地台帳による地名

宮ノ沢、棒向、西ノ沢、宮前、原通、古家敷、家ノ前、人寂、沢ノ上、空峠、森下、芝間、新那正、神置場、高畑、尾り坂

(三) 道 (みち) (道村・どうむら・堂村)

水船の西、三沢川沿いに東西に長く伸びた集落で、現在戸数五六戸、人口一八九人、三沢川右岸道路沿いに列村形態をとる小部落とその対岸小段丘上に塊村形態をとる小部落からなる下(しも)と、水船に隣接し、三沢川左岸段丘上にある上(かみ)とに二分される。江戸時代文化年間には戸数五五戸、人口二二五人を数え、以後、明治大正とそれほど戸口の変動なく推移している。

明治二十二年町村合併までは、道村(どうむら)と呼んでいた。地名のこりは諸説あって、いずれがそれであるか判然とはしないが、これらが複合して地名となったものであろう。

- (1) 僧・行基が湖畔に慈観寺を開創して、湖を干拓した後、湖底であった場所に発達した村を堂村と称した。寺ノ堂であり、堂が道となったという説。
- (2) 往古、湖であったものを切房木の湖を開削し、水を流出せしめ、その後、川沿いに新道を作ったために道村と称するようになったという説。
- (3) 甲斐国志「村居、東西ニ長シ、大磯川屈曲、鳴咽シテ流ル、村内ニ橋ヲ架スルコト八所、路転曲シテ通ズルヲ以テ名トスルカ、又古書ニ、道ヲ堂ニモ作レリ、蓋シ仏堂に因リテ名ヅクルナラン」という説。

集落は前述した如く上下にわかれるが上は小林、山田姓が多く、下は佐野、赤池姓が多い。

地名の由来にもあるように、天平時代、神亀五(七二八)年、僧行基が慈観寺を創設していることから、集落の発生は相当古いものであることがうかがわれる。

慈観寺は、その後六百年を経て明徳四（一三九三）年、真言宗から曹洞宗に転じ、以後四十代の住職を経て現在にいたっている名刹である。境内の経蔵には輪転書架が置かれ、そこに保管してある一切経は町の文化財に指定されている。

このほか、加賀国白山比咩神社から分靈した白山神社、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮から勧請した桐尾八幡神社、なお他に八王子神社などがある。

集落内の道路は、今でこそ道の下から三沢川沿いに走る県道がそのまゝ部落の上方を通って照坂トンネルにいたっているが、終戦前までは慈観寺前、駿道橋のたもとより上部落に入り、甲斐国志の記述どおり転曲していた。上部落の中を屈折して登り水船上村を抜けて照坂トンネルへ通じていた。途中上部落の中間に夏なお冷たい清冽な泉があり、どんな日でもかかれることがなかった。この水は近辺の人家の飲用水として使われ、また、そこに作られた清水屋は古関への旅人のよき憩いの場となっていた。

土地台帳による地名

高萩、穴音、モリ、寺前、和田前、西ノ上、西ノ前、滝下、平林、芝原、宮坂、宮ノ前、宮ノ脇、カラス沢、大沢、棒作、野土、天白、尺八、一ノ峠、上宮前、清水、清水上、火燈、桐尾、竹ノ上

(四) 切房木（きりふさぎ）

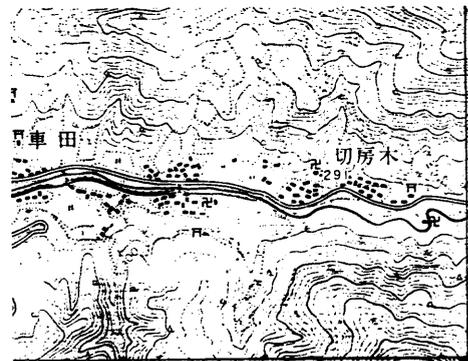
道部落から、川沿いに下ること約五〇〇メートル路村集落の形をとった部落が切房木である。やはり上下に大別できる。戸数六〇戸、人口二二一人、河岸段丘上に南面している農業集落である。

一部左岸に小集落をつくり、車田部落に隣接している。江戸時代、文化年間の戸口は四六戸、二一〇人、石高五六石と甲斐国志に記されている。

地名のおこりは「きりふさぎ」の意とされている。

大正五年の県志編纂取調書には

第二章 下部町の集落



切房木地図



切房木部落

「切房木、水船両村名ノ起リハ、往古、両部落ノ人民境論ヲ起シ、互ニ自説ヲ主張シテ決スル能ハズ、下手ナル部落ニテハ、上手ノ者ヲ苦シメントシテ岩角ノ狭塞セル処ニオイテ雑木等ヲ切りタオシテ川水ヲ堰止メ、殆ンド水攻ノ体ヲナシタリ、上手ノ部落ハ大ニ苦シミ、隣家通イモ舟ヲ以ッテセラレタリトカ、是ヨリ下手ノ部落ヲ切房木（切塞）ト称シ、上手ハ即チ水船ト呼ブニ至レリ、ト伝ウ。」とあり、また甲斐国志は「村ノ名義ハ遮ギリ塞グ意ナルベシ、今モ岩石峙立シテ見エタリ、古ハ大磯川及諸溪流壅塞セシ処ナリシヲ開鑿シテ水ヲ去シ事アリシヤラン。」

と記されている。

現在道部落よりの切房木に入ると、県道が大きく右カーブしている所があるが、ここから眼下五〇メートル、三沢川を見下ろすと、旧街道（古道）が見える。川瀬に突出している部分があり、その上に仏堂（地藏堂）を望見することができる。ここから左右のがけを眺めれば甲斐国志の記述が真

実味をもって感じられる。また一説には三沢川が堰止められて湖をなしている時、その湿度で常に霧が深かつたので「霧塞」と称したともいう。

切房木は赤池、中沢の姓が多く、中沢は上に赤池は下に集中している。この外、池田、小林、加藤、望月などの同族集団と思われる姓もある。

地名の起こりの伝説とともに他にも長者の池の伝説もあり、集落の発生はやはり相当古いものと思われる。

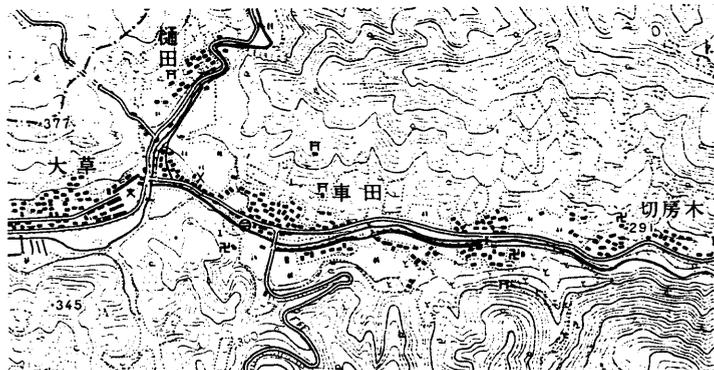
現在は勤め人が多いが、往時からの農業集落で、昭和三十年ころまでは南斜面を利用した桑園による養蚕が盛んであった。当時は三沢に次ぐ掃き立て量、収繭量を誇っていた。全収繭量では三沢の次に位置するが、昭和三十年調によると全戸数五八戸中養蚕農家四六戸、年間掃き立て量一、八二一グラム、年間収繭量五、六二四キログラム、部落全戸数に対する収繭量は九七キログラムとなり、三沢の三一キログラムの三倍となっている。一戸当たり平均収繭これからみても、三保地区を除く、久那土では随一の養蚕部落であったことがうかがわれる。

また、江戸時代には「こうぞ」「みつまた」を原料として、運上用の紙漉きも行われた。明治中期まで紙漉きが行われたことも古老の話にうかがわれる。近年に至っては「タモ」栽培が行われて、市川方面へも出荷されたようである。地名の中に、大堰、紙干場の地名が隣りあってあり、紙漉き出しとの関連性も思わせるが、資料もなく、詳細はわからない。

三沢川左岸、中尾沢の奥、ハブナ沢は地質的には西八代層群を三沢断層線が切る所であり、ここに往時単純泉が湧出した。切房木温泉と称したようである。甲斐国志、山川の部に「切房木ノ温泉、全瘡を癒ス 其ノ地ヲ湯屋ト呼ブ、岩アリテ地ヲ覆フコト屋宇ノ如シ 高サ二丈許リ」とある。現在も湧出しているが、利用はされていない。

明治初年、竹といで引湯し、河原に湯屋を建てて温泉場を作った人があったようであるが、引湯距離が長かつたために失敗に終わった。

土地台帳による地名



車田部落地図

中村、大堰、紙干場、兎、新井、坊屋敷、日影田、上切、香ノ下、香ノ下向、前田、地藏堂、宮ノ脇、東沢、梅木平、御崎、朝日、向林、は婦な、香土川、香会立場、井戸尻、川場、芝ヶ平、切岸、大久保、尾細道、丸、細久保、吉見久保、北峯向、竹沢、北峯、山ノ神、兎坂、滝脇、東大沢、高萩、大林、水ノ鶴、池端、中尾、尾畑、茅場、猿畑、外山

(五) 車田(くるまだ)

切房木の下(西方)三沢川が槌田川と合流する地点の間に路村集落とその対岸にある塊村集落形態からなる車田部落がある。明治二十二年以前のいわゆる車田村である。

現在戸数八二戸、人口三二二人の、久那土地区では三沢に次ぐ大きい部落である。久那土地区の中心に位置し、郵便局、農協、稚蚕飼育所などもこの地にある。市川警察署の旧久那土駐在所もここに置かれていた。現在では市川警察久那土連絡所、久那土診療所がある。往時は久那土公会堂もあり、名実ともに久那土地区の中心地であった。

この部落がいつころできたかは、文献の徴するものがなく、一切不明である。法円寺が真言宗から転宗したのが文明十八(一四八六)年であるから、それからでも五〇〇年近いので、寺が創立されたころを考えると、それ以前、相当古い時代から村を形成していたことが考えられる。

地名のおこりは、甲斐国志、村里の部には「車田ハ曲間田ニ作ル」とも。西八代郡誌はこれを説明して「川に沿って方形をなす。故に曲留田に作り、遂に今日の如く車田に改めたり」と言っているが、地形上からいっても、甲斐国志の文法的解釈からみても、この説明には無理がある。

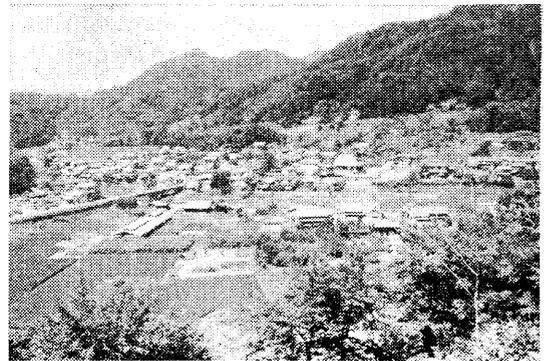
「地名の研究」によれば「開田の方法に、部落が協力して開田したのも、当初から、割渡して私有させたものもあるが、これとは別の方法で、当分の間は年限をたて、総員順回りに耕作させたものがある。これを車地式といい、曲間田ともいう」とある。現に車田地内に「今井」という小字名があるが、今井が、新居の意味だけでなく転化して新田開墾地の地名という説もあることを考えると、車田の地名の起源は後者の説明の方がうなずける。曲間田が転じて車田となったものと考えられる。昔、庶民の間においては、往々にして簡単なあて字を書き、読み書きを容易にしたことは他の例をみても多い。

宝暦六年の三郡村高帳によれば、車田村の石高は九八五斗四升八合であった。当時の戸数は四九戸であるので、一戸平均石高は二石となる。

隣接の切房木は、四六戸、石高五六石六斗二升八合であるので、一戸平均石高は一石二斗となる。これと比べても裕福な村であったことがうかがわれる。加藤善吉の記録によると

「ただ残念なことには、三沢には三沢氏がいたし、常葉には常葉氏がいて、村を支配していたように、これだけの大村であれば、車田を姓とする豪族が居住していたのではないかと思われるのだが、法円寺の過去帳をみても百五、六十年より以前のこととはわからないし、昔は慈観寺檀家もあつたというが、慈観寺で所蔵する四百年来の過去帳には車田村は一人も載つてはいない。部落内を探しても、五輪塔も宝きょう印塔も見当たらないし、伝説もなければ、言い伝えもない。世の変遷とともに永い間に消えさせてしまったのであろうか。

明治以前はともかく、維新前後から久那土村結成ころにかけて、車田の人達は積極性が強く、この川筋の村々を牛耳っていた形跡が古い文書から



車田部落

うかがわれる。特に三沢村外四か村連合のころにその感が強い。」

古くからの農業集落であるが、これより上(東)の切房木、水船、道、芝草がどちらかといえば養蚕主体の農業であるのに対し、車田は水田面積が広く、米麦主体の農業構造であったようである。

また、たび製造を業とするものもあつた(大正五年取調書)現在、印章、装身具、その通信販売、行商関係が多い。

県道割子古関線と西八代縦貫道路との分岐点にもあたり、交通の要衝

であり、交通量は激しい。

車田には日向、二宮、土橋姓が圧倒的に多く、他に伊藤、渡辺、小林、佐野、望月、遠藤、玉木、その他などがある。特に二宮、土橋の姓には同族集団の色合いが濃い。

この部落の南方の山中に下部射撃場があるが、この地を通称海畑(うんばた)という。往時沼地であつたことから、この名がつけられた。大正五年の取調書によればその十二番、原野、湖沼の項に「海畑ノ湖、車田の南方、三丁許り山中ニ在り、周囲凡ソ二町余、近年ニ至リ、周縁ニ稻を植エ付ケ中心ニ蓮ヲ植エタリシガ、結果、大イニ可ナリ」とあり、ここに湖沼の存在していたことがうかがえる。

土地台帳による地名

小坂、家ノ前、大林、今井、樋ノ沢、家前向、鍛冶屋沢、大平、向田、内坪、塩平

(六) 樋田 (といだ)

蛾岳や大畠山を源流とする樋田川が三沢川と合流する地点から上流へ五〇メートルばかりの間にある部落が樋田部落(旧樋田村)である。樋田川の右岸、大上の山塊が樋田川にせり出した中腹にある塊村集落と、樋田川の下流がつくったはん濫原に点在する疎村集落とからなる。最南端は西田、樋田川を境として車田に接続し、また少し入った所に宇ノ尾トンネルを抜けて六郷町に至る道路の分岐点もある。

現在戸数は三七戸、人口一五五人の小さい部落であるが、小さくても、昔から裕福な村であつたらしい。宝暦六(一七五六)年の三郡村高帳によれば、戸一五、石高三二石八斗七升で一戸平均石高二・二石となる。しかも馬四とあり、車田村が四九戸、平均石高二石、馬七、であつたこととくらべると、樋田村が近隣の他村にくらべて比較的裕福であつたことがうかがえる。しかも、江戸時代一五戸であつた戸数が現在三七戸という増加率も、駅周辺の特別な地帯にある部落を除けば他に類のない増加率であり、全体的に過疎化の中で特異なものであろう。



樋田・熊沢地図

部落の主要集落は川沿いより一段上がった場所にあつた。飲用水には多少の不便はあるものの、村下には豊かな流れがあり、背後には大上の山を背負い、三沢川や樋田川の川瀬がまだ決まらない往古には、生活の場として、格好の場所であつたろう。時代が進むにつれて、川辺のはん濫原に住するものが増え、また樋

田川の下流、県道の分岐点あたりは車田、樋田、三沢の各部落の接点であり、地形的にも久那土村の中心点でもある所から、ここへ居住する者も増えて現在にいたっている。

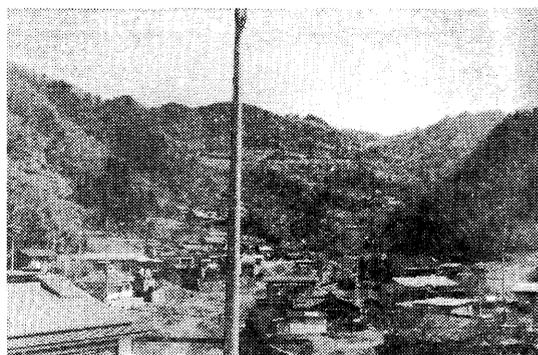
集落の起源はいつころかはわからないが、部落内にある阿弥堂が天正のころ、すでに創設されていたといわれるし、その裏の林の中にある供養碑(大永二一五二二)と、裏道沿いにある石碑(永享二一四二九)は、一族の者たちがいづれも村の名主であつたことを強調しあつて建てたものであろうという考察もあるところから、相当古い発生源をもつものであろう。

部落の地名(村名)のおこりは、甲斐国志、村里の部には「耕水ノ事ニ依り、村名トナルカ」と記されている。

樋田川は、源を蛾岳、大畠山に発し、嵐山のふもとをけずる大山川と合流して、樋田に至る八キロメートルの流域をもつ急流である。大雨の度に増水は激しく浸食作用も大きかつたものと想像される。下流に至り三沢川との合流点では、樋田川の川瀬に三沢川が直角に当たる形となりそのため三沢川の瀬が樋田川の瀬を閉塞することとなり、樋田川はしばしば溢流したかと思われる。こうしてできたはん濫原はまた、急速に浸蝕され川瀬ははん濫原の下を流れるようになる。そのため、このはん濫原を水田化するためには上流から引用しなければならぬが、はん濫原の上流地点は切りたつた岩肌をもつ断崖で到底、水路の開削は不可能である。結局、見渡す限り、竹といをひき、木をくり抜いてといにして引用したものである。この田園風景をみて、他所の部落の者までが、トヒ田(樋田)の村と呼んだことに始まるといわれている。

現在は他部落同様、専業農家はなく、ほとんど他産業を主とする兼業農家である。樋田は印章関係を業とする者が多く印刻業者、通信販売業者などが多い。

樋田部落は、伊藤、河西、渡辺の姓が多く、この三氏から村が始まったともいわれている。



樋田 部 落

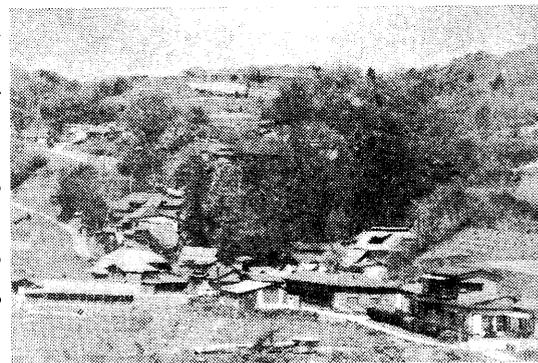
土地台帳による地名
 ゴウシ久保、烏能、沢ノ神、上ノ山、露ノ久保、日向山、宮ノ上、宮ノ脇、西田、日影田、家ノ前、家ノ下、菜作、柳田、柳平、日向、桑原田、向山、大谷

(七) 熊沢 (くまざわ)

樋田の部落から、上流へ約七〇〇メートル、道沿いにある小集落と、それより北西に標高約四〇メートルの山腹上に塊村形態をとる集落とからなる熊沢部落がある。(旧熊沢村)

この部落は明治八年岩下、寺所、五八と共に河頭村となり、明治二十三年の町村制施行の際落居村と合併した。昭和二十六年落居村から分離して、久那土村に編入して現在にいたっている。現在の戸数は二五戸、人口九八人である。熊沢部落は樋田川流域の村々の中では下流に位置し、川沿いに河岸段丘というよりはむしろはん濫原と思われるやや開けた平地をもち、樋田川用水による水田は三・九ヘクタール、またなだらかな山肌はくまなく耕され、一時期畑作による耕地面積は一〇・八ヘクタールに達したという。往古から自作自営の農家が多かったと伝えられる。現在はほとんどが勤め人であり、農業は縮少され、兼業的な自家消費農家が多い。

三郡村高帳によれば戸数二〇戸、村石高四二石八斗七升五合とあり、一戸平均石高は二・一石となる。これまた比較的裕福な集落であったと思われる。



熊 沢 部 落

自作自営の経営形態がとられていたことや、部落周辺に、狼煙台(ノロシ)遠見、別当、屋敷跡などの名称で呼ばれる場所があること。土地台帳に「彦田狩」という他所では余りきまなれない地名のあることなどは、甲斐源氏の一族武田信広の居住地説や、熊沢天皇御生母居住の地であったとの説が起きてきた要因の一つでもあろう。熊沢天皇はともかく、武田信広居住地説は一考に値する。

武田信広は、武田系図によると武田十一代、信満の六子で、河内領内に地行所をもっていた。熊沢地内に

も館をかまえていたという。

信満は応永年間に天目山で滅亡したが、その子信広は難をのがれて、河内領内の辺地に住居を求めてきたものと伝えられている。部落の最も上方にある住安寺の付近にその館跡があったという。ちなみに、住安寺の屋根棟の定紋を始め、須弥壇や、あらゆる物が武田菱であったという。

熊沢の地名のおこりについては、甲斐国志ではふれていないが、「地名の研究」によると「谷がしばしばよどんで、幾分の平地をつくる場所をクマという」とあり、郷土史家は、川沿いに平坦地の開けた場所をクマとい、そのような場所がらからクマ沢と称されるようになったのではないだろうか。

樋田から熊沢への一本道は、くねくねと曲がりくねった樋田川の流れに沿い、部落への道程はわずかであるが、かつての旧道は樋田の村から一たん川辺に下り立ち、向う岸に渡り、山際に近付き、上流に向かい、再び川を越して熊沢へと上っていったという。しかし水かさが増し、川すじの荒れる

季節となると、村人たちは比較的なだらかな斜面を選んで、山の中腹を村から村へと歩いていったという。このことから、樋田川が熊沢の上流「くもん淵」を流れ落ちた後ははん濫原をだ行し、いくつかのよどみを作っていたであろうことは想像される。

熊沢部落の住民は、往古からすべて伊藤の姓であることは大きな特徴であろう、現在は他村より移り住む家を除いて、二五戸中、二四戸は伊藤である。

土地台帳による地名

前川原、上川原、樋坪、宮ノ脇、北川、家ノ前、上ノ山、坂東、大日向、内田、彦田狩、狐石、道棚(店)

(八) 三保(大山、久保、嶺、堀切)

熊沢部落を樋田川に沿って上流に約三キロメートルさかのぼった所、樋田川と大山川の合流点、標高三五〇メートルから、両側の山中、標高七〇〇メートルの間に三保の集落が点在する。明治以前の旧久保村、嶺村、大山村が明治七年に合併して三保村となったものである。三保村の村名は三か村が隣保共助する意からといわれる。

この三保村はさらに明治十七年隣接する山家村、落居村とともに三か村連合となり、さらに明治二十二年、町村制施行の際、山家村と合併し、二村の「山」と「保」を一字ずつとって山保村となった。

山家村は、四尾連、藤田、近萩清水、芦久保、帯那、堀切の村々からなり、山家五か村と呼ばれていた。村名は「蛾ヶ岳ノ山足ニヨル故ニ山蛾トイウナルベシ、山家ハ仮字ナリ」(甲斐国志)と、「山家は夜麻我なり」(地名の研究)の二説がある。現在下部町となっている下堀切は大字が山家である。

山保村となった三保は、その後昭和三十年、久保、嶺、大山、山家の一部、下堀切が、ともに山保村を分離して久那土村へ編入した。

現在四部落の合計戸数は五九戸、人口は二二一人である。

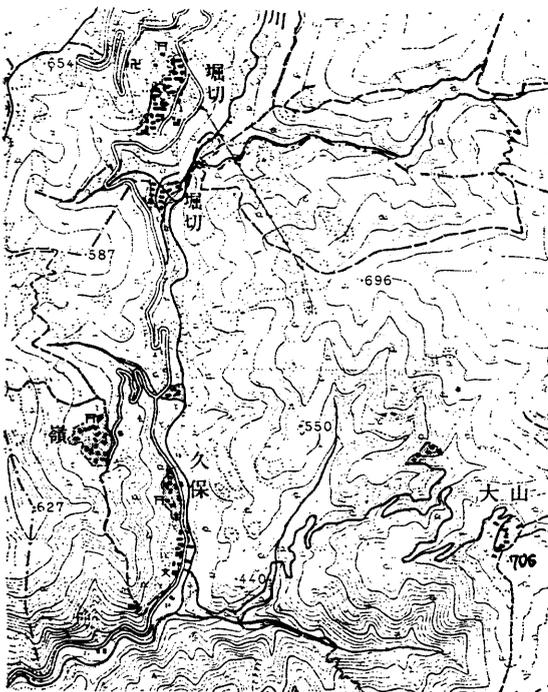
久保、嶺、大山、堀切、四つの集落は、それぞれ立地条件を異にしている。樋田川沿いに道路に沿って列村をつくる久保部落、山頂に孤村集落をつくる大山部落、大山より低い、やはり山頂近くの中腹に塊村をつくる嶺部落、さらに沢の谷間に集落をつくっている堀切(沢堀切ともいう)

また、各集落間の距離も約一キロメートルから四キロメートル、標高差も五〇メートルから、三〇〇メートルと、それぞれ離れて存在している。

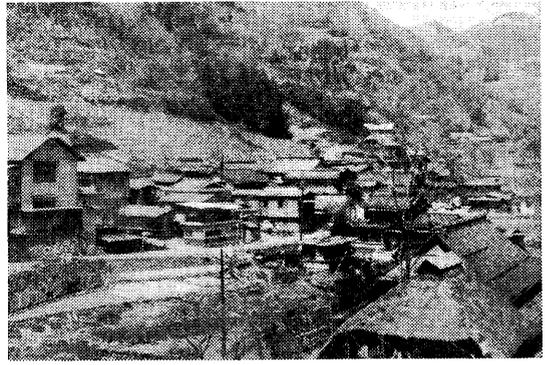
ア 久保

久保、または久保沢ともいう。樋田川の河岸段丘につくられた列村形態をとる集落で戸数二七戸、人口九五五人、食料品兼雑貨商を営む商店が一軒という小部落である。わずかに開けた河岸段丘を耕やす三保地区唯一の水田所有部落である。

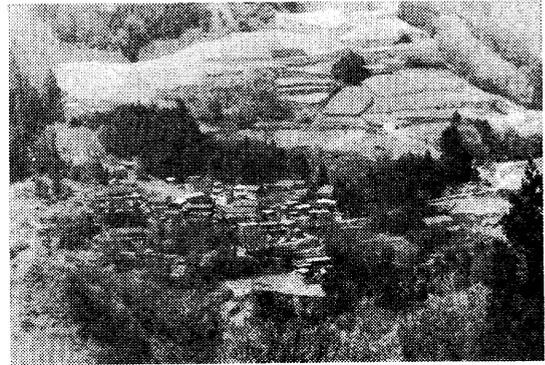
列村形態はとるものの、大別的には役場久那土支所から、約四キロメー



三保地区の地図



久保部落



嶺部落

トル山合いに入った山間の孤村集落である。養蚕と、わずかな米作を主とする農家が多いが、過疎化の波は激しく昭和四十年三七戸、同五十年、二九戸、五十四年二七戸と減少しており、青年層はほとんど流出している。現在小学校在学児童数は零である。文化三年の戸数、二二戸、人口九八人であったことを考えると、過疎化の波の激しさがわかる。

久保部落の最南端に三保小学校がある。旧山保村山保小学校三保分校であったが、久那土村への編入とともに、学校も久那土小学校三保分校となり、昭和四十五年、独立して三保小学校となったものである。昭和四十年ころには、分校とはいえ、在籍児童数五六名の複式三学級の学校であったが、現在は在籍児童数十名の複式三学級の超小規模学校となっている。

久保の地名は一般的に多く分布しているが、久保は窪に通じ、周囲に比して低地部分につけられる地名である。この場合も、樋田川沿いに家屋があり、他の集落から見ると、まさに窪であるところからつけられたもの

であろう。

望月姓が多く、他に長田、内藤、土橋、保坂がある。

土地台帳による地名

道店、座石、鍛冶屋、安原、新居、寺ノ上、夏作、山王、尾切、沢ノ神、たとう平、たとう、尾切日影、ちかあま、中尾、蛭沢、嵐、大日向、飛山、堂ヶ入、向、向山、中川原、赤林、小石名、御崎、釜石、所島、中村、向山外

久保から川沿いに登ること約三〇〇メートル、左に分岐する道に入つて、つづら折の坂道を標高差約八〇メートル、距離にして約七〇〇メートル登った所の山ふところにある塊村集落が嶺部落である。戸数一四戸、人口六九人の小じんまりした山間農村集落である。文化三年の戸数一二戸、人口六七人から、明治、大正、昭和と、その戸口には大きな変動はなく現在に至っている。

村名の由来について、甲斐国志は「山家村へ一里、山続キ高頂ニ家居ス、嶺或ハ峰ニ作ル、共ニ通用セリ」としている。山頂にある部落という意味でつけられたものである。

こと同様な地形によって「ミネ」と称する部落は南部、身延、富沢、増穂、敷島、足和田、道志、上野原にもあり、同名部落は各所に存在する。

昔から養蚕を主体とした専業農家がほとんどで、副業として製炭業が行われていたが、現在はしいたけ栽培や労務者として農閑期に出かせぎに出ている者が多い。一九七五年農業センサス調によると専業農家一、第一種兼業一二、第二種兼業一となっている。

部落の背面、山頂付近、山腹の南面傾斜を利用した桑園面積は広く、三保地区が久那土地区内最大の養蚕地区であり、嶺はその三保の中で随一の養蚕部落といつてよい。

昭和三十三年の農業センサスによると、一四戸中の一〇戸が養蚕農家、年間掃立て量は一三一箱、年間収繭量三、七七二キログラム、一戸当たり三七七キログラムに当たると。切房木部落の一戸当たり収繭量一二二キログラムの三倍にあたる。

またこれを昭和五十年年度農業センサスと比べてみると（五十年年度統計表には部落別掃立量及び収繭量の統計はないために、桑園面積で比較）昭和三十三年の桑園面積七一〇アールに対し、昭和五十年は一、一八二アールと増加している。これで見ると限り他の集落においては、農業経済規模は年々縮小されているにもかかわらず、嶺においては逆に増加されており、養蚕技術の進歩、機械力の導入などを考えれば総収繭量も、一労働力当たりの収繭量も、三十三年に比べて飛躍的に増加しているものと思われる。

昭和三十九年には、全国農業祭養蚕の部で伊藤尚文氏が養蚕農家日本一として天皇杯を受賞していることを併せ考えれば、またむべなるかなと思う。現在では嶺へ登る道幅も広げられ、自動車による交通の便がはかられるようになり、このような農業規模は労働人口の流出を少なくしている。三保小学校の在籍児童十名のほとんどが嶺部落の子どもで占められている事実はこれを物語っている。

嶺部落には岩崎姓が最も多く、それに伊藤、藤巻、村松、の四姓のみである。

部落の発生が何時ころであるかは定かではないが、真門（当主岩崎真人）の宅地内には庚申が祀られている。庚申信仰は我が国では中世期末から盛んになったことから考えても、また「真門」の地名由来から考えても、その発生は相当古い年代であろうと思われる。なお嶺の大ケヤキなど（所有者岩崎真人）が昭和五十四年四月町の文化財として指定された。

土地台帳による地名

かど、小沢、まつり地、宿の爪、沢入、中塚、間角（真門） 西八保、横手、中平、いもふ、桃ノ木畑、大川、日影、向小沢、貉穴、赤土、川戸

頭、大木林、大峯、丸山、

ウ 堀切（ほつきり）

久保部落から嶺への分岐点を通り抜け、さらに樋田川沿いにのぼると道は川辺をはずれて山腹をよぎって、深い谷間へ入っていく。その途中、久保部落から約八〇メートルで右方、沢すじへ下りるように分岐する道を進んだ所に堀切というより、むしろ窪という感じの地形に塊村集落をつくっているのが、下堀切（沢堀切）の部落である。戸数十二戸、人口四〇人の小集落である。

姓は鷹野と伊藤の二姓のみである。

土地台帳による地名

由木、御堂下、笹本、御崎、釜石、所嶋、中村、堂ヶ入、向、向山、中川原、赤林

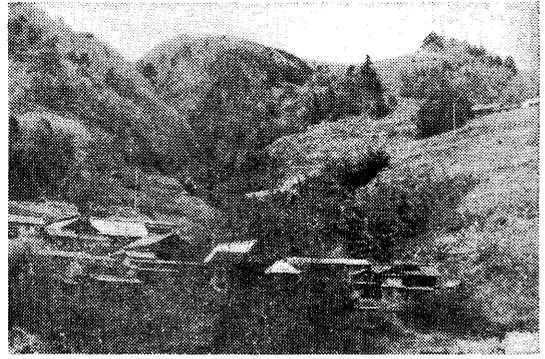
エ 大山（おおやま）

久保部落の南端、三保小学校の下を東へ分岐し、樋田川を渡って山中へ入る道がある。この道を約二キロメートル、標高差三〇〇メートルの急坂を登りつめたところに大山の部落がある。（旧大山村）大山は、この上大山と、この北西、約一〇〇メートル下方の別尾根の中腹にある下大山とからなっている。

現在、戸数は七戸（うち一戸は下大山）人口一七人の山間孤村の小集落である。

文化三年、甲斐国志によれば、「戸数一四戸、人口四七人、久保村ノ東南ニ在リ、北ハ山家村、東ハ大磯小磯村各一里許リ、実ニ大山深谷中ノ孤村ナリ」と記されている。現在戸口は江戸時代の半数となっている状態である。特に下大山の減少（流出）率は大きく、現在ある家屋はほとんど無人家屋と化し、わずかに一戸三人を残すだけとなっている。集落としての機能は完全に消失している。

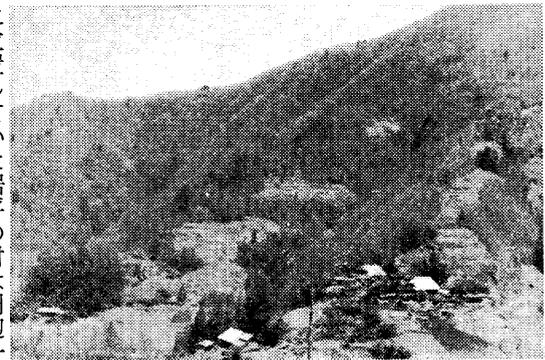
上大山まで登りつめた道路は、小径となつてさらに網掛峠を越えて尾根



堀切の部落



上大山部落



1戸3人を残し他は無人家屋となった下大山

伝いに約四キロメートル、大磯小磯へと通じている。上大山は山頂付近に位置し、海拔三〇〇メートル、目に入る周辺の村々はすべて眼下である。部落は大磯小磯の谷底から吹き上げてくる強風をさけて、北斜面にあり、樋田川に臨んでいる。

江戸時代の石高は一六石五斗であり、一戸平均石高は一・一石とわずかなものであり、生産性は乏しく、村人たちの生計はそのほとんどが山林に依拠していたらうと思われる。

現在は養蚕が多く行われ、生計の主体となっている。農閑期には出かせぎ、行商が行われている。

一九五八(昭三三)年度農業センサスでは、養蚕農家一一戸、収穫量年間二、八〇二キログラム、一戸平均二五四キログラムで、切房木の一九九キログラムより大きく上まわっているが、久保の三二六キロ、嶺の五九二キロ、堀切の三七七キロに比べると低くなっている。桑園面積は、昭和三

に位置していた居平の村は周辺一帯に山津波が起こり、ほとんど全戸が土石流に埋没してしまったという。その後山津波は続き、村人にとっては住みなれた土地ではあるものの、居平での再起は望めないものとして代官所に願ひ出た。被害状況を調査した代官所は東郡境川村、向山という土地へ集団移住するよう指示した。

一時は喜んでみられたものの、住みなれた墳墓の地を離れることは耐え難く、賛成者は一人もなかったという。新たに永住の地を求めて物色し、居平からさほど離れていない現在の地を選んで移住したものだといわれている。なお、居平は古屋敷とも呼んでいる。

大山部落は伊藤、渡辺、赤池の三姓であり、それぞれ姓ごとに大家・新家の關係にある同族集団である。現在、小中学校通学の児童生徒は皆無である。

十三年の三一七アールに対し、五十年は五三二アールと増加している。農家は専業農家四、第一種兼業四となっている。

現在は上大山まで道路が拡張され、自家用車通勤が可能となっている。

上大山の部落は、その発祥の地は今の地ではなく、現在、居平、または古屋敷と呼ばれる場所から移住してきたものであるといわれる。

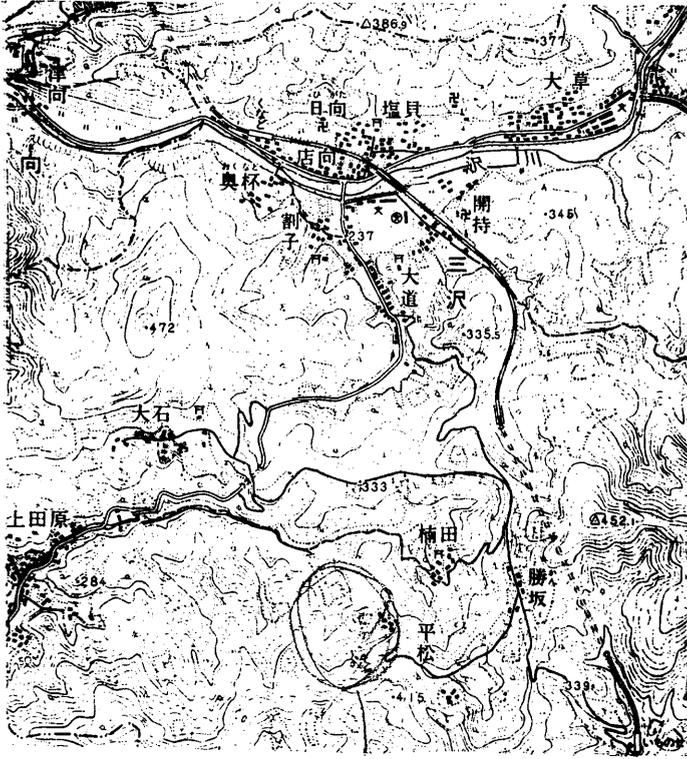
天明の大地震(二〇〇年前)で蛭岳山系の集落からも被害は続出したといわれ、特にきびしい斜面の山肌

土地台帳による地名

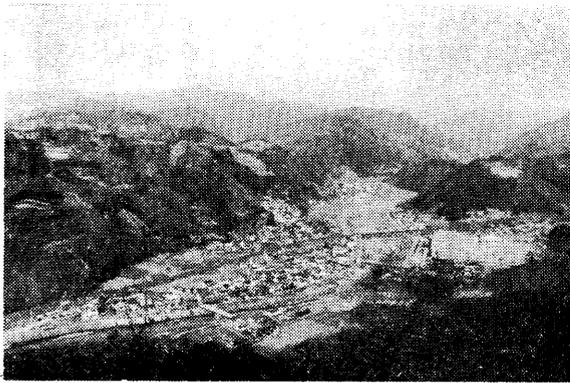
寺ノ下、寺ノ上、居平、蛭沢、尾切日影、尾切日向、門脇、夏作、西ノ神、西ノ沢、高畑、大崩、上川戸、川ふし、安場沢、家ノ向、加久保

(九) 三沢 (みさわ)

三沢川と樋田川は、現在の下部町役場久那土支所前で合流し、三沢川となって、六郷町鴨狩津向を経て富士川に注いでいる。
この合流点から六郷町境までの間の三沢川流域と、三沢川に注ぐ大道



三沢の地図



三沢中心部全景写真

川、開持川の川沿いに発達した集落が三沢 (旧三沢村) である。小字名をもつ集落として大草、塩貝、日向、店向、柿島、開持、割子、大道、奥杯、勝坂、楠田、平松、西久保、蕨平、大石がある。
三沢川は、蛾ヶ岳、大平山の南ろくに源をもち、第三紀層の火山砕屑岩層を浸食して流下してきた三沢川と、蛾ヶ岳の西南ろくに源をもち、第三紀層の断層や節理に沿って南下、流れてきた樋田川とが、合流したもので、大雨の度に多量の土砂を押し流してはん濫したものである。六郷町との境付近は、奥杯山と水溢とがともに相せまって川幅は狭くなり、二つの山が狭間を作っている。そのためその地点から上流三沢地内には、小さいながらも沖積平野を形成している。

この沖積平野上に発達した集落と、三沢川に注ぐ二つの川の沿岸及び、その源流となる山中に発生したいくつかの孤村集落をあわせて三沢村と称した。

甲斐国志、村里の部、三沢村には字名として、次の名があげられている。

- 楠田、大石、貝持、西ヶ窪、奥杯、蕨平、大草、塩貝、柿島、与垂沢、宮平、棚沢

三沢の現在戸数は二九九戸、人口一、一三三人、下部町では常葉に次ぐ大きな部落である。文化三年の戸口は一七三戸、七二三人、石高三八五石、一戸平均石高は二・三石となり、岩間組二十か村の中では岩間村につぐ大村であった。

地名のおこりは二説あって、いずれがそれであるかはわからないが、いずれにせよ三つの流れが合流するところから、三沢と名付けられたこ

とは確かであろう。

また、この村及び近隣諸村を支配した豪族、三沢藤次入道の名から三沢村と称したという説もあるが、これとて人名が先か、地名が先かの問題もあり、定かではない。

甲斐国志、村里の部には、「大磯川（車田川トモ云）種田川（即チ久保川）鍛冶屋沢（南方ノ一溪ヲ云）三溪合流スル処アリ、蓋シ村名ノ所^レ因^レナリ」とあり、大正五年の取調書には「三沢村名の伝説に、三沢川の南岸に大道沢、カイモチ沢、カヂヤ沢のあるをもって村名とせられしとぞ。」とある。往古三沢村の中心部は、地形や小字地名からして、大草よりも、割子、塩貝、日向、あたりと考えられ、そのことからしても、後者の説の方が納得がいく。

旧久那土村、あるいは旧下部町が、水田耕作地帯の集村集落、街道ぞいの列村、路村集落、山中の孤村、疎村集落など多様な集落をもって、一村を形成していたように、三沢の中には、沖積平野に位置する集村集落、街道ぞいの列村集落、路村集落、山中の孤村集落と多様な集落形態をもっており、典型的な山村の一村形態をつくっている。

往古、三沢藤次入道（一二三五年）なる人物が豪族として、この一帯を支配したことは甲斐国志、士庶の部によっても明らかであるが、その居址は現在のどこであるかはつまびらかではない。同国志、古跡の部にはこのことを次のように記してある。

「三沢氏の居址、三沢村、三沢氏ノ事ハ士庶ノ部ニ記ス、居址未ダ審ナラズ 本村ニ久那土ト云フ叢戸アリ、クナドハ岐レ道ノ事ヲ云フ 此処ハ杉山ノ方ヘ分ルル岐ナリ、里人今ハ奥抔トモ唱フ 毎事ニ阿ノ字ヲ多ク用ユルハ此国ノ方言ナリ 斯ル寒郷ニモ古語伝ハリ珍ラシキ地名ナリ」と。

三沢氏以前にどのような豪族がいたかは定かではないが、村の発生は相当古いものであろう。

このことについて、現在の鉄道、道路、学校などの現代的公共施設を略して当時の小集落名、小字地名と、およその地形図を再現して地形、及び各

第二章 下部町の集落

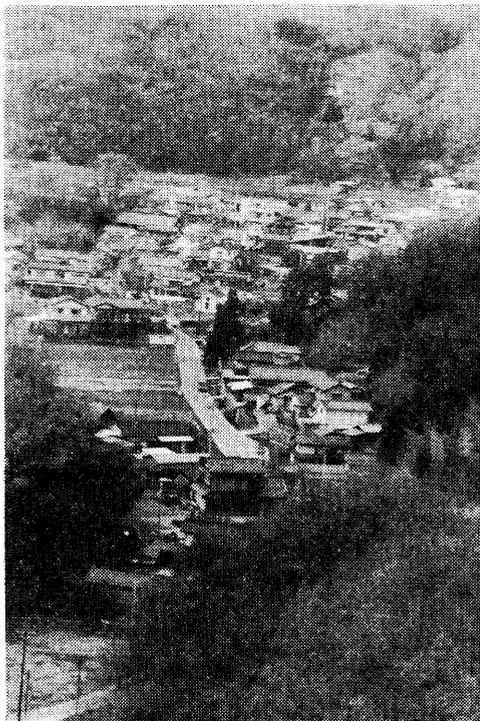
地名とを関連づけてみると、何れの地名も地形や四囲の状況と合致して、まことに興味深いものがある。

農村集落の各地には、カイトまたはケートと称する地名や屋号が多い「峡南の郷土」地名特集には、身延の地名の例として、ウエノケート オキノケート ジョウドケート ナカケートなどほか十指に余る例をあげている 広辞苑には、かいと（垣内）カキツの転、一、居所の垣の内、垣根の中、二、畑や田にすることを予定して囲った一区画の土地、豪族の所有地や小部落をも意味した。またある辞書には「かいち（垣内の意）垣戸、貝戸、海道、開土、とも書き、かいち、こうち、かくち、などともいう」とある。さらに民俗学辞典によれば

「垣間の名称は少なくとも国の三分の一の地域で知られ、ケート、ゲート、カイチ、など土地によって多少なままって呼ばれる。

ある村では小部落を、ある村では水田、草地、畑の一区画を、ある村では屋敷のことを呼んでいる。」

とある。これらケート、ゲート、カイチは、その場所により、他のことを冠したり、語尾につけたりして呼ばれるようである。



大道割子部落

このことと塩貝、開持、柿島とを関連づけて考えてみるのも、考察上の一観点であろうか。

塩貝には付近の沢から、鉾泉の湧き出た泉もなければ、そのような言い伝えもない。昔は「シオケー」と呼称されていたし、開持も「ケーモチ」であった。柿島の柿は、柿であったのか垣であったのか、川瀬による堆積地を島の名で呼ぶことは各地にある。

また「横回し」「横まくり」「横まくら」などの地名は、開墾地を地割りする時に幹線と平行して割れない部分、すなわち他の大部分の耕地の地割り線に対して、直角に地割りした部分につけられた地名であるといわれている。塩貝地内には、この地名がある。

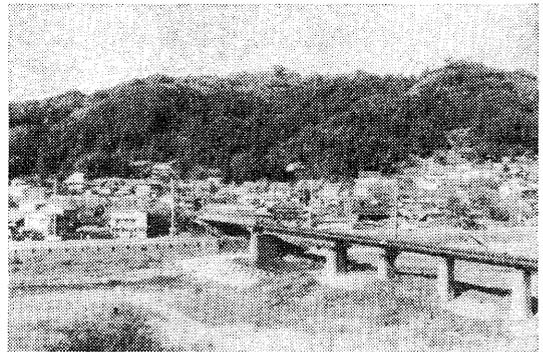
天沢という所があるが、これは三沢川の川瀬が直接ぶつかる台地状の突起部につけられた地名である。川瀬がぶつかる北面は岩壁の断崖となっており、背面は堀割状の狭間となっていて、あたかも、自然の城塞状を呈している。然もその下の地名が「矢の花」である。またこの対岸、伝水山の



大 草 部 落

ふもと西林の西には「矢の沢」がある。矢の字のつく地名は久那土地区の中で、この二地名だけである。更さらに天沢の南が「割子」であり、ここはあたかも人為的に作った狭間の形を呈している。いわゆる堀切の状態である。割子の奥から流れ出る無名の沢は、屈曲して大道川に注いでいる。

天沢、矢ノ花の東一帯は「田中」の水田地帯である。(現在の峽南高校及びそのグラウンド)その南の小高い山は「向山」である。何に對しての向いか、理解しがたい。



日向・塩貝部落



店向の商店街

さらに三沢の東の端は川幅も広く、ここは「大草」と呼ばれている。このように考えてみると、当時の三沢村を支配した豪族と、当時の村のようすがさまざまに想像されてくる。

現在の三沢地内(大草)はその東端、車田、樋田と接する所に、役場、久那土支所、久那土小学校、同中学校、久那土保育所が置かれ、教育、行政の中心地となっている。

日向地区内には十五所神社がまつられており、三沢の氏神であり、久那土村時代は神饌幣帛指定村社であった。

三沢の西端、鴨狩津向に近い所には国鉄身延線、久那土駅がおかれ、久那土地区、古閑地区への交通上の玄関口となっている。大正十三年、停車場設置決定に当たって久那土村では村民大会を開き、敷地と一金貳万円也の寄附を決定している。

駅設置後、駅前通りは急速に発展し日向、開持、奥杯、割子、大道、大

石、田原などからここに移住し、店舗をかまえる者が多く、ここに新しい街村集落が生まれた。以後店向と呼ばれ、人口集中度は急速に高まった。現在も久那土地の商店街の性格をみせている。したがって店向には三沢各小字地区に特徴的にある姓が集まっている。

久那土駅から徒歩で五分、三沢川南岸の沖積平野である田中地内に、峡南高等学校がある。旧県立峡南農工学校であり、現在久那土中学校のおかれている所にあつたものを、ここに移転したものである。この学校は大正十二年、久那土村外七か村組合立として開校以来今日まで、久那土村はもちろん、近隣諸村の人材育成に大きな力となつてきた。

県道割子中富線は、大道川が三沢川に注ぐ地点で、通称西八代縦貫道といわれる県道市川大門下部身延線から三沢橋を渡つて分岐し、上田原、中富町の下田原を通り、富士川を渡つて切石において国道五二号線に接続している。大道川のこの道路に沿つて、小さいながらも路村形態をとる大道部落がある。大道部落のはずれを左に山中へ入る道があるが、この道は今も県道となり主要道路となつているが、往古は三沢山を登り勝坂峠を越えて、市之瀬へ出て常葉へ通ずる往還であつた。従つて割子からのこの道は、当時としては幹線道路に等しいまさに大道であつたろうと思われる。大道川には今もなおお柝代橋がかかつており、使用はしていないが昔の名ごりをとどめている。

分岐した道路を三沢山（向山）に登ると、大道から約一・三キロメートル、標高差約一七〇メートル登りつめた所、峠の頂上に勝坂部落がある。甲斐国志に言う神ン坂である。武田信玄戦勝の伝説が残っている。勝坂の地名は、この伝説によるものか、または甲斐国志に言う神ン坂として、別の由来にもとづくものなのかはつまびらかではない。武田勢が今川勢を打ち破つた地である。というところから勝坂というようになったという口碑が地元では一般的である。この地藏尊は路傍に祀られていたが、武田軍を勝利に導いたということから、御堂を建て厚く堂内に祀られたという。地藏尊の御利厄が余りにもあらたかであつたので灯ろうや手水などが奉納

された。御堂の正面はもちろん至る所に武田菱が使用されていたという。勝坂へ至る手前、道は分岐して右下方に下るが約三〇〇メートル、標高差五〇メートルを一気に下つた所に楠田の部落がある。姓は小松、高野、小林であり、同族集団と思われる。楠（クスノキ）が地名に関係すると思われる。

勝坂峠で本道は三沢山（向山）の南斜面を市之瀬へ下るが、峠頂上で右にやや平坦な尾根道が分岐する。これを約三〇〇メートルたると左下方に平松の集落がある。

地名のいわれについては明らかではないが、平松一帯は土壌が赤土で昔から松が多かつたといわれる。平松部落の背後北面は長い尾根筋であり、楠田側からは常時強い風が吹き上げてくる。そのためここに自生する松はことごとく南側に屈曲していたという。

平松へ下らずにそのまま直進すると道は谷間の窪地へ下りていく。ここに西久保の集落がある。

勝坂、平松に対して最も西に位置し、しかも低地であるところから、この名が生まれたという。

勝坂、平松、楠田、西ヶ窪、四部落を総称して十組、または登組と称している。これは三沢の各部落を組とし、便宜上、一組から十組までとしたとき、この四部落をまとめて第十組としたもので、その位置が、三沢の最高標高地帯にあるところから「十」を「登」とするようになったものである。現在は登組として通称されている。

この登組、各部落の現在戸数は勝坂が六戸、西ヶ窪零戸、平松は四戸、楠田八戸であり、典型的な孤村集落である。

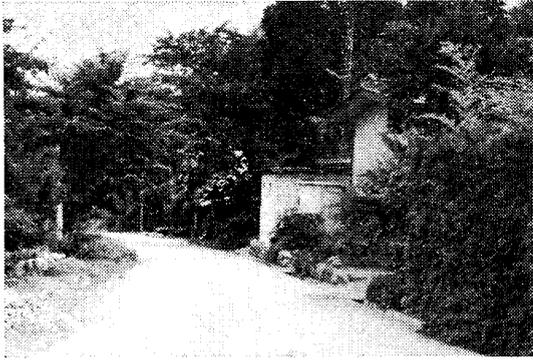
西ヶ窪はかつては五戸を数えたが、現在は無人部落となつている。かつては林産経営、製炭業などの第一種兼業農家であつたが、現在は養蚕と畑作の第二種兼業農家で、職人、勤め人がほとんどである。

開持の東、塩貝の対岸、はん濫原野の開墾地を思わせる地形の場所に柿島の部落がある。

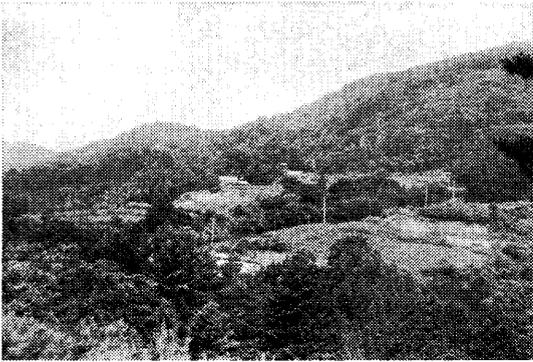
柿の木が多く植えられていることは確かであり、はん濫原野特有の砂礫壤土は柿の栽植には最適であるが、果たして地名がここから来たものか、それとも前述したように柿が垣の転じたものかはわからない。

この柿島地区に町営住宅がある。二〇戸の住宅であるが、現在入居者は二〇世帯、一〇〇パーセントの入居率である。入居者のほとんどが青壮年労働年齢層で、過疎化の進む中で貴重な存在となっている。

現在、西八代縦貫道路が、車田地内から下部トンネルを抜けて北川へ通じ国道三〇〇号線に接続しているが、この下部トンネルの上方に蕨平の集落がある。集落とはいっても現在は二戸、往時も四戸という小集落の孤村である。現在ここへの交通は縦貫道路の県道によっているが、縦貫道路開通前は三沢、開持部落を通り抜け、開持部落の奥、棚沢を登り、南斜面を横すじに登っていく道が交通路であった。この道は蕨平の峠をこえて丸畑へ入り、横手、北川へと下る道と、丸畑から古関へ下る道とに分岐して、



勝坂の峠道



大石部落

ともに常葉川沿いへ出る道であった。

蕨平の集落は昔は棚沢にあったという。度重なる水害のために、わらびのよく出る、南面緩傾斜地であり、泉もある蕨平へ移住してきたということである。いつころのことかは、異説もあつて定かではない。

道は大道から大石トンネルを抜けて上田原へ通ずるが、トンネルの手前を途中分岐して右方へ上ると大石の部落がある。標高三〇〇メートル、城山の中腹にある塊村集落である。周囲に開けた畑を多くもつ農村集落であったが、現在は一一戸、人口二七人となっている。ほとんどが第二種兼業農家であり勤め人、職人が多い。

大石の地名は、文献がないために明確にはわからないが、古老の話によると、この附近一帯の緩斜面、集落内に、大きな岩塊が多く存在したところからつけられた名前であるという。今は片づけたり、砕いて利用したりして、鳩久保地内に多少残っているということである。

部落の発生は古く、系図及び墓石などで六百年前まではさかのぼれるが、それ以前は不明ということである。

大石部落は桐戸姓が最も多く、ついで上田である。両者ともそれぞれ同族集団からなっている。

集落が同族集団で形成されたであろうことは、現在の小字集落に特徴的な姓が集まっていることからもうかがわれる。

大石 桐戸 上田 大原、奥杯 今村 遠藤、登組 高野 小松 今村 小林、日向 深沢 上田、大道 保坂 上田 深沢 渡辺、塩貝 上田 伊藤 鈴木、割子 深沢 保坂 望月、開持 上田 深沢、大草 上田 丹沢 望月、柿島 小池 上畑、蕨平 上田 磯野

三沢は前述したように、往時は久那土地区内で最大の水田面積をもつ農村集落であった。村石高も高く、馬の飼育数も近隣最高であった。しかし社会構造の変化、鉄道の開通、道路の発達から、三沢の産業構造も大きく変わり、現在は専業農家は皆無に等しい。人口も増加し、農地は次々と宅地化していった。平均耕作反別の減少もさることながら、交通上の便は商

店街を作り、勤め人を増やし、大きな構造変化をもたらした。

現在は印刷、商業、土木、建築関係職人、公務員、勤め人と多様な職業構成となっている。製材工場も二工場ある。

大石トンネルを田原口へ出て、左下、田原川の源流になる沢に、段西がある。ここには硫黄泉がある。昭和初年から中期までこの鉱泉を利用して段西温泉があり、農閑期、附近一帯の農民の憩いの場であった。特に皮膚病に効能があり、少数ながらも客が絶えなかったが、現在はその跡を残すのみとなっている。この鉱泉は、西八代層群を三沢断層線が切る線上にあり、切房木鉱泉と同系列のものと思われる。

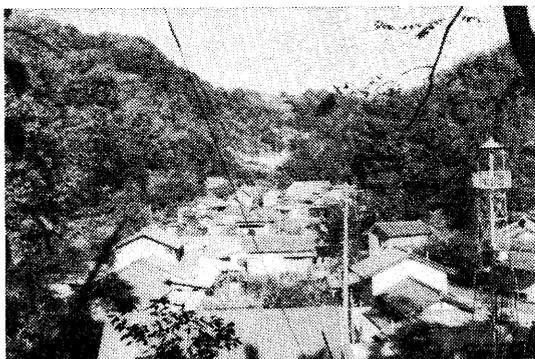
また大石トンネル大石口、下方の沢がれには、通称「ジャカ石」または「ジャガ石」と呼ばれる小豆大から、ビー玉大の球形の鉱石がでる。含有鉱物は何であるか不明であるが、割れ口、虎目石のような砂状の光沢をおびている

土地台帳による地名

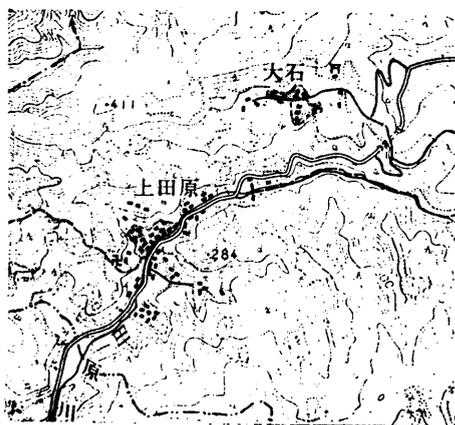
(開持、大道、日向、塩貝、大草地内)

馬飼 石峯 花柄沢 暮谷沢 仲平 蟹原 大林 打越 田ノ入 休場
水穴 向山 蕨平 麩沢 菅沢 桐久保 日向林 開持 伝水 柿島 日
向 宮ノ前 宮ノ前西田 宮ノ上 上ノ山 横廻 塩貝 西伝水 大草家
ノ前 大草山ノ神 大草上ノ山 大草 大草平 大草向 鬼島
(登録、大石、割子、大道、奥杯、日向地内)
杓子沢 大石沢 地藏原 段西 鳶巣 有東坂 日陰林 楠田平 楠田
西久保 大木窪 入道窪 平松 平松家の下 平松家の上 萩平 地藏沢
菅ノ沢 仲尾羽根 梅沢 大石 鳩久保 立石 湯ノ沢 尾山沢 海老沢
桃ヶ窪 川越石 塩沢 月夜川 大道 蓼ノ沢 代ノ田 細田 割子入
割子 矢ノ花 天沢 奥杯 仲塚 下河原 西田 西林 矢ノ沢 水溢
大畠

(5) 上田原 (かみたんばら)



上田原の部落



上田原

三沢の大道から大石トンネルを抜けて、峠を下ると、上田原の部落へ出る、旧共和村、上田原である。旧幕時代は下田原、一色、宮木、四か村で田原組をつくり、岩間組ほか六組とともに市川代官所の所轄であった。

明治八年、前記四か村が合併して共和村となり、その後、昭和三十一年下部町、古関村、久那土村と対等合併をし、下部町となり、いわゆる共和地区となった。昭和三十三年、宮木と下田原が分町して中富町に編入したために、一色は下部地区として、上田原は久那土地区として、通称されるようになった。

旧幕時代の戸口は六一戸、二七八人、村石高九五石であった。一戸平均石高一・六石となる東河内領ではごく平均的な村であった。現在戸数は五二戸、人口一八六人であり、江戸時代より少なくなっている。

三沢地区内の地藏沢を源流とする田原川は「宮ノ入沢、東入沢、御崎所、入道沢南山ヨリ出ツ、道ガ入

沢、入沢、清水沢、戸木ノ沢、桜沢等、北山ヨリ出ヅ、以上皆ナ田ノ原川ニ入ル」と甲斐国志、山川の部にあるように多くの谷川を集めて、富士川に注いでいる。富士川の沿岸に入江のように田原川沿いに開けた平地は、出水のたびに田原川の水流が富士川本流にせきとめられ、多量の土砂を堆積した小さいながらも沖積平野とみることができよう。この沖積平野と、上流の河岸段丘に発生した集落が田原であり、入沢にかかる道切橋を境に上を上田原、下を下田原という。

「地名の研究」には「田原とは壘田の意で原は墾治など開墾の古語」としている。古語辞典によれば「壘る」は開墾する、田や池を新しくつくる。」とある。

村の発生は、残されている口碑伝承の多彩さからいっても相当古いものと思われる。この流域一帯を支配した豪族もいたと思われる。

入り沢沿い、東光山、永明院には、当院の開基者だといわれる武田伊賀守の墓地がある。また開基者のものだとされる供養碑もある。これに刻まれた年月は天正六年一月一日と読める。

口碑伝承であり、文献資料ではないが、武田伊賀守の祖先は甲斐源氏の一族であり、武田氏の末流と伝えられている。如何なる経過を経て田原へ入ってきたかはつまびらかではないが、永正年間（一五〇四）から、田原流域の領主であったと伝えられる。

上田原地区は、西八代層群を切る大石断層線上にあり、そのためにか、往古幾か所も鉱泉が湧出した。甲斐国志、山川の部にも「温泉二カ所 一は御所ノ入 一ハ田ノ西ニ在リ、又村民ノ宅地ニ塩井あり、下品ニシテ奈良田村ニ湧ク比ニ非ズ」とある。また、宮ノ前附近からお金山周辺一帯は湧水が多くあるが、いずれも鉄分が強く、飲用には適さなかったという。入沢附近にも「シブの湯」という鉱泉が湧いていたと伝えられ、そのために入沢は小魚一匹住まなかったという。

農業集落とはいふものの、昭和五十年の農業センサスによれば、専業農家は七戸であり、他はすべて第二種兼業農家である。三沢同様、勤め人、

職人が多い。

上田原には大原、原田、佐野、二宮の姓が多く、小松、奥野、高野、小林、相沢、清田、渡辺の姓もある。

共和村当時、下田原に置かれていた共和小学校、同中学校は合併と共に下部町立となったが、下田原、宮木が分町後は同中学校は廃校となり久那土中学校へ、小学校は久那土小学校上田原分校となつて四年以下の児童が通学していた。その後、久那土小学校へ統合されたので分校は廃校となった。

土地台帳による地名

入道、村東、大日向、田中、東入、大津加、宮ノ前、前坂、桜田、孫田、清水久保、中村、天久保、入沢、道ケ入、海老沢、杉平、西山

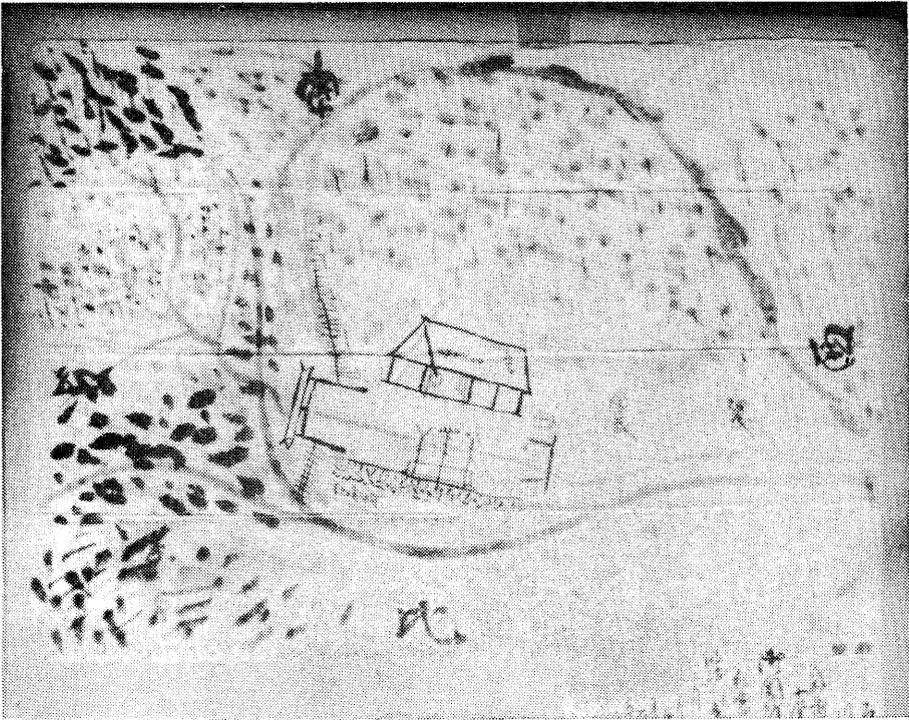
(三) 古関地区

反木川と常葉川及び常葉川の支流、釜額川の三川の流域と三沢川の上流に点在する集落が古関地区（旧古関村）である。往古には富里、久那土と同様、八代郡川合郷に属し、旧幕時代には東河内領となったが、その地域は大磯小磯、根子、瀬戸、古関、中之倉、釜額の六か村であった。その後、明治五年、大磯小磯、根子、瀬戸の三か村は八代郡十三区に、古関、中之倉、釜額は八代郡十四区に編入、明治九年には六か村が共に第二十区に編入された。

ついで町村制の施行とともに、明治二十二年に六か村が合併して、往古の関所にちなんで古関村と改めた。昭和二十九年、三珠町誕生の際、下九一色村のうち、折門と八坂の二地区が下九一色村から分離し、古関村に編入した。

昭和三十一年九月、下部町、古関村、久那土村、共和村と合併し、新下部町となり、古関地区となったものである。中心集落である古関部落に役場支所がおかれている。

古関から長坂峠を越え、本栖湖畔、竜ヶ岳のふもとを回って根原へ出る古



関所の絵図面

地区の中心部落である。

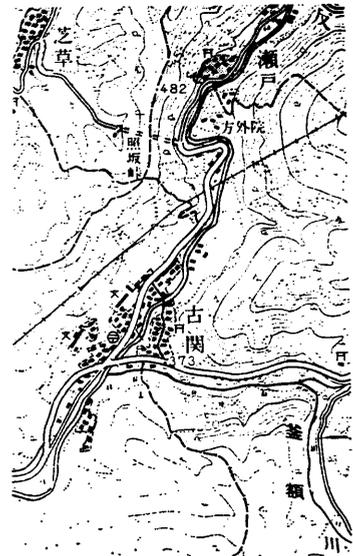
旧幕時代、文化三年の戸口は一〇五戸、四二八人であり、現在はずかしながらもこれを下まわっている。明治、大正、昭和と、社会一般的にみられる人口増加係数を考えてみると、近年急激に人口減少が進んだ過疎現象の激しい地域であるといえることができる。

人口過疎化の現象は、同時に人口の年齢構成の高年齢化現象を伴い、ここ十年ばかりの間の小学校在学児童数の減少率は非常に大きい。

もともとの農業集落であるが、耕地の立地条件から経営面積は少なく専業農家はわずかである。一、九五八年の農業センサスでは農家数七九戸、そのうち専業農家は九戸にすぎず、他は第一種兼業農家三一戸、第二種兼業農家三九戸となっている。

これも時代の変遷とともに変わり、一、九七五年農業センサスによれば、農家数は六〇戸に減り、専業農家は七戸、第一種兼業農家四戸、第二種兼業農家四九戸となっている。

古関の部落の発生は古く、三宮司平では学校工事現場から土器が出た事実もある。中世には古来交通の要所として、すでに政治的にも重要な集落となっていた。



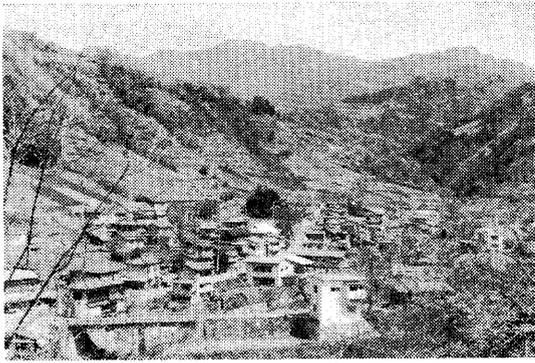
古関部落

秋山氏（甲西町）が常葉の在に移住してきて常葉氏として一帯を支配したように、戦国のころ、若狭玄蕃守がこの地に移住してきて、山合いの村々を次々と掌握していったと伝えられている。

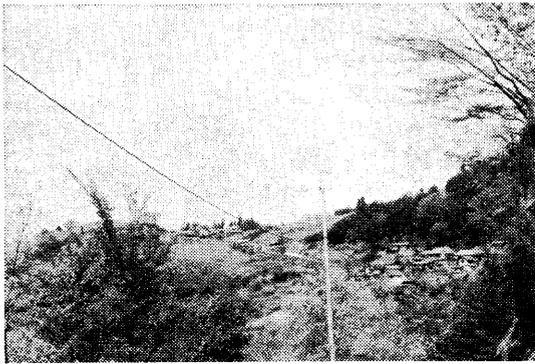
館跡だったと伝えられる付近には、往時を偲ばせるにふさわしい地名や呼び名が土地言葉になまって数多く伝えられている。

館の最もそばにあったと思われるつぼんち（坪内Ⅱ庭園）弓矢の練習場であったまつば（的場）馬の調練場であったろうばんば（馬場）器具その他の物の処理場が想像されるアレー（洗場）館の背面から迫る裏山の中腹の村が一望にできる場所にはセーラ（声懸）と呼んでいる所もある。また犬石の伝説にまつわる休場、作事奉行の居宅であったといわれる三宮司平、渡り鳥をとった網掛など、地名、場所名にまつわる話題も多い。

古関地区は全体的に渡辺、赤池、伊藤の姓が多いが、古関部落も、伊藤、渡辺、土橋、若狭の四姓が多くそれに田中、内藤、赤池とつづき、ほ



古 関 部 落



古関部落丸畑地区

かに伊東、寺下、長持の姓がある。

土地台帳による地名

下日向、下日影、大日向、見根石、一宮、てしろおばね、竹ノ下、壁ノ尾、家ノ前、大下、うとう窪、北川境、屋敷平、峠、田ノ上、天社古、大境、大川、砂原、休場、前田、北畑、上平、三宮司平、中ノ沢、向田、三堂平、土橋、富士島、宮ノ平、馬場平、土肥平、照坂、神明、夏作、道珍林、八坂、網掛、上都留根、法山、姥ヶ沢、ごうし窪、中ノ沢山、丸子、三堂林、土橋林、沢戸林、沢ノ戸、長坂

(二) 瀬戸

古関から反木川沿いに走る県道を北にすすむと、川も道も大きく左カーブしている。道は照坂トンネルの入り口で右折し瀬戸の部落をすぎ、本栖の水を落として発電している日軽金の無人発電所の近くを通り、根子の部落、さらに上流の沢部落へ、そして反木川の源流点にある三つ沢の部落へと続いている。

照坂トンネル入り口附近と、右折して川の左右両側の山腹に、また道の右側下段の河岸段丘におよそ四か所にわかれて、点在する小塊村集落が瀬戸（旧瀬戸村）の部落である。

現在戸数は三二戸、人口八六人の小集落である。やはり過疎化が進んだ部落であり、年齢構成も高齢化し、若者の姿は見えない。季節的に無人家屋もある。旧幕時代の戸口は三〇戸、一四二人、村石高は五四石三斗八升二合であった。

瀬戸の地名については、甲斐国志、村里の部には「古関村ノ東北、十二町、中ノ倉村ノ西北ニ当ル、是ヨリ根子村へ一里許リ、本村蓋シ瀬戸川水行ノ事ニ因リテ名ヲ得ル」と記せられている。

反木川の川瀬が瀬戸部落の上流で川幅がせまく、川は急流となり、道は迫った山ぎわを川とともに屈曲してつけられ、また照坂峠付近で大きく右

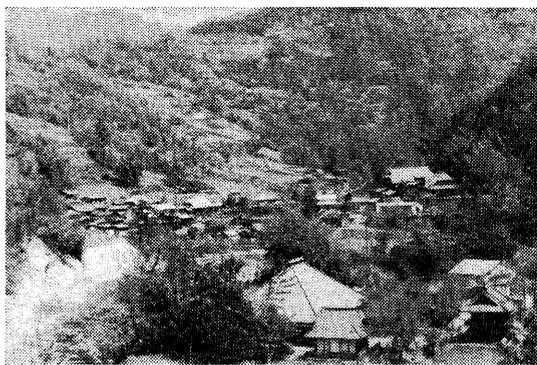
に左に屈曲していたところからつけられた名であろうと思われる。「地名の研究」では、瀬戸とは一般的に狭い通路または水路の呼び名であるとされている。

照坂トンネルが反木川（瀬戸川）と接する対岸にある竜湖山方外院は曹洞宗南明寺の末寺で開山は北朝貞治元（一三六二）年の名刹である

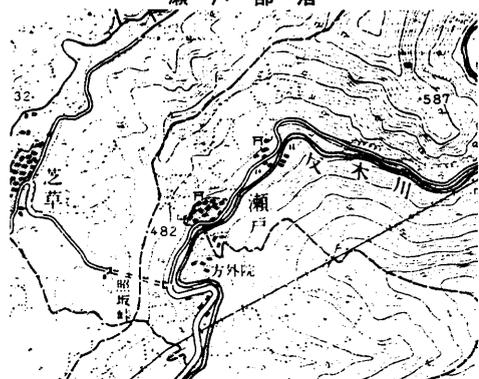
瀬戸も、むかしからの農業集落であるが、やはり専業農家は少なく、昭和三十年代農家戸数三四戸、うち専業農家二戸、ほかは第一種兼業農家一戸、第二種兼業農家二戸となっている。それが一、九七五年農業センサスによると、農家戸数二三戸、うち専業六戸、第一種兼業農家四戸、第二種兼業農家一三戸と変化している。

現在ほとんどは勤め人、労務者、職人で耕地の狭小、立地条件の劣悪から、農業は自家消費型農業である。

瀬戸部落は渡辺、赤池の二姓がほとんどで、ほか松井姓が一戸あるのみ



瀬戸部落



瀬戸の部落地図

である。

土地台帳による地名

日向川原、家ノ前、家ノ下、家ノ上、寺の前、寺中、上ノ屋敷、日影ノ下、白子、峠、八曾根、根木地、夏作、伊勢山、山口、日向山、谷笠、極無、中川原、押出、日影、枋沢、下横道、横道、久保、角畑、李木、登立、狐穴、山中、千足、橋ノ上

(三) 根子（ねっこ）

瀬戸から道はさらに反木川沿いに続いている。瀬戸の部落を通り抜け、照坂より二・三キロで根子の部落に出る。（旧根子村である）

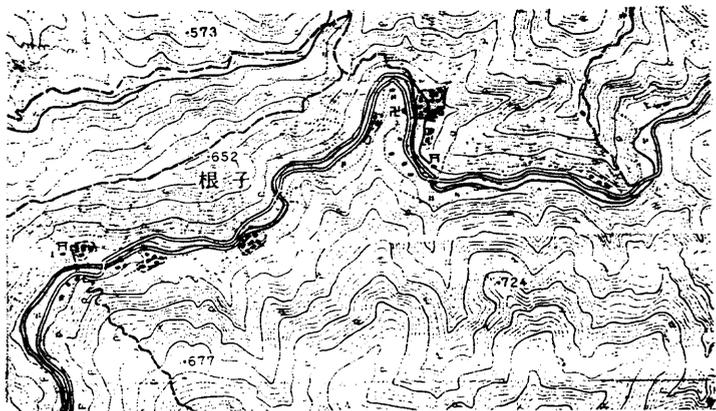
反木川がつくった河岸段丘にいくつかの小塊村集落を集めた下部随一の細長い集落である。反木川もこの辺りに来ると標高も高くなり、根子部落の平均標高は海拔四五〇メートルである。

甲斐国志、村里の部には「根子村は上下二組、石高四四石五斗七升五合、戸五二、口二六七、馬五、東西一里二町（四三〇メートル）瀬戸村ヨリ中郡筋、折門村ノ山続き、大磯小磯村ニ界ス、根ノ言ハ峯ナリ、村名の因ル所、乱峯ノ間ニ在リ、東河内東北の極ニシテ、最モ高キ地ナリ」とある。一戸当たりの平均石高は〇・八五石で山間の寒村であった。

昭和四十年には七〇戸、三六五人を数えたが、現在は六三戸、二一四人と減少し、やはり過疎化が激しく進んだ集落の一つである。

根子の小集落は、下流から下組、日陰、音無、中村と反木川に沿う道路沿いに小塊村集落が続き、さらに上流に、五軒家、二軒家と孤村集落が点在する。村の中ほどで沖ノ山の峰つづきが大きくはり出して反木川をさえぎり、そのために川も道も大きくう回している。この峯つづきの突端に根子銅山跡がある。

また、このはり出しの丘状の頂上に古関小学校根子分校が置かれていた。昭和三十八年には一学級ながら児童数三二名の児童が在籍していた



根子の部落地図

が、昭和四十八年にはわずかに六名と減少し、磯分校、折八分校とともに閉鎖され、廃校となっている。

根子銅山を始めたのは美濃の国の任人、赤堀重太郎という金掘りだということである。満福寺の境内が一番坑だったといわれるが、元和年間最盛期には人家も一〇〇軒を超え、坑道も反木川を越えて川向こうの中村の部落まで達していたという。しかし湧水が激しく、そのために多数の村人をみちづれに大惨事が起こり、山は壊滅した。多くの人命を失ったこと、当時の技術としては湧水を止めることが不可能であったことから、

上が赤池である。根子の姓を名乗る家はない。甲斐国志の校者は「古関村を中心として赤池を姓とする者多し、赤地、赤池相通じ用ひしものならん」と注釈している。しかし、明治三年九月に、平民が名字を名のるのを許され、明治五年の壬申戸籍のときに姓名を届けさせられた時、地名による姓は許可されなかったため、根子を赤池とし、その同族集団及び被官百姓その他同系列をすべて赤池としたという説もある。小林姓は甲斐国志に見える小林小六なる者の子孫、同族集団及びそのゆかりの者の流れをくむものであろう。

根子下村諏訪神社のすぐ脇には、江戸末期学問所があったとされる跡がある。寺子屋跡であろう。明治のはじめころまで開かれていたということである。今この跡には珍しい筆塚の碑がある。

この寺子屋を開いた人は、愛知県海東郡大雪村滝川の在に文化一一年に出生した人で、なぜか次男に任せて家を出、禅宗の僧侶となり、この村に

再掘をあきらめ、銅山から得たすべてを投じて自ら開基者となつて、この地に曹洞宗、銅根山満福寺を建立し、犠牲者の菩提をとむらつたということである。元和七（一六二一）年のことである。近年になって再び採掘されたが現在は廃坑となっている。坑道の入り口は今も不気味な口をあけ、ベルトコンベアもさびつき、朽ちはたてたまま放置されている。

（根子弾丘については第十三編第一章を参照）

現在根子部落は山口の姓を名乗る家が二戸の外は赤池、小林で、七割以



根子中村



根子下村

入ってきた人だとのことである。明治十一年に没したが、それまで近隣の子弟を教え、あたたかい子弟愛を保っていたという、筆塚も寺子屋跡に当時の筆子たちが記念の碑として建てたものである。

この筆塚の碑の隣りに墓地があるが、その墓地の中にこの僧侶の墓石も並んでいる。オゼンの台石にトックリの塔身、その上にサカズキをさかさにかぶせ、サカズキの糸尻の上には筆の穂先が立っているという珍しい墓石である。村の古老の話によればまだ僧侶が元気だったころ、自分の亡きのちに、もし石碑を建ててくれるならば、このようにと約束したものを、教え子たちが果たしてやったということである。

土地台帳による地名

大森、下夏作、峯坂、中川原、猪畑、馬門、石塔、山伏屋敷、坂額、金山、茶道下、松葉、夏作り、根通り、根通り向、蔵屋敷、南坂、野土、沖ノ山、北原山、赤沢

(四) 折門（おりかど）

反木川沿いの道をさらに上って、照坂より七・二キロの所に道路に沿って数軒の家屋が並ぶ小集落がある。ここが折門の入り口「沢」の部落である。

沢部落の入り口に折八公民館があるが、折八とは折門と八坂の合同名である。沢部落から反木川を離れ、左側に草深い細道がつづれ折に太平山、折門峠へ坂が続いている。この道を登ること里程八〇〇メートル、標高差二五〇メートルのところ、御弟子の部落があり、さらに山の中腹を西に一・二キロ入ると上折門その下方里程三〇〇メートルに下折門の部落がある。これらの沢、御弟子、上折門、下折門の四つの疎村部落が折門部落（旧折門村）である。

上折門は蛾ヶ岳と釈迦岳とを結ぶ稜線のやや下、標高九〇〇メートルに位置する部落で、精進、本栖の集落に匹敵する高さである。

折門村は、江戸前期においては九一色郷、高萩村の枝村であったが、中

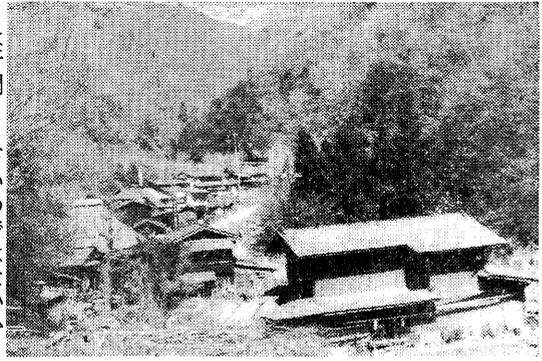


流筆真迫大和尚の墓石

期、元禄年間、分村して独立し折門村となった。明治二十二年、九一色村が上下に分かれた際、下九一色村に属し、さらに昭和二十九年古関村に分村合併、三十一年、町村合併によって下部町となったものである。折門、八坂は蛾ヶ岳、釈迦ヶ岳の稜線を分水嶺として九一色郷の中では東河内領に面している特殊な立地にあった村である。

現在は御弟子七戸、沢五戸、人口はあわせて二九人、折門は上下とも無人集落である。旧幕時代文化三年の戸口は二四戸、一〇〇人、馬三、鑑札十五枚、石高二六石三斗九升二合である。甲斐国志には「一ニ折角ニ作ル、慶長郷村帳ニ御弟子村トアリ、高萩ノ南、一嶺ヲ隔ツ、上下二里、河内領根子村へ一里、東ニ八坂村へ一里、各々ニ坂路アリ」と記せられており、地名の由来は定かではない。

御弟子の部落には折門と八坂、沢の子ども達が就学した古関小学校折八分校があった。折門、八坂両部落の頭文字をとって折八分校と称したが、これから、両部落をまとめて折八と呼称するようになったということである。



沢 部 落

上折門、下折門はかつては一八戸を数えていたが、各所に分散移住し、残った村人も昭和四十五（一九七〇）年三月拳村離村し、現在は完全な無人部落化してしまった。

八坂は武士の村、折門、御弟子は坊主の村という昔話があるが、御弟子村の地名はオデシとも書き、この村にはじめ年の若い坊さんがきた。年は若い、ある身分の高い和尚様の御弟子さんであったところからミデシの村と呼ぶようになったということである。慶長郷村帳には御弟子村とあるところから、人々の住みつきは折門より古いのではないかと思われる。

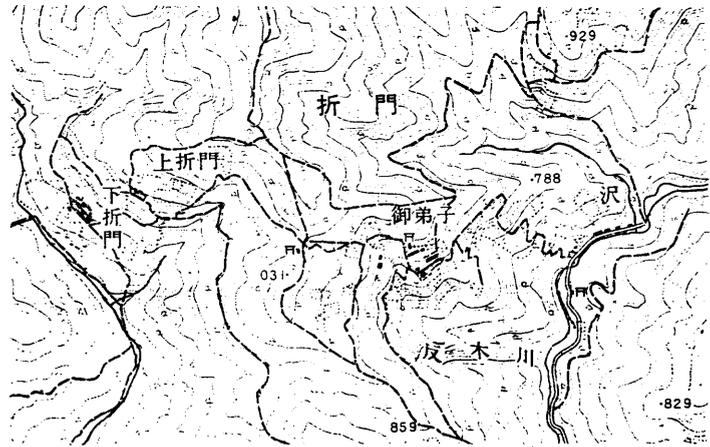
土地台帳による地名

下折門、上折門、沢、御弟子

(五) 八坂（はっさか）

沢部落を過ぎて反木川をさらに登ると約五〇〇メートルで川は二つの沢に分岐する。右の沢をさらに約二キロメートル入った、反木川の源流点に近い所に三ツ沢（みつざわ）の集落がある。集落とはいっても現在は二戸であるが、かつては五戸の孤村集落であった。

分岐した沢を左に約六〇〇メートル入ると、やはり反木川の源流点近くに印沢（おしてざわ）という現在は無人の住居跡がある。さらに左に急坂を里程七〇〇メートル、標高差二五〇メートル登った所が八坂の部落である。



折門の地図

三ツ沢、印沢、八坂、この三つの疎村集落が旧八坂村である。

「八坂八軒、沢三軒、御弟子は五軒で後生楽」という昔からのざれ言があるが、現在も八坂は八軒、三ツ沢が二軒、あわせて一〇戸、二七人の小集落である。折門村と同じく、旧幕時代は九一色郷一四か村の内であったが、明治二十二年九一色村が上・下分村するに当たって下九一色村に属し、昭和二十九年、折門とともに古関村に合併、三十一年下部町八坂となったものである。

甲斐国志によれば、文化

年間には二〇戸、六二人を数えていた。

「八坂村、石高七石四斗四升八合、戸二〇戸、口六二、鑑札四枚、下芦川村ノ南一里半ニ在リ、高萩村へ二里、根子村へ一里、各々坂路也、東ハ精進村ノ山堺ヒ、本村は九一色郷名ニミエズ、分村の事詳ナラズト云フ」

とあり、一戸当たり平均石高わずかに〇、三七石という全くの山間の孤村であった。地名は八坂、三ツ沢とも、いずれも土地状況によるものと思われる。

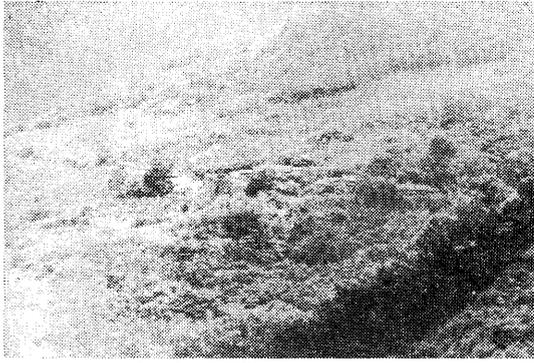
三ツ沢へは車を利用することができるが、八坂へは折門、御弟子と同じく徒歩に頼るしかない。

八坂峠頂上に近い孤村で、下部町集落の中で最高標高に位置する。本栖精進の村より高く、西八代郡内では富士豊茂に次ぐ海拔九六〇メートルである。

八坂部落は三つ沢にある山口姓の一軒を除いてすべて今福姓を名のり、単一の同族集団と思われる。

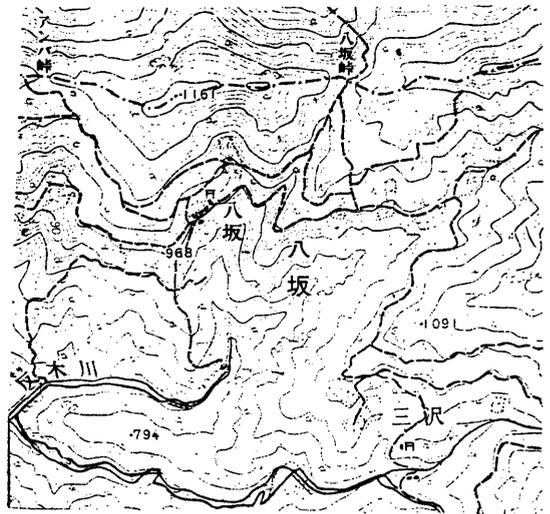
口碑によれば、甲斐源氏の一族、一条次郎忠頼（武田信義の嫡男、一条の庄現在の甲府舞鶴城付近に居を構える）の忠臣、今福善九郎が村の開祖であるといわれている。今福善九郎は一条忠頼の謀反をいさめたが聞き入れられず、ために病氣と称して館より辰巳の方向に当たる八坂の山中に引き込み浪人となったものであるといわれている。忠頼が鎌倉で殺された後は髪を下して淨閑と号し、主君のめい福を祈って八四歳の天寿を全うしたと言ふ。善九郎の墓は鎌倉期の作風をよく残した法きよう印塔である。

八坂も、折門も、前述したように、天正のころから九一色郷に属していた高萩村の枝村である。



今は無人集落となった上折門

九一色はもと工一色で木工の製品を年貢のかわりに納めることを許されていた村のことであった。中世の社会生活においてはヒノキ物は重要な日用品であった。ヒノキの材質を活かして、これを薄く削って円形または方形に曲げ、さくらの樹皮を細く割いて、これで綴じて作るの曲げ物ともいった。蒸籠（せいろう）飯つき（めしつき）柄杓（ひしゃく）篩（ふるい）三宝（さんぼう）などはその例である。これらの木工品を年貢のかわりに納めることを許されていた地域ということである。

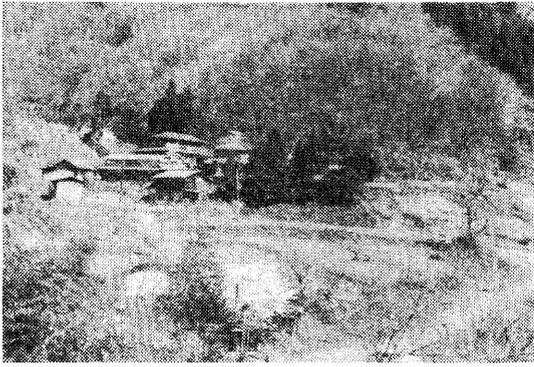


八坂の地図

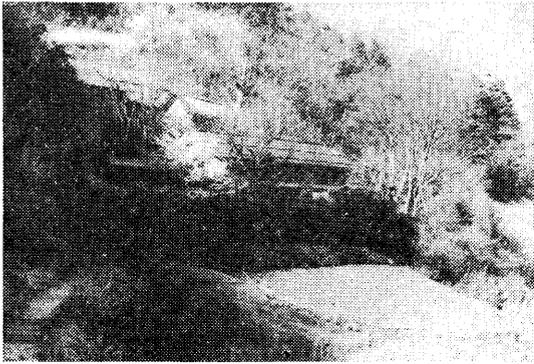
九一色郷は甲斐国志 古跡の部によれば「凡ソ本州、四方ノ山ニ居ル者多シト雖モ、狭隘カクノ如キノ地ヲ視ズ、イワユル高萩、三帳、下芦川、梯（かけはし）古閑、鶯宿、精進、本栖、西湖、九村ナリ、ノチ分枝シテ、中山、折門、埜、畑熊、八坂（八坂）合シテ十四村トナル」とあり、山村の多い甲州の中でも、これほど狭隘の地は他に例を見ないというのである。

これ程の山間へき地ではあるが、古道の中道往還の通っている地域であったことから、山岳地帯にもかかわらず、木工業のほか行商、運輸に従事する者も多く人口も増加し、はじめ工一色といった二、三の部落もやがて九か村となり、工一色九郷と総称されるようになった。それがいつころからか工一色を九一色と記すようになったという。旧幕時代にはさらに高萩村に五つの枝村ができ、九一色郷一四か村となったものである。

武田信玄の卓越した民政は天文九（一五五〇）年、奈良田、湯島、九一



三ツ沢部落



八坂部落

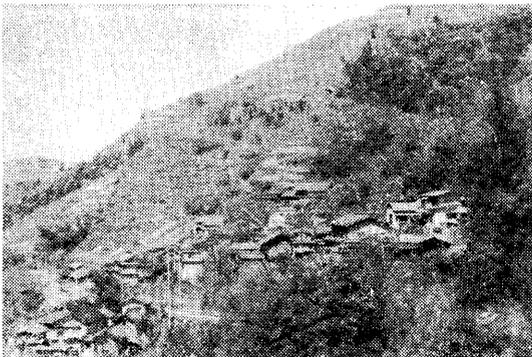
色の郷民に諸役免許の恩恵を与え、行商や運輸に従わせた。これはヒノキ物の生産が重要産業であったとともに、劣悪の立地条件から、農産物の徵税が下可能であったことによるものである。その後徳川家康は、沿革でも述べたように武田の民政を踏襲し、たくみに九一色郷在地武士団を懐柔して中道往還を経て甲州入りに協力させ、北条氏を抑えて甲州占領を完了した。武田家以来の九一色郷の特権は家康によって承認させ幕府の出先機関は九一色郷民のために六四二枚の鑑札を発行交付し、これを受けて九一色郷民は甲州地内はもとより、遠く駿河、信濃、武蔵、相模に往来して行商、運輸にたずさわったという。

八坂の鑑札四枚、折門の一五枚はこの六四二枚のうちのものである。

三ツ沢部落にある金山神社にはこの「諸商売役免許」の木札(鑑札)一〇三枚が保存されており、この鑑札は昭和五十四年四月、町の文化財に指定された。(詳細は第一三編参照)



中之倉の地図



中之倉

土地台帳による地名
大八坂 三ツ沢

(六) 中之倉

古閑地内で反木川は常葉川に合流する、この地点で久那土方面から来た県道は国道三〇〇号線に入る。このT字路を左折すると国道は常葉川沿いに中之倉峠へと登っていく。T字路から一、二〇〇メートル、標高差六〇メートルの所にある塊村集落が下中之倉である。さらに里程一二〇メートル、標高差四五メートルのところに孤村集落、灯(とぼし)の部落があ

る。灯を東側から常葉川に入る沢に沿って三〇〇メートル入った所に小塚（小柄）常葉川沿いにさらに里程一、五〇〇メートル、標高差一、〇〇メートル登ったところに中屋敷の塊村集落がある。これら国道三〇〇号線沿いに点在する下中之倉、灯、中屋敷、小塚の疎村集落が中之倉部（旧中之倉村）である。中之倉は水平距離二・七キロメートル、垂直距離一五〇メートルにわたって点在し、どの集落も、常葉川がつくった沢に面した斜面のわずかばかりの平地を利用し、または石垣積みで宅地を造成して軒をつけるように固まって集落をつくっている。

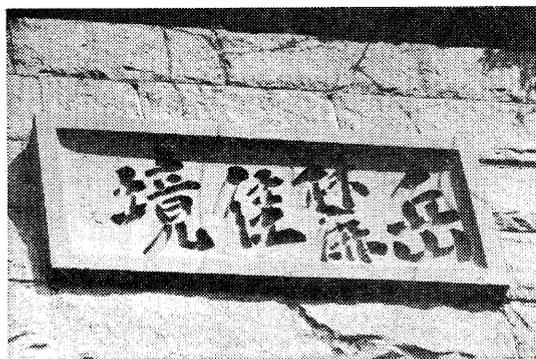
現在戸数は四七戸、人口一五八人でシイタケ栽培を主とする林業、養蚕のほかは職人、労務者、勤め人が多い。

旧幕時代は戸数四二戸、人口一八一一人、石高四五石五斗二升四合で、薪炭の生産、用材の切り出し等林業を主とし、紙すきも行われ、運上紙も上納していたようである。大正五年前ころまではまだ紙すき業者も十軒あり、西島和紙に匹敵する上質の和紙を生産し、この紙はからかさの紙に使用されていた。

往時は古関、釜額とともに古関の口留番所の関守を二人ずつ交替で勤め、また長坂御林の保護管理にあたっていた。そのために村の諸役を免除されていたという。

中之倉の地名については、佐藤八郎著「甲斐地名考」法師倉の項を参照に考察してみると、同書における法師倉の倉の説明の箇所を引用させてもらおうと次のように記してある。

『法師が傍示（標示）であることに次いで法師倉の倉はどうであろうか、江戸時代、紀州徳川家の儒臣、井田南陽



徳富蘇峯の筆による銘碑

は「くぐら」は山の峻険なることを云う。」といい、また「植物渡来考」で知られる白井光太郎博士も「くぐら」は岩のことなり」と説いている。本県の芦安村は、もとは芦倉村と安通村が合併したところであるが、芦倉の「くぐら」は急峻な山腹の岩石の露出した所をいう名である。富山県の立山登山口で知られる芦崎寺、その北西方の岩崎寺の両部落到共通の崎も岩石の露出した崖を意味することばで、法師倉、芦倉、「くぐら」と同じである。

古語辞典には「くぐら谷」ということばがあり、「くぐら谷とは谷間のこと、一説には岩の現れた谷のことを云う」とある。

また、地名の研究には「クラはけわしい所、元の意は人為的に岩石を集めた所」とある。

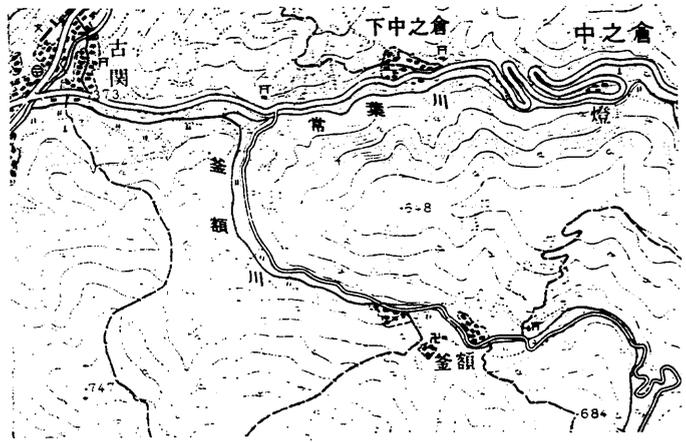
これらのことと、中之倉の地形から考えて、中之倉の「くぐら」もやはり「山の峻険なる」ところ、また、岩の露出した谷間」の意と解することが妥当ではないかと思われる。常葉川の谷の落石、流石が多く、耕地も道も、石を除き、また石を積んで作ったものであろう。往時、この地に住むためには人々は石をどう始末し、どう利用するかまことに石との戦いであつたらうと思われる。

ここから中之倉の地名が出たものであろう。しかし「中」の意についてはどう解したらよいものかわからない。一説には「下、中、上とあつたそのうちの中であらう」というものもあるが、下、上がいずれに当たたるのか、見当がつかない。

地名にまつわる口碑、伝説は多く、集落発生の古さをうかがわせている。

戦国の世、戦いにやぶれた、手負いの武士の頭領が逃れてきて、血と泥に汚れた衣類を洗った瀧つぼが芦洗場（足洗場）であり、陽がくれて里人から灯火を借りた場所が灯（とぼし）であり、鎧を脱ぎすてた場所が鎧畑、もつていた小柄をなくした所が小柄（小塚）隠れた場所が石小屋、牛首は打ち首がなまったものだとの説もある。

中之倉も根子と同じように赤池性が多く次いで渡辺、伊藤、内藤となつ



釜額の地図

釜額の湖側入り口の上部に埋め込まれている石額「岳麓佳境」は、徳富蘇峰の筆によるものである。

中之倉トンネルの脇の湖岸には中之倉地内最高標高に居住する単戸住宅、浩庵荘がある。この脇道を国道からそれて下り、湖岸を進み、長崎をまわると、全国モーターボート競走会連合会本栖研修所がある。この先二〇〇メートルに本栖湖に注ぐ沢があるが、ここまでは中之倉地内である。これからさらに広川原を過ぎ、竜ヶ岳（二四八五メートル）のふもとを進むと粹沢（わくん沢）という沢へ出るが、ここまでは釜額地内であって、ここが上九一色村、本栖と下部町の境界になっている。

ている。

国道三〇〇号線は、つづら折に急坂の中之倉峠を登っている。中屋敷から七・四キロメートル、標高差三二〇メートル登った所で中之倉トンネルに入る。トンネルを抜けると、全く突然に真正面に広大な本栖湖と、富士の霊峯がそそり立つ雄大な風景が展開する。

このトンネルは、昭和十三年に五年の月日と当時の金一十万円を費やして完成したもので、この眺望を計算に入れ三度にわたる測量と設計を重ねて掘さくされたものだという、このトン

川頭、所久保、三つ沢、百合切、西夏作、霖間、辻、地藏ノ上、久前戸、小淵、牛房畑、石小屋、東川戸、中川原、南郷、鋸畑、堰戸、向山、小塚（小柄）、日向山、大平、古屋敷、沢ノ神、間当、川平、大門、夏作、小林、上間当、久保、狐穴、浅日、西沢、萩ノ平、上ノ山、久保坂、小沢、黒木、芦洗場、滝脇、貉石、灯、高畑、牛首、立岩、川尻

土地台帳による地名

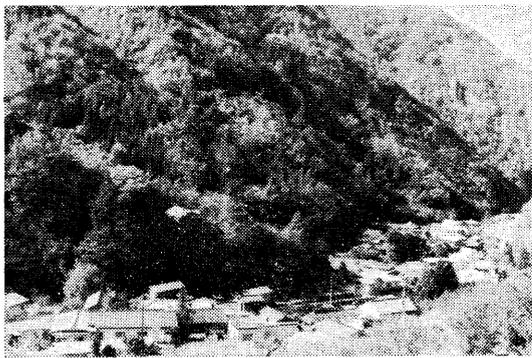
(七) 釜額（かまびたい）

古関から中之倉へ入る手前で、南から出る釜額川が常葉川に合流している。上流で常葉川を渡り、釜額川に沿って南へ入る道路がある。国道からはなれて、この道路を約一キロメートル入った所に釜額の集落がある。釜額川に沿って列村形態をとる谷あいの小集落である。

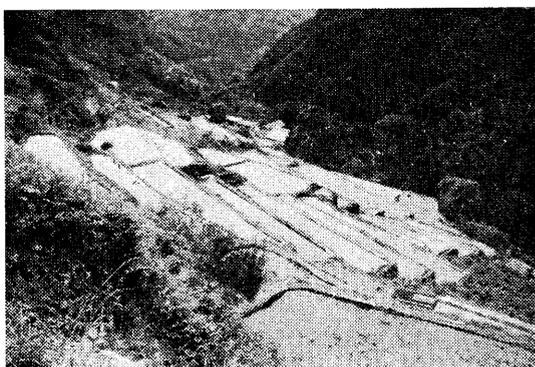
道はさらに仏峠を登って、本栖湖、川尻に至っている。本栖湖長崎から川尻を通り竜ヶ岳の間まで地域も釜額の地内である。

現在戸数は二三戸、人口九八人である。旧幕時代は釜額村では、古関、中之倉と、ともに交代制で古関の関所の関守に従事し、また長坂御林の管理に当たっていた。

旧幕時代の戸口は一九戸、九九人、村石高、三〇石八升四合であった。明治初期は二三戸、一一九人、昭和初期は二三戸、昭和四十年は二八戸、一五四人と増加したが、それから一四年間で現在の戸口に減少している。むかしから薪炭、シイタケ



釜額 部 落



大磯の千枚田

などの林業が中心で、釜額川河岸段丘を利用した水田はほとんど自家消費用である。

昭和四十五年、民宿村として発足し、現在はほとんどの家が民宿を営み、部落がこぞってその振興に努力している。カレンダー民宿というユニークな方法もとり入れ、清流を利用した川魚料理、シイタケをはじめ豊富な山菜料理は都会人の好評を呼んでいる。赤池清正による土鈴の焼き物は独特な味をもちこの地の特色にもなっている。現在は土鈴だけにとどまらず、カレンダー民宿に

方外院第二世隨応養順和尚によって開山された金松山長沢寺がある。

土地台帳による地名

新田、上ノ山、上手屋敷、向平、寺ノ上、朽柄沢、熊穴、下ヲゾリ、柿手向、堀田、宮脇、姥ヶ沢、滝ノ前、中瀬、向山、居平、氷上、姥僧作、保山、小屋ノ入、小屋ノ沢、渡場、三ツ木、葦沢、柿平、下沢ノ戸、上沢ノ戸、長坂、川平上、小沢向、滝向、灯向、榎、小塚向、小芝、三ツ沢、川尻、端足日向

釜額は一村すべて赤池姓である。単一同族集団か否かはわからないが、系列を同じにする同族集団の集まりであろうと思われる。

釜額から仏峠へ登ると、その裏側は本栖湖と川尻である。長崎から川尻をまわり、南岸の上九一色村との境界までは釜額地内に入る。

川尻には往古、金山があり、広河原一帯は一時川尻千軒と呼ばれにぎわったことである。近年再掘され、昭和十年ころまでは細々ながら採鉱が行われた。掘り出された鉱石はカマスにつめられ、本栖湖を舟で渡り茨城県へ送られて精錬されたことである。現在は廃坑となっている。

川尻地内には町営のキャンプ場も設けられている。

(八) 大磯小磯

久那土地区、芝草の部落から三沢川に沿ってさらにさかのぼると、河岸段丘上に、または河岸の山腹にいくつかの集落が点在する。これが大磯小磯の部落である。(旧大磯小磯村)

山深い谷間の村に大磯小磯の地名はそぐわない感じがするが、村名の由来について次のような伝説がある。

「芝草と瀬戸の境の山頂に陣場という所がある。鎌倉時代、曾我某という者が陣を張った所という。しかし、不幸にして戦いに敗れ、ふもとの沢で自害して果てた。今もこの地を自害沢という。近くの林の中には、その者の墓と伝えられる苔

ふさわしく干支にちなんだ小動物人形の焼き物も作られている。

地名についてはさまざまな説があり、どれであるかは定かではない。

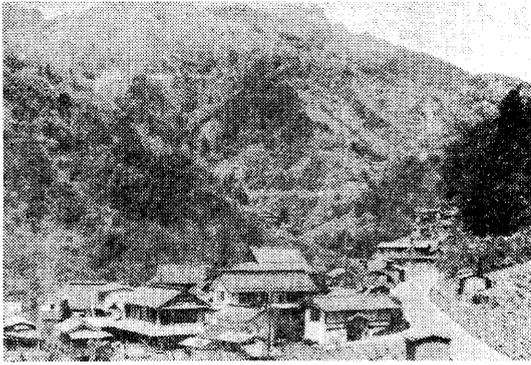
甲斐国志には「山嶺ノ形ニヨリテ起ルナルベシ」とされている。

また一説には山嶺の形(長坂峠)が鎌の上端の形に似ているところから、鎌額というようになり、それが釜額となったともいう。

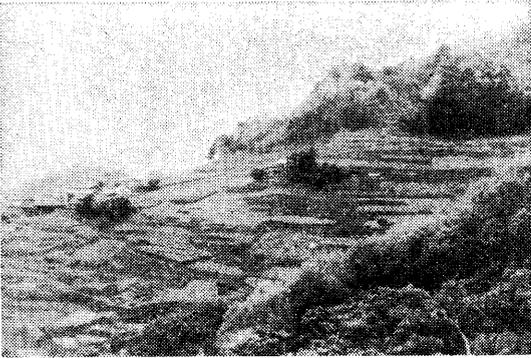
また他説として、釜額川の水行が、長坂御林から見下ろすと、鎌の上端のカーブに類似しているところから鎌額となり、さらに釜額となったという山に対して川を起源とする説もある。

また伝説として、武田勝頼家臣、根子弾正之助が主家滅亡の時にその従者釜額五郎左衛門を伴って残糧米、大マス五升を背負ってこの地に入り、根子弾正は根子部落を、釜額五郎左衛門は釜額部落を開拓したという話もあるが、村落発生の時代考証上からも年代的に大きな無理がある。

部落内上手屋敷には仁和三(八八七)年に信州諏訪大社から祭神を分霊勧請して祀った諏訪神社があり、また渡場には、文禄元(二五九二)年に



大磯小磯

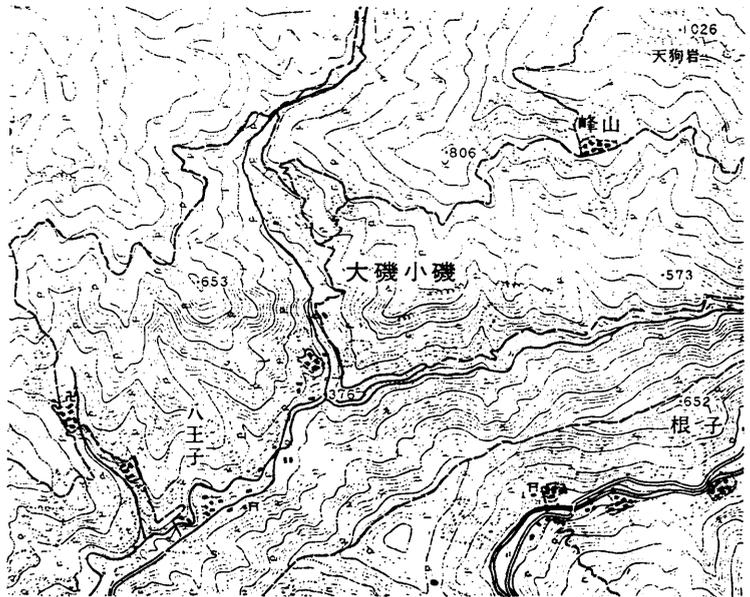


大磯小磯の峰山部落

むした宝きょう印塔が残っている。曾我氏自害の後、妊娠中の妻は一子を伴ってはるばる相模の大磯から夫を尋ねてきたが、夫の自害を聞き落胆して、その足で山奥の焼間（甲斐国志では谷隈、台帳地名はヤクマ）にたどりつき、やがて生まれた子どもと三人で隠れ住むことになった。これが大磯小磯の始まりであって村名は故郷、相模の大磯をしのんでつけられたものである。」

部落は、諏訪神社のある八王子、そこから北西の沢を登って下小磯、中小磯、上小磯、八王子から、そのまま大磯川沿いに上ると田が村を経て、仏僧の下に出る。ここで三沢川は二つの谷川に分岐する。この分岐点の左岸上段に旧古閑小学校磯分校が、今は廃屋となつて残っている。大磯川に沿って上ると仏僧の部落である。さらにこの上流に大磯の部落がある。分岐した沢を右に入ると道は一度は沢ぞいに進むが、すぐするどく左カーブして左側の大磯川の上段に出る、仏僧の対岸に当たる。この道を登ること約一キロで大磯部落の上に出る。道の左側、約一〇〇メートル下の沢にか

けての急斜面に、峯山からの豊富な湧水を利用して水田が作られている。斜面を削り、石を積み、階段状に作られた水田は千枚田と呼ばれ、規模こそ劣るが、有名な能登の千枚田、信州の千枚田を想起させるものがある。この道をさらに登り、水船から六・五キロ旧磯分校から四キロの地点に峯山の集落がある。巨大な峯山の天狗岩の下、海拔八〇〇メートルの棚状の山腹にある全くの山頂孤村である。これら八王子、下小磯、中小磯、上小磯、田が村、仏僧、大磯、峯山の孤村集落の集合体が大磯小磯部落である。



大磯小磯の地図

現在、戸数は五〇戸、人口一八一人、主として林業、養蚕を営むが、今は職人や勤め人が多くなっている。近年、昭和五十二年度林業構造改善事業として、峯山まで幅員三メートル、全長五、一七〇メートルの道路がつくられ、峯山まで自動車を利用することができるようになった。

旧幕時代は、芝草とともに川筋は異なるが古関七か村に属し戸四九、口二二九、馬三、村石高五八石九斗九升で一戸当たり平均石高一・二石、一戸平均家族数四・七人であった。

明治、大正と戸口も増え、昭和四十年、国勢調査では六〇戸、三〇五人を数え、一戸当たり平均家族数も五人であった。

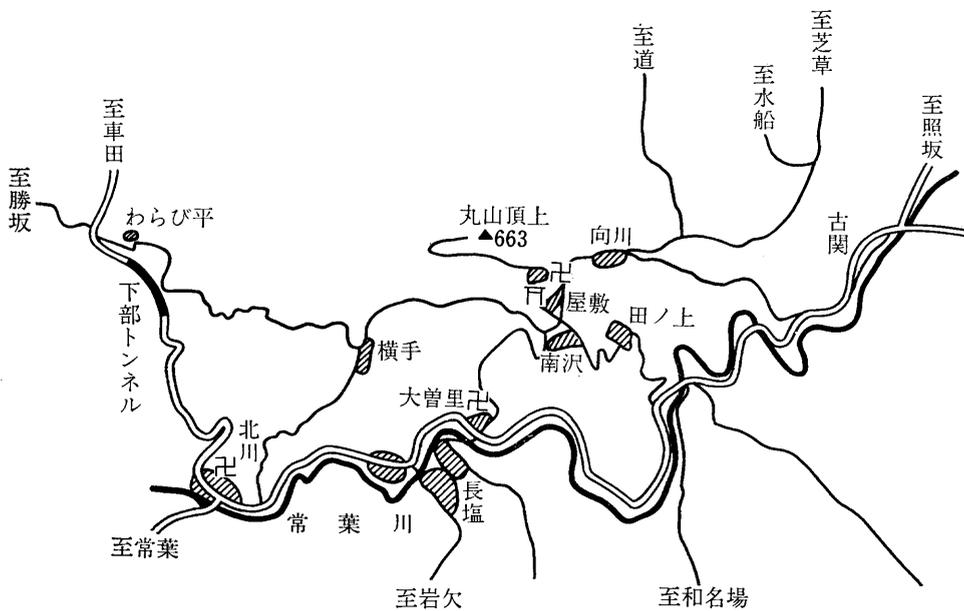
しかし十四年たった現在は、戸数で一〇戸、人口で二二四人の減となり、一戸当たり平均家族数も三・六人となって過疎化の激しさを如実に表わしている。人口の過疎化はまた、その構成の高齢化をも伴って起きる。

磯分校も昭和三十八年には一学級ながら三一名の在籍児童が勉強をしていたが、昭和四十八年にはわずか二名となってしまい同年三月折八分校、根子分校とともに廃校となってしまった。

大磯小磯には伊藤姓、赤池姓が多く、次いで田中、伊東、内藤、樋川姓がある。

土地台帳による地名

赤芝、三枚畑、横畑、八王子、大畑、八王子向、八王子横手、下小磯、中小磯、上小磯、田ヶ村、仏僧、仏僧向、新居、家ノ入、家西、下向、井戸ノ上、バツジロウ、ヨスマ、ゴウシ久保、細ナギ、黒棚、船久保、大磯、大磯向、アマノ木沢、自害沢、滝ノ沢、スガイ沢、栢木沢、西沢、小沢、埜沢、貉川、釜淵、大渡、山ノ神、甲ゲ田、森向、間原、ヤクマ、カクラ、大峯山、峯山、大日陰、栗矢、ピリ坂、茅山、中塚、西ノ入、日影林、蛾ヶ岳、熊蔵、棚上、



丸畑の地図

(九) 丸畑 (まるばたけ)

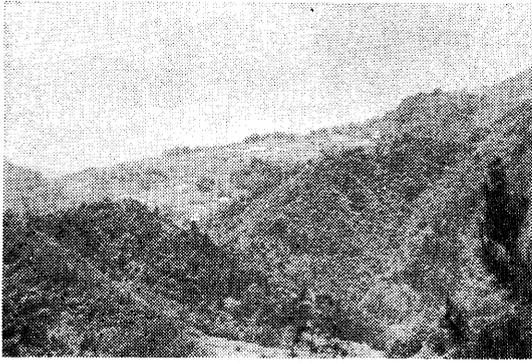
古関三宮司橋から常葉川に沿って国道三〇〇号線を約三〇〇メートル下り、さらに右折して一、三〇〇メートルほどの山道を登りつめたところに丸畑の集落がある。

丸畑は、丸山の頂上、標高五〇〇メートルの南側緩斜面に開けた集落で、丸山に開墾された大きな畑という意からつけられた名であろうといわれている。

笠(笠山) 向川、屋敷、田ノ上、南沢、横手の六つの小字からなる疎村集落である。

地域的にも、集落分布的にも、村落形態をとっているが、なぜか昔から北川村と古関村に分かれて所属していた。現在も横手、笠、南沢は北川の大字に属し、屋敷、田ノ上、向川は古関の大字に入っている。

現在、大字古関である屋敷、田ノ上、向川の戸口は二五戸、七五人である。



丸畑の遠望

昔からの農業集落であるが、ほとんどが畑作中心の兼業農家で、米作は、田ノ上部落の者が常葉川沿岸の河岸段丘に降りて耕作している。

他は主として養蚕や畑作であるが、近年南面傾斜地を利用してエンドウなどの野菜の出荷も行われている。

昔は本栖に産出する「スズ竹」を利用して箕(ミ)を作り、特産物として広く各地に売り出していた。

享保三(一七一八)年、向川部落に生まれた木喰五行上人は、九十三

歳で没するまで広く諸国を行脚、千余体の木彫仏像を残したが、近年その素朴な芸術的価値を評価され、丸畑に現存する一〇体の仏像と関係文書は県民俗文化財に指定されている。(詳細は第十三編第四章参照)

旧富里分丸畑のうち、笠はすべて岩松の姓で占められ、横手もまた伊藤で占められているが、南沢は生松、赤池、小林の姓がある。

古関分丸畑は伊藤、赤池の姓が多く、屋敷は伊藤、赤池、向川も伊藤、赤池が大部分であり、田ノ上はすべて伊藤である。

屋敷の地名は特に屋敷跡ということではなく、地形的なことからつけられたとのことである。田ノ上、向川なども地形地名で、集落形成との関連はない。氏神はそれぞれの小字集落にあり、各小字部落は同族集団的なおいが強い。

現在は三沢口、古関口など自動車で自由に往来できるが、西八代縦貫道路ができるまでは、わらび平から横手へ入り、北川、長塩、古関へ出る重要な徒歩道の道筋であった。

